

324
559

6 7 8 9 6^{cm} 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 7^{cm}

始



324-559

小野清秀著



眞宗哲學

東京 廣文堂書店發行

大正
7. 3. 19
内交



自序

宗教は理論に非ずして信仰なり、殊に絶対他力教たる眞宗は、愚人悪人を正機とし信心爲本を旨とするものなれば、其間理論を挟む餘地なく、又何等智解の必要あることなし、然れども全佛教は固より眞宗の信心は決つして神秘的のものに非らず、又更に盲目的にもあらずして、其根底には絶大なる哲理を含み、彌陀の正體は如何、死後生活は如何、西方極樂とは如何、六字の名號は如何、願力廻向とは如何等皆此れ哲理的に此を論明し得るものなり、左れば信心能入は無論なるも、智以能度も亦決つして忽にすべからず、故に未信の者に對し、將又教化の資糧として此等の理義を闡明するも亦

敢て徒爾と云ふべからず、尤も此は先哲既に之を盡し、名著幾千種に及べるを以て敢て、蛇足を要せざるが如きも、更に此を時代的に整理組織して多少其面目を新らたにするは、錦上一瓣を加ゆるの趣なしとせず、若し夫れ誤つて其神聖を汚すことありとせんにも、亦以て往生の一因なるを失はざるべきは堅く信じて疑はざる所なりとす、本書の命題並に公刊の理由正に斯の如し

小野 清 秀 識

眞宗哲學

目次

緒論……………一

第一章 傳統篇

第一段	發端……………	五
第二段	印度の二師……………	七
第三段	支那の念佛……………	一二
第四段	支那の三師……………	一四
第五段	日本の淨土教……………	一七
第六段	日本の二祖……………	二一
第七段	親鸞聖人……………	二五

第八段 十派の分立……………三二

第九段 覺如と存覺……………三六

第十段 蓮如上人……………三七

第十一段 中興以後の概見……………三九

第二章 典籍篇

第一段 三部經……………四六

第二段 傍依の諸經……………五〇

第三段 七祖の著書……………五二

第四段 親鸞聖人の著作……………五三

第五段 餘他の典籍……………五五

第三章 宗名篇

第一段 彌陀教及無碍光宗……………五八

第二段 一向宗……………五九

第三段 門徒宗……………五九

第四段 本願宗及本願寺宗……………六〇

第五段 淨土宗及淨土眞宗……………六〇

第六段 眞宗及絶對他力教……………六二

第四章 教理開展篇

第一段 釋尊の成道……………六四

第二段 佛教の標幟……………六八

第三段 淨土思想の由來……………七〇

第四段 釋尊の淨土觀……………七二

第五段 龍樹天親の淨土思想……………七七

第六段 論註と安樂集と觀經疏の比較……………八三

第七段 寓宗としての日本淨土教……………九三

第八段 淨土教の獨立……………九七

第九段 絶對他力教……………九九

第五章 判教篇

第一段	判教の意義	一〇三
第二段	七祖の判教	一〇六
第三段	二雙四重	一一二
第四段	四法建立	一一四
第五段	三種の四法	一一七
第六段	時機及宗風	一二九

第六章 佛陀篇

第一段	南無阿彌陀佛の字義	一三三
第二段	阿彌陀佛の因位	一三二
第三段	法藏比丘の選擇と本願	一三八
第四段	法藏比丘の苦行と成道	一四四
第五段	三種の彌陀	一四八

第六段	三佛身の關係	一五二
第七段	久遠の彌陀と釋迦	一五七
第八段	六字の名號	一六一
第九段	特殊の阿彌陀論	一七九

第七章 極樂淨土篇

第一段	極樂淨土の起源	一八五
第二段	極樂淨土の變遷	一八九
第三段	彌陀淨土の現勢	一九三
第四段	十萬億土の意義	一九八
第五段	指方立相の意義	二〇一

第八章 信心爲本篇

第一段	大經の三信	二〇七
第二段	觀經の三心	二二三

第三段 念佛爲本と信心爲本……………二二七

第九章 惡人正機篇

第一段 三種の機根……………二一九

第二段 二種の機類……………二二三

第三段 惡人正機……………二二三

第四段 賢者救濟難……………二二五

第五段 二經の會釋……………二二六

第十章 願力廻向篇

第一段 願力の意義……………二二九

第二段 廻向の解説……………二三一

第三段 二種の廻向……………二三二

第四段 絶對他力……………二三四

第十一章 往生即成佛篇

第一段 三種の往生……………二三七

第二段 正定聚と平生業成……………二三九

第三段 往生即成佛……………二四二

第十二章 宗風篇

第一段 報恩行業……………二四五

第二段 雜修排斥……………二五〇

第三段 神祇と祖先……………二五三

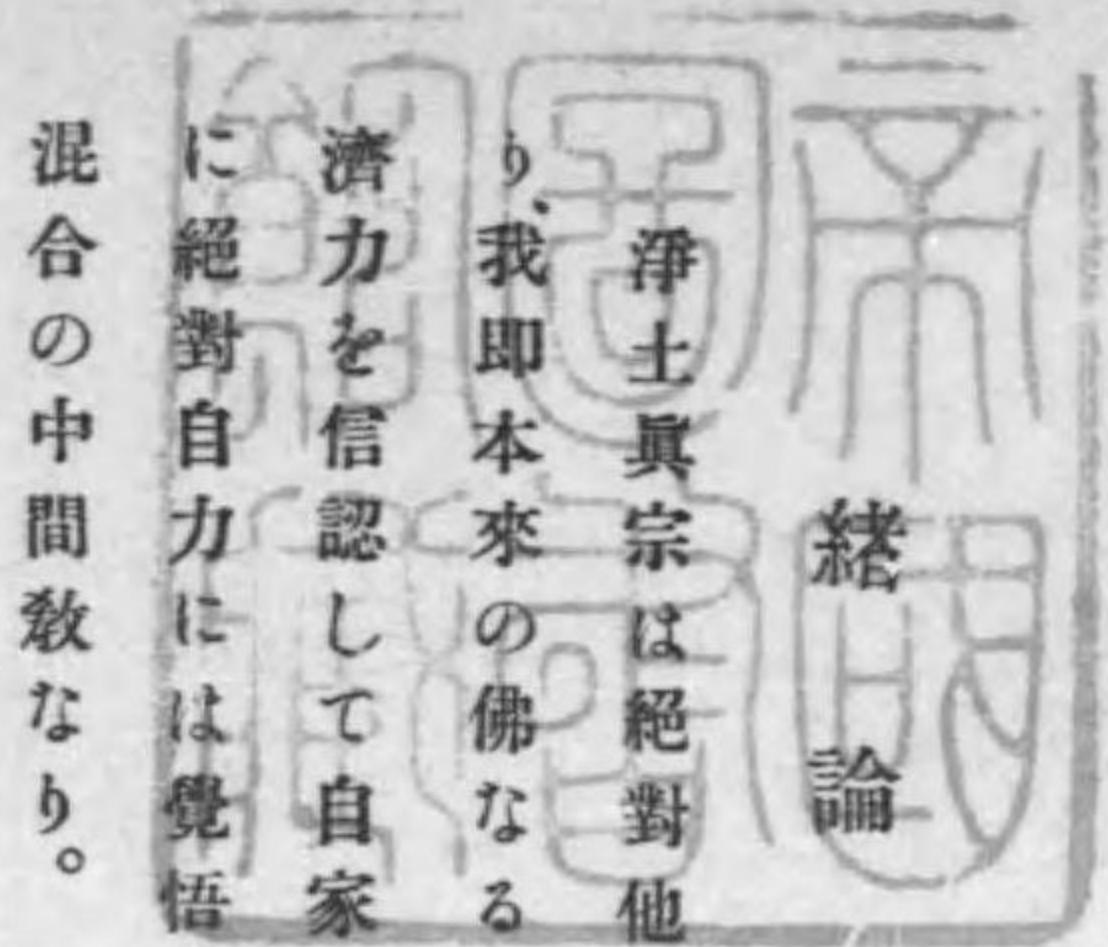
第四段 肉食妻帶……………二五八

第五段 王法爲本……………二六二

眞宗哲學 目次終

眞宗哲學

小野 清秀 著



淨土眞宗は絕對他力教なり、絕對他力とは信者が如來の光明界裡に生息するの謂なり、我即本來の佛なることを自覺して、其面目を體現するものは絕對自力なり、如來の救濟力を信認して自家の可能性を呵遣し、一功を悉く佛力に歸納するは絕對他力なり、故に絕對自力には覺悟を起準と爲し、絕對他力には信心を爲本と爲す、其他は皆之れ自他混合の中間教なり。

絕對自力の前には如來も其光を失ひ、釋迦も達磨も齊しく是れ一山百文の代物たるを免れず、又絕對他力の下には學問智解も其價を認められず、戒行作善皆是れ雜修にして却つて成佛道程の汚點たるなり。

吾人は今茲に自力教と他力教との優劣是非を云々するものには非らずして、宗教の極致は絶対自力と絶対他力との二教に在りて、此の兩者を外にしては眞の宗教なるものあるなく、又此の兩者に依らずして眞の成佛道、眞の宗教生活に入り得べきにあらずして、他は悉く是れ邪教迷信なりと斷言して憚らざるものなり。

造物主に救済力ありとする時は、何故に救済を要するものを造りしかの自家撞着に陥るべきは、基督教等の如き神人隔歴の惟一神教に對する古來の批難なり、之れに對して佛凡不二、迷悟善惡は因果律なる自然の公法に依るものとするは佛教の通見にして、現象界の解説は此の他に求むべからず、然り而して如來の救済力は絶対そのものに有する最初固有のものにもあらず、又基督其人の如き優秀なる人格の徳化、そのものみにもあらずして、如來が因位の誓願力とそれを成就せし修業の効果、即ち歴史的偉人の人格力と、絶対的實在格との致一せる境界より因果の公則として、自然に發露し來れる無碍の絶対力なりとす。

左れば如來の救済力、願力廻向、絶対他力の研究は學問としては至上の哲學にして、宗教としては究竟の懸案なり、彼の惟一神教等の内容を目して宗教は迷信的なりとする

哲學者將又宗教は信仰を本と爲すと稱して其研究を嫌ふが如き宗教家は、俱に己を知らざるものにして固より論ずるの價なし、斯の如き趣味と價值とを有する大問題に對し、時代的に之を解説するの肝要なるは何人も承認する所なるべく、信は固より能入なるも盲目的信仰は佛教の執らざる所にして、願力廻向の深旨を會得するに非らざれば、眞信の起り來るべき契機なし、従つて又絶対他力教の成立すべきの理なければなり。

由來淨土教の原産地は固より印度なるも、印度の夫れは粗曠にして又、支那の淨土教は璞の如く、而して日本の他力教は純然なる名玉と爲れり、更に又淨土眞宗は佛教の所屬なるに相違なきも、所謂佛教に附屬せる一切の裝飾物をば悉く之を撤回して、一見他の佛教諸宗とは全然別物なるが如き趣を呈し、所謂絶対他力教として完成せり、絶対他力教なるものは、釋尊の純一なる信念なりしや否やは別問題なると同時に、佛教の中心なるや否やも亦疑問なるも、他力の信仰は人生の事實にして宗教の眞髓たるは疑ひなき所なり。

更に又翻て未來の問題を考査するに、如何なる哲人又は極端なる唯物論者と雖も、死後の如何に對する懸案疑懼を其腦裡より全然取去ること能はざるは、是亦誣ふべから

ざる人生の事實なりとす。

次に又時の古今を論せず、國の東西に關せず、人種文野の如何を問はず、死後生天の觀念希望は如何なる人類と雖も、之を有せざるものなく、唯其希望を發現するの形式を異にするに過ぎざるなり。

以上の如き人生の事實に基き、未來の問題を解決するは、あらゆる人生問題に於ける最後の審判なると同時に、一切の解決なり、此の究竟的解決を得ざらんか、人生は結局無意義にして、如何なる英雄豪傑と雖も、全く醉生夢死の獸的生活に了るを免かれざるものなり、然り而して斯の大問題を解決して、人生の全局を救済すべきものは、全然人生に超越せる絶對、又は吾人と内的經驗を同じうせざるもの、能くすべきに非らざるは、一見知り易き理なり、茲に於てか因位の苦行、如來の願力、往生淨土、平生業成などの意義深重なると、其研究の緊要なるは必然の結論にして、吾人の此の舉亦敢て徒爾ならざるべきを明らめ得べきなり。

第一章 傳統

第一段 發端

釋尊に淨土教の思想ありしや、否や、若し之れありとせば、其内容は如何なるものなりしか、從つて淨土教所依の三部經は、果して釋尊の直説なるや、否やの問題は、頗る趣味ある研究の課題なるも、そは教理發展篇に於て、自と接觸すべく、又必ずや解會せざるべからざる懸案なれば、今茲には暫く常途の説に隨ふて、淨土教の發端を概説すべし。

人生の罪惡と無常とを基礎とせる大悲觀に發心して、此等の苦惱を脱却せん爲め、幾多の煩悶、多年の苦修を積み、遂に宇宙の眞理に徹體し、安樂常住の境界に到達せる大聖釋尊は、茲に教化救済の活動を起し、五十年の久しきに亘りて、大小半滿權實淨の説法に力め、其晩年に當り、或時王舍城の附近なる靈鷲山即ち法華經を説きしと云ふ靈場に在つて、無量壽經を説けり、此は阿彌陀佛の因位たる法藏菩薩が超世の大願を起し、難行苦行を爲して、淨土を撰擇する次第、即ち如來淨土の因果由來と、四十八願を以て念佛衆生を救済せんとする衆生往生の因果とを述べたるものなり、眞宗にては三部經の中にも特に此の無量壽經を重んじ、大經と稱せり。

斯くて後王舍城主たる頻婆娑羅の太子阿闍世は、惡友と相謀つて父王を執へ、之を七

重の室内に幽閉して、其位を奪へり、然るに其母韋提希は、夫王を密に救ふて飢へしめざりしかば、阿闍世は大に怒りて母を斬らんとせしに、耆婆月光の二臣之を諫争せし故、殺をば止まりしも母をも亦遂に深宮に幽閉せり、母君は苦悶に堪へず、釋尊に救済を求めければ、釋尊は密に往て觀無量壽經即ち觀經を説き、阿彌陀佛の大悲を明らかにし、逆惡の罪人も最後臨終の時佛名を稱へて極樂往生を得ることを諭せり。

其後釋尊が入滅に近き頃、舍衛國の祇園精舍に在つて、舍利弗以下の諸弟子に對し、西方極樂淨土の有様と阿彌陀佛の不可思議の功德とを説き、念佛往生を勧めたり、此の説を阿彌陀經と云ひ、又小經と云ふ。

以上の三部經は第一大經は佛の智慧を主として説き、其説所及聽衆も亦堂々たるものなり、第二の觀經は家庭説法にして女人を對機とし、佛の大悲を現はし、第三の小經は門弟に對する遺教的のものにして、佛の功德力を示せるものなり。

三經の説時及順次に就ては異説ありて、適確を求むべからざるも、觀經は阿闍世に關する歴史的の事實を動機とせるものにして、阿闍世の篡位は善見律に依れば釋尊入滅の八年前即ち七十三歳の時と稱し、又涅槃經に依れば佛滅三四ヶ月前と爲り、未生經は

二三ヶ月前と爲すの三説あり、其他の諸經にも阿闍世に關する記事極めて多し、觀經の説時既に斯の如しとすれば、大經は其文の内容よりして觀經以前の所説たるべく、法然聖人は觀經に法藏比丘願力所成、又は法藏比丘四十八願等あるも、四十八願の何たるを説かず、然るに大經は之を示し、又大經には彌陀成佛時の問答等あるを見れば、先づ大經を説て彌陀淨土の因果を示し、次に觀察願生を勧むる觀經を説くべきは自然の順序にして、之を大前觀後、三文一理と云へり、然るに平等覺經、大阿彌陀經、阿闍世王受決經、普超三昧經等に依れば、阿闍世王父子が發心悔過の際に大經を説ける如き傾ありて、觀前壽後となるべく、従つて其内容は觀經の略説の點を詳説せりとも云ひ得べきなり、次に小經は觀經に於て諸行と念佛との兩立を許したるを、小經にては諸行を廢して念佛のみを立せる點よりすれば、當然觀經以後の説たるべきものなりとす。

猶以上三部經の他、往生淨土阿彌陀佛の事を説けるものは、華嚴經、法華經、隨求陀羅尼經、尊勝陀羅尼經、般舟三昧經、維摩詰經、入楞伽經、金光明經、大般若經、密嚴經、寶積經、大日經等二百餘部に及べり、委しくは阿彌陀佛説林等に記載しあり。

第二段 印度の二師

印度に於ける小乗佛教は十八部の分派を見るに至りしも、歸する所は上座大衆の二部、即ち有空の二論、進取と保守の二派に過ぎざりき、夫れと齊しく大乘佛教も亦法相三論の二宗有空の争に止まりて、華嚴經あり法華經等ありと雖も、そは有空の孰れにか收められて、華嚴宗法華宗等の分派を見るには至らず、殊に禪、淨土、密教の如きは、孰れの經論にも其鋒鏑を顯はし、又各人師は悉く之を兼修せざるものなしと雖も、未だ曾て所謂禪宗、淨土教、密教なるもの獨立したる教派と爲り、又教團として成立したることなし、故に支那日本に於て成立せし宗派的觀念を以て、印度の佛教を批判せんとせば大なる僻見を來たすべし、要するに印度の佛教、六千餘卷の經論は、大なる吳服問屋の如し、左れば各自に其好む所を購ひ來りて、之を適恰の衣服に仕立たるものは、支那日本の各宗派なり、各祖師なり、古着屋と吳服屋とは、同一種類の商買家なるも、其の又大なる徑庭あることを忘るべからず、親鸞聖人の仕立たる淨土眞宗は、固より印度の産物に相違なしと雖も、そは反物にして古着にはあらざりしなり、然り而して聖人が印度に於ける淨土主義の撰擇に就ては、先づ淨土往生を説ける二百五十餘部の經藏中より特に三部經を拔擢せり、茲は支那に於ても亦法然聖人に於ても同一なりしが、三部經中特に無量壽經を主

要のものと爲せしは、法然聖人の淨土宗と多少其趣を異にし、續て淨土教を論せし幾多人師の中に就て、特に龍樹、天親の二人を選んで、三國七高僧即ち眞宗七祖の筆頭に立てたり、元來印度にては馬鳴の起信論、無著の攝大乘論、堅慧の寶性論、安慧の大乘阿毘達磨雜集論等を始めとして、淨土説に關するもの四十五部の多きに及べるも、眞宗にては龍樹の十住毘婆娑論中の第九易行品、及同師著十二禮、天親作の無量壽經優婆提舍願生偈即ち往生論を取りて、其他をば顧みざるなり、淨土宗にては三經一論と稱して天親の往生論をば用ゆるも、龍樹の易行品をば傍依と爲し、法然聖人は龍樹を以て傍らに淨土往生を明かす人と爲せり、之れ亦眞宗と淨土宗との上に現はれたる一異點なり。

上述の意義に於て吾人は印度に於ける淨土眞宗の系統を叙するに、教主釋尊、否教主阿彌陀如來、如來の代官代辯者としての釋尊、開教の高祖として龍樹、第二祖として天親を傳へざるべからず、然るに龍樹、天親共に八宗の祖師と敬はれ、千部論師と稱せらるるもなれば、苟くも佛教に志あるものは、何人も其傳説を知らざるものなければ、吾人は今茲に淨土教に關係の概要のみを述べし。

龍樹は佛滅後七百年の頃、南天竺波羅門の家に生まれ、幼より聰明早く波羅門の學匠

と爲り、其才を頼んで不倫の行を取てせしが、後ち愛慾は苦惱の本たることを觀じ、佛教に入りて大小の經論を讀破し、諸國に遊歴して幾多の賢哲を論壓し、大智度論、中觀論、十二門論等を造りて、大に空部大乘の法幢を盛にし、遂に華嚴經に依りて十住毘婆論を造り、其中に易行品なる一章を設け、

佛法に無量の門あり、世間の道に難あり易あり、陸道を歩するは則ち苦しく、水道の乗船は則ち樂しきが如し、菩薩の道も亦是の如し、或は勤行精進のものあり、或は信方便の易行を以て、疾く不退轉地に至る者あり

とて、難易二道の説を立て、三世十方の諸佛菩薩を念すべきを示し、而して又一切佛即一佛、諸佛即彌陀の意を彌陀章に寓して、

阿彌陀の本願、是くの如し、若人我を念じ名を稱へて、自ら歸すれば、即ち必定に入り、阿耨多羅三藐三菩提を得べしと、是故に常に應に憶念すべし……是故に我常に念じたてまつる……若人佛に作らむと願ひて、心に阿彌陀を念すれば、時に應じ爲に身を現はしたまふ、是故に我彼佛の本願力に歸命す……願くは佛常に我を念したまへ。

云々とあり、龍樹の信念の中心が孰れに在りしやは、暫く別問題として、此等の文章の中に無量壽經の思想、念佛易行の趣旨は明瞭に發揮せられ、其彌陀を讚歎せし一節の如きは、曇鸞大師の讚阿彌陀佛偈の前驅たり基礎たるべきものなりとす。

然れども龍樹の易行論は、之を其一代の著作に比すれば、僅かに九牛の一毛に過ぎざるを以て、後世人師甚だ重きを置かざるが如き傾あるも、親鸞聖人は文の長短多少に關せず、此を以て龍樹か信念の中心と爲し、淨土眞宗の高祖たる實質を有するものと觀じたるなり、殊に又楞伽經の懸記に、我涅槃の後、南天竺に龍樹と名くる大徳の比丘出でむ、能く有無の見を破して、大乘無上の法を顯はし、歡喜地を得て、安樂國に往生せむとあれば、之れ正しく淨土教の祖師たるべき自然の使命を有するものなりと爲すに在り。

天親又は世親と云ふ、龍樹に後るゝこと二百年、佛滅後九百年の頃、北天竺健陀羅國波羅門の家に生まれ、兄弟三人共に出家して小乘有部に入り、長兄無著は早くも大乘に轉じ、攝大乘論、大乘莊嚴論等の大著あり、天親は俱舍論を造り、理長爲宗を主張し、後ち無著の勸に従ひて大乘に轉じ、唯識賴耶緣起を唱へ、其述作頗る多く、千部論師の稱あり、遂に無量壽經優婆提舍願生偈、即ち往生淨土論を造りて、願生の信念を明らかにせられたり、

其偈に曰く、

世尊我一心に、盡十方の無碍光如來(阿彌陀佛)に歸命して、安樂國に生せむと願ふ、我修多羅眞實功德相に依りて、願偈の總持を説き佛教と相應せり、彼の世界の相を觀するに、三界の道に勝過せり……佛の本願力を觀するに、遇て空しく過ぐる者なし、能く速に功德の大寶海を満足せしむ……我論を作りて偈を説く、願くば彌陀佛を見て、普く諸の衆生と共に、安樂國に往生せむ

淨土宗にて此の往生論を以て三部經に對する一論と稱し、眞宗にて第二祖と稱する、亦其理なきにあらざるなり。

第三段 支那の念佛

淨土教の支那に傳はりしは、後漢の代安息國の安清高來りて、無量壽經二卷を翻譯せしを始めとす、而して此の無量壽經には十二譯あり、又觀無量壽經には二譯あり、阿彌陀經には三譯ありて、現時我國の淨土教にて用ゆる三部經中、大經は曹魏の代に康僧鎧の譯出せし所、又觀經は劉宋の世に曇良耶舍の譯せしもの、小經は姚秦の代に鳩摩羅什の譯出せし所にして、龍樹の十住論も亦均しく鳩摩羅什の譯せしもの、其十二禮文は禪那

屈多之を譯出せり、又天親の往生淨土論は元魏の世に菩提流支の譯出せし所たり。

抑も支那の淨土教には三傳ありて、其第一は晋朝廬山の慧遠の流派にて、遠は廬山に白蓮社を結び、念佛修行の會を設けたり、此れ支那に於ける淨土教團の始めなり、而して慧遠は道安に承け、道安は佛圖澄に紹けり、佛圖澄は晋の懷帝永嘉四年西域より洛陽に來り、爾來四十餘年其弟子道安と俱に佛教の流布に従事し、其戒行の嚴正なると神呪力を有せりと云ふに由り、痛く上下の信仰を得、數多の佛寺を建てたるものなれば、其法流推して知るべく、後の曇鸞派の淨土教とは頗る徑庭あるや明らかなりとす。

第二は後魏の世玄忠寺に於ける曇鸞大師の一流にして、道綽、善導の二師之を紹ぎ、日本淨土教の根源を爲せしもの、即ち支那の三師とは此れなり。

第三は唐朝の慈愍流にして、慈愍は玄奘義淨に續て久しく印度に歴遊して、多くの淨土教典及眞の佛容を傳來し、玄宗に獻して帝心を開悟せしめ、爾來淨業を懈らず、往生淨土集等を著はし、善導と異時同化と稱せられたり、然れど其流義其著書も傳はらざれば、今稽ふるに由なし。

此の他淨影の慧遠、天台の智者、三論の嘉祥、法相の慈恩、禪家の百丈、祿宏、智旭等の如き

高僧碩德にして章疏を造りて淨土教を讚歎し、又密に念佛を修せしもの少なからざりき。

第四段 支那の三師

眞宗の第三祖曇鸞大師は、北魏孝文帝の承明元年、五臺山の附近なる大同府の雁門に生る。幼時五臺山に上り其遺蹤を見、心神歡悦して遂に出家し、主として四論宗(三論宗に大智度論を加へたるもの)を研究せり、後密かに想ふに佛教は其義深く經論多ければ、普く之を修學し又解釋せんには、短命にては、及び難しとて、當時江南に有名なる陶弘景と云へる仙人を訪ひ、不死の法を傳へ、其歸路洛陽にて、北天竺の菩提流支に遇ひ、即ち問ふて曰く、佛法中若し長生不死の法、此土の仙經に勝るものありやと、流支地に唾して曰く、是れ何の語ぞと、依て觀經を授け戒めて曰く、是れ大仙の方なり、之に依て修行せば當に生死を解脱すべしと、鸞師之を讀み大に先非を悔い、仙經を燒き淨土門に歸し、後ち天親の淨土論を註釋して淨土論註二卷及讚阿彌陀佛偈一卷並に略論淨土義一卷を著せり、論註は龍樹天親の淨土思想を闡明し統一したるものにして、自力他力の分別を明らかにし、又他力廻向の教義をも含み、親鸞聖人の教行信證の根據と爲れり、又讚佛偈は龍樹

の十二禮を承けて、如來と淨土とを讚歎せしもの、更に淨土義は讚佛偈に略せる要義を釋現せり、而して是等の諸著は、主として大經に依つて淨土教に關する各種の問題を解決せるものなり。

斯くて鸞師は大に淨土教を宣揚し、魏主は大師を重んじて神鸞と號し、梁の武帝は鸞菩薩と號せり、後年勅によつて并州の大巖寺に住し、續て汾州石壁谷の玄忠寺に移り、其間又介山の陰に往き、徒を集めて淨業を修し、其處を鸞公巖と名けらるゝに至れり、東魏の孝靜帝興和四年に遙山寺にありて示寂せり、時に六十有七、勅によつて汾州汾西に葬り、靈廟を秦陵の勝地に營み、碑を立て、以て其德を表せり。

佛滅度千五百十一年即ち末法の初め、鸞師の滅後二十一年北齊武帝河清元年に當り、眞宗の第四祖道綽禪師は并州汝水に生る、武平六年十四にして出家す、當時周の武帝廢佛の擧あり、禪師は初め涅槃經を研究し之を講說すること廿四回に及びしが、一日玄忠寺に參し、鸞師の碑文を見、驪然として淨土門に入り、爾來念佛七萬遍を日課とし、又觀經を講すること二百回、斯の如くして道俗を度すること三十年、唐の太宗貞觀十九年四月二十七日鸞師の舊居玄忠寺に於て寂す、年八十四、其著書安樂集二卷は淨土教有數のも

のにして、其要領は時機を勘決して聖淨二門の興廢を明らかにして、念佛の重要なを説き、其卷頭に今は正に是れ佛の名號を稱すべき時なりと云へり、以て其内容をトすべきなり。

真宗の第五祖善導和尚は、隋の煬帝大業九年を以て臨淄に生る、初め三論を學び、又法華維摩を講せしが、一時自ら思ふに、教門一致せざれば之を修するも效なし、如何にかして有縁の經法を得んと、即ち大藏に入り手に任せて探りしに、圖らずも觀經を得たり、依て遂に淨門に歸し、廬山慧遠の高風を慕ひて其遺跡を觀迹を終南の悟眞寺に隱し、専ら淨業を修め、遂に三昧發得の境に入り、後ち道綽禪師に逢ふて大經を授けられ、觀佛已上の信心に入れり。

爾來三十餘年、別の寢處なく、又敢て睡眠せず、洗浴の外衣を脱せず、般舟行道禮佛方等、以て己が任と爲し、戒品を護持し、纖毫犯さず、目を擧げて女人を視す、一切の名利心を起すなく、綺詞戲笑亦未だあらざりきと、而して其臨終に就いては、或は痛切なる厭欣の心より、自殺せしとも云へり。

和尚の著書に、四帖疏あり、之は觀經の玄義序文、定善、散善を釋したるものにして、正雜

の廢立を明らかにしたる大著なり、其他行儀を示せるものに、法事讚、般舟讚、往生禮讚あり、和尚の門下懷感あり、釋淨土群疑論を著して有縁を開導し、尋で法照少康出で、大に淨教を弘通せり。

第五段 日本の淨土教

佛教の正式に我國に入りしは、欽明天皇の時、百濟王の佛像經論を獻せしに始まる、而して當時の佛像は、即ち閻浮提金を以て造れる三國傳來の阿彌陀佛にして、初め物部一派の排佛家の爲に難波の堀に投せられしを、本田善光之を信濃の自宅に奉じ、遂に現今の善光寺本尊と爲れり。

次に推古天皇の朝、小野妹子と共に入唐して、在學三十餘年、舒明天皇の十一年九月、新羅より歸朝せる慧隱は、無量壽經を傳來し、翌年五月宮中に於て之を講ず、是れ實に我國宮講の初めなり、又孝徳天皇白雉三年四月、同經を再び宮中に講ず、時に聽衆の僧俗一千人ありたり。

天智天皇は誓願寺を建て、丈六の彌陀を彫刻して安置せり、又當時三論の智光は、鸞師の論註を閲し、淨土論の註釋五卷を著せり、降つて行基は、彌陀の稱名念佛を民間に弘通

せり、天平寶字四年、光明皇后崩す。諸國分尼寺に命じて、彌陀淨土の畫像を造らしめ、又稱讚淨土經を寫さしめ、續いて境内西南隅に阿彌陀淨土院を建て、丈六の阿彌陀佛像及び脇侍菩薩を安置せしむ。

平安朝に至り、叡山の傳教は、智者大師の遺訓に基き、四種三昧堂を設け、又慈覺は五臺山の念佛三昧法を傳へ來りて、常行三昧堂を設けたり、是より後ち山徒及び其信者の中に、念佛專修者を出すこと多く、親鸞聖人の前衛とも云ふべき、肉食妻帶愚禿沙彌教信の如きも慈覺と同時代の人なり、其他座主延昌、慈覺の上足、遍照、智證の高弟、增命の如き、皆西方往生を願へり、然れども未だ淨土念佛の旗幟を翻して、公然民間に布教せしものは無かりしが、朱雀天皇天曆の頃に至り、延昌の門下空也上人光勝なるもの出で、天下を巡錫し、或は道路を開き、橋梁を架し、廢寺を興し、常に市中を往來して、自ら彌陀の佛號を稱し、人をして之れに習はしめしかば、人彼を市聖又は彌陀聖と稱するに至れり、口稱の念佛市中に行はるゝに至りしは、全く上人の感化に依ると知るべし、六波羅密寺は即ち彼の創立する所なり、かくて圓融天皇天祿三年、七十歳にして入寂したり。

千觀大徳は、もと園城寺にありて顯密の學者なりしが、後ち空也上人の教化を受けて

深く心を西方に撃け、終に攝津の箕尾に遁れて専ら自行化他を事とせり、彼は又彌陀和讃を作りて、自ら之れを稱へたるが、又地方の老少之を稱へて、不知不識の内に、淨土教に結縁したる者尠からざりき。

次に源信僧都出づ、之れ眞宗に於ける第六祖にして、日本にては初祖なり、此は別に叙すべし。

源信の後ち、良忍上人ありて融通念佛宗を始む、上人は尾張國知多郡富田に生る、幼にして叡山に學びたるが、後ち専ら出離の要道を事とせんと欲し、下山して大原に退き、來迎院を建て、此に住し、只管念佛を修せり、然るに鳥羽天皇永久五年、上人三昧中にありて阿彌陀佛より、一人一切人、一人一切行、一行一切行、是名他力往生の融通念佛の偈を授かりてより、融通念佛會なる團體を組織して、専ら諸方に加人を勸誘したり、之れを融通念佛宗の起原となす、鳥羽上皇を始め、百官多く團體に加入したり、後ち攝津の住吉に大念佛寺を開きて、盛んに地方の衆生を導けり、崇徳天皇天承二年、六十一歳にして示寂したるが、後桃園天皇安永二年、聖應大師の諡號を賜はりたり。

其教義の要は、華嚴經法華經を以て正依とし、淨土の三經を以て傍依となす、而して個

人の念佛と、衆人の念佛と、互に融通して無邊の功德を圓滿し、死後成佛すと云ふにあり、左れば良忍上人の念佛は、淨土三部經を所依とする他力教とは大に其趣を異にするものと知るべし、良忍に次で法然聖人の爾前に出でたる、密教の覺鑿上人及び永觀律師の如きも、亦念佛家にして、覺鑿は其著孝養集及び五輪九字秘釋、阿彌陀秘釋、一期大要秘密集に念佛往生の肝要を勸説し、永觀は念佛六萬遍を日課とし、秘密道場を變じて念佛道場と爲し、念佛弘通に勉め、往生十因、彌陀要記、往生講式などを著し、八十にして示寂せり、此の他律の實範、南都の珍海、重譽など皆淨業を修めたる碩徳なり、淨土源流章には、智光、昌海、源信、永觀、實範、法然を以て、淨土門の六祖又は六哲と稱せり。

之を要するに、日本の淨土教は、慧隱の宮講より源信僧都の出世まで、三百餘年は、純然たる眞宗即ち他の聖道諸宗に寄生し居りし時代にして、源信以後法然まで約百年間は、半獨立時代とも稱すべく、永觀の如き良忍の如きは、聖道家よりも一般民間よりも、念佛淨土家たることを認識せられたり、然れども未だ他宗に對抗して一派の教勢を張るには至らずして、單に個人傳道に止まりしなり。

抑々平安朝の佛教は、傳教弘法の後ち幾多の高僧輩出し、台密二教の勢力一時天下を

風靡し、上王公の尊崇を受け、下萬民の信頼を繋ぎしが、其繁榮の極は古宗佛教の末期にも増して墮落を極め、遂には兵戈を提げて、皇城に向ふに至れり、殊に又桓武以後は藤原氏政權を專にし、陸梁跋扈至らざるなく、淫靡風をなし、其間に於て遂に地方に豪族武門の勢力を成すあり、次いで禍亂相繼ぎ源平の戰爭に至るに及び、現實的國民の風習も漸く其傾向を變じて、厭世的思潮上下に横流し、現世的祈禱的佛教は改轉して厭世的出世的の本色を露出するの必要あるに當り、久しく他の宗派に寄生して未だ獨立する能はざりし淨土念佛は、漸く其の鋒銛を現はし來り、遂に日本淨土教の元祖、淨土宗の開祖眞宗の第七祖たる法然聖人は出でたり、聖人以後を淨土教獨立時代とす。

第六段 日本之二祖

眞宗の第六祖源信僧都は、朱雀天皇の天慶五年、大和國當麻に生る、父占部正親は、僧都七歳の時世を去り、遺言して出家せしむ、母清原氏は賢夫人にして、亡夫の志を繼ぎ能く僧都を教育し、出家の際父の遺見として阿彌陀經を授けたり、僧都初め叡山に登りて、慈慧僧正に従ひて出家し、才智衆に優れ深く顯密の教を窮む、後ち社交の煩を避けて、深く横川の慧心院に籠り、弟子を教へて専ら著作を事としたり、依て又は慧心僧都とも稱す、

其著一乘要訣、阿彌陀經疏、大乘對俱舍鈔等、總じて七十餘部、百五十餘卷あり、彼は又善導の著に依て、心を西方に撃け、往生要集三卷を著し、近き將來に於て獨立せらるべき、淨土宗の端緒を開けり、後一條天皇の寛仁元年、七十六歳を以て入寂せり。

往生要集の内容は、往生極樂の教行は濁世末代の目定なりとし、念佛の一門に依りて更に十門を開き、厭欣を基礎として往生極樂の爲には、念佛を最要とすることを明らかにせしものにして、專雜得失を論じ念佛爲本の大主義を確立せり。

日本淨土教の元祖にして、眞宗の七祖たる法然聖人は、崇徳天皇長承の二年、美作の久米南條稻岡の庄に生れ、名を勢至丸と稱す、其九歳の時父漆間時國、人の殺す所となり、死に臨み聖人を戒めて曰く、敢て報讐を計らず、寧ろ菩提を求めよと、依て出家す、初め叔父觀覺に従つて修學したるに、觀覺其聰敏なるを見て、叡山の源光の許に送る、時に年十三なり、源光又其才智に驚き、之れを皇圓に送りて教導を託す、時に年十五なり、三年の後又師の許を辭して、黒谷の叡空に従へり、此の時房號を法然と授け、名を源空を稱す、之より専ら經論の閲覽に努め、後ち南都の大徳をも歴訪して、遂に諸宗の奥義を得たり、常に戒律を嚴守し、記憶人をして驚歎せしめしかば、時人は智慧第一の法然房と稱したり。

已にして源空は、叡空より源信僧都の往生要集を授かり、之れを一見するや、淨教を慕ふの念禁する能はず、偶々善導の疏を見るに及んで大に悟る所あり、遂に餘行を廢して、専ら念佛の法門に歸し、淨土の一宗を開闢したり、時に高倉天皇安元元年にして、聖人方に四十三歳なり。

爾來洛東吉水に移りて、盛んに一向專念の法義を談じければ、都鄙靡然として其の教に歸したり、然るに諸宗の碩徳は、多く其の法義を解せず、動もすれば聖人の教を撤回せしめんと努め、遂に後鳥羽天皇文治二年、諸宗の碩學大原の勝林院に會して、聖人と論戦するに至れり、世に之れを大原談義と云へり、然るに聖人の立義之れに勝ちしかば、諸宗の大徳師の教に歸する者多く、又後白河、高倉、後鳥羽の三帝、皆聖人に歸依して受戒し給ふ、又當時、關白藤原兼實深く聖人に歸依せしかば、南北の徒多く聖人を嫉み、終に他宗を誹謗するものとなし、朝廷に奏請して、聖人の主張を停止せんとするに至れり。

此の時に當り、聖人の弟子住蓮、安樂の二人、鹿谷に於て別時念佛を修するや、後鳥羽上皇の宮女、之れに詣て、私に落髮せしを以て、聖人排斥の讒言四方より起り、終に上皇の御怒に觸れ、土御門天皇の承元元年、住蓮、安樂は死刑に處せられ、聖人は土佐に流された

り、當時其徒聖人の身を愁ひ、念佛を中止せんことを乞ひしに、聖人は毅然として我縦令首を召さるゝとも、念佛は停止すまじきぞと云へり、其信念の鞏固なる以て知るべきなり、此の時親鸞聖人も亦越後に流されたり。

其後上人は許されて、順徳天皇の建暦元年に歸京し、明年正月八十歳にして入寂せり、斯て東山天皇家元祿十年、勅して圓光大師の謚號を賜はりたり、著書としては選擇集最も有名なり、其教義は聖光、證空、隆寛、覺明、成覺、親鸞等の門下に依て、種々に解釋せられて、多くの分派を生じたり、就中聖光、證空、親鸞は最も有力なるものにして、後世益々盛んとなれり。

選擇集は開卷先づ南無阿彌陀佛と標し、其下に往生之業念佛爲本と割書せり、以て其意の在る所を知るべく、而して其大要は出離生死は往生淨土の外なく、往生淨土は稱名念佛の外なきことを示し、聖道門に附帶せる念佛の外に、淨土門あることを明らかにし、以て淨土宗成立を完遂せり、而して其結文には聖道門を擱きて、選びて淨土門に入れ、淨土門に入らんと欲せば、正雜二行の中に且らく諸の雜行を抛ちて、選びて正行に歸すべし……正定の業は即ち是れ佛名を稱するなり、名を稱すれば必ず生を得、佛の本願に

依るが故にとあり、以て其本旨を知るべし。

第七段 親鸞聖人

聖人は大職冠藤原鎌足十九世の孫にして、父は皇太皇宮大進有範、母は源氏吉光女と稱す、高倉天皇承安三年四月朔日、醍醐の麓日野村の別邸に生る、幼名を松若麿と云ふ、四歳にして父を失ひ、八歳にして母を失ふや、深く世の無常を悟り、九歳にして青蓮院の慈鎮に従ひて出家し、範宴と稱す、已後二十年間は専ら天台宗を修め、兼て又三論法相の諸宗をも學びしが、出離の要道を求むる心禁する能はず、土御門天皇建仁元年、聖人二十九歳にして、終に法然上人の念佛門に歸し、其教を蒙りて名を綽空と改めたり。

時に關白藤原兼實は、凡夫往生の範を示さんが爲めに、源空門下の上足を得て、妻すに其女を以てせんことを請へり、元祖は之れを許して當るに聖人を以てす、聖人は固辭すること再三に及べども可かれず、遂に兼實の女婿と爲れり、是より先き、元祖は兼實の請に應じて選擇本願念佛集を撰し、以て淨土の要義を述べたり、而して輒すく人に示さず、之が傳寫を許さるゝ者は、高弟數人に過ぎざりき、元久二年三月之を聖人に付屬せり、聖人は復た名を善信と改めたり。

因に親鸞聖人の妻帯に就ては、古來種々の疑問あり、或は聖人は初めより聖德太子に私淑し、其在俗の姿に従ひ、以て佛教を弘通せんとの意ありしなりと云へり、聖人が十九歳の時河内磯長の聖德太子の廟に参じて、靈告を受けしと云ふは事實なるべし、然れどもそれは十餘年にして、命終るとの告げなりしと云ふ、左れば之を以て妻帯の因とは認むべからず、又六角堂の觀音が、玉女の身と爲つて犯されんと告げたりと云ふも怪し、尤も熱烈なる求信の聖人として、觀音に祈誓し、何等かの靈告を受けたることはあるべし、要するに、當時僧風頹廢して、公然妻を蓄ふる者少なからず、殊に一部の名僧を除くの外は、隱然女を蓄へ肉を啖はざる者なきは、既に公然の秘密たり、左れば寧ろ正々堂々妻帯して、凡夫往生の範を示すを可とせしは、政治家たる兼實の意見希望としては、眞に時代に適せる卓見と謂ふべし。

然り而して、聖人の妻帯は兼實の意にあらず、又其妻は兼實の女玉日姫に非らずして、關東在錫の際、眞岡判官代三善爲教が女朝姫なり、故に朝姫は聖人歸京後、獨り猶關東に止まれるなりと、朝姫が關東に残りしは事實なり、世又聖人の越後に流さるるや、玉日姫は死せりと詐はり、朝姫と名を改めて聖人の配所に赴けりとも云へり、

併し此は誤りにして朝姫は正しく眞岡判官代の女なるべし。

抑々兼實には後鳥羽院の後なる任子の他、系圖に玉日姫なる者なきを以て、前の如く聖人の妻帯も兼實とは關係なしとするも、玉日姫なる者は妾腹又は族子なるやも知るべからず、聖人が最初の師たりし慈圓は兼實の實兄にして、又聖人の一族は九條家と種々の關係を有するものなれば、聖人の妻帯は寧ろ兼實の政治的見地並に宗教革命の手段として實施せられたるものと見るを穩當とす。

又法然聖人流罪の原因は、他宗の讒訴に出づと雖も、直接の動機は女儀に關せしものなれば、親鸞聖人が流罪の原因も亦妻帯を主とせし傾向あり、左れば何れにせよ、流罪以前に妻帯せしは事實にして、朝姫は再婚なるべし。

承元元年二月、法然聖人の左遷の難に坐して、親鸞聖人亦越後に配せられ、國府に居ること五年なり、建曆元年十一月赦に遭ふ、時に聖人謝表を奉るに、禿の字を署して名字に冠せしむ、朝廷舉て之を嘉賞せられたり、爾後愚禿を以て號とせり、復親鸞と更名したり、蓋し天親曇鸞二師に私淑せしものなるべし。

二年九月興正寺を山科に創建す、或は曰く聖人は越後より歸らんとして、途に法然聖

人の示寂を聞き、京に入らずして直ちに東北に赴けりと爾來數年教化の因縁止め難く、東北諸國に遊履すること二十餘年、元仁元年常州稻田に在て教行信證六卷を著し、以て眞宗を開闡せり、縑素貴賤化を受くる者擧て數ふべからず、嘉祿元年一寺を下野高田に創す、後堀河天皇勅して專修阿彌陀寺の額を賜へり。

貞永元年聖人年六十に及び、將に歸京せんとするに當り、北條泰時の請に依り、新寫大藏經を鎌倉に校したり、嘉禎元年四月一寺を近江木部に建つ、傳ふる所によれば、四條天皇が寺額を賜ひ、天神護法錦織寺と云へり、既にして京に歸り、處々占居の間、遠近門徒の德を慕ひ化を受くる者多く、其間亦各和讃を始め、多くの述作あり。

弘長二年十一月、善法院にて疾に罹り、二十八日正午入寂したり、壽九十歲、東山延仁寺に荼毘し、遺骨を大谷に藏せり。

著す所の書は、教行信證文類の外に、淨土文類聚抄、愚禿抄、入出二門偈、三帖和讃、三經往生文類、尊號眞像銘文、一念多念證文、唯信抄、文意等あり、門人敢十名中に於て性信、眞佛、顯智、源海、了海、明空、蓮位、唯圓、順信等最も其化を助けたり。

明治九年十一月、朝廷見眞大師の證號を賜ひ、十二年十月、見眞二大字の勅額を兩本願

寺及び專修寺に、十三年四月、佛光寺に賜はる。

偉大なる人格を批評するには、批評者そのものが偉大ならざるべからず、てう如き定義、若しくは人物の批判は一種の識見を有する史論家なるを要すと云ふが如き意義よりすれば、吾人には固より親鸞聖人を批評する權能なし、左れど吾人は吾人の聖人に對する感想を表白するの僭越にあらざるを信ず、吾人の感想に依れば、聖人の人格は愚禿の二字に盡く、愚禿鈔には自ら外賢内愚と云ふと雖も、實は外愚内賢なり、又禿は非俗非僧なり、彼の日蓮聖人が持戒破戒にも闕て無戒の僧、有智無智にもはづれたる牛羊の如くなる者也と云ひしは、將に愚禿と好一對と云ふべく、又た念佛して彌陀にたすけられまゐらすべしと、よきひとの仰を蒙りて、信する外に別の子細なきなりと云ひしが如きは、日蓮聖人の、日蓮はいづれの宗の元祖にもあらず、又末葉にもあらず……上行菩薩の出現して弘めさせ給べき妙法蓮華經の五字を先立て云々と其趣を同くす、又其流謫に就ては、大師聖人若し流刑に處せられ給はずば、我また配所に赴かむや、我また配所に赴かずば、何によりてか邊鄙の群類を化せむ、これなほ師教の恩致なりと云へるが如き、彼の辨圓が聖人を害せんとして、其溫容に接し忽ち廻心せしが如き、其全體を通じて

之を評すれば玉の如しと云ふの他、適恰の評語を見出し得ざるなり、句佛上人が祖師はかみこの九十年と歌ひし如く、聖人の生涯は全たく貧しき家庭に勞働しつゝ、念佛行者を以て始終せし教信沙彌と異なるなく、積極的に宗教家を以て自ら任じ居らずして、市隱とも謂つべき有様なりしなり。

然らば聖人は單に一沙彌一市隱に止まるかと云ふに、そは決して然らず、其深刻なる信念、熱烈なる慈悲は筐底の玉の自ら光を放ち、架上の寶刀時に鳴るの概あり、殊に外愚内賢の具體的識見に至つては、至上絶大のものあり、例へば教行信證六卷に就て之を見ても、其經論を解するに、文章學上にては到底許すべからざる自分勝手手の訓點を施し、教典の色讀身讀と謂はんよりは、寧ろ全然改作と謂ふべく、即ち豫め自己の決定せる信念意見に依つて、特殊の新教典を作製せるなり、聖人は釋尊の如き七祖の如きに對し、其人格努力の先進たる點に於ては固より充分の崇敬渴仰を拂ふも、此等識見に至つては、釋迦七祖何かあらん、三部經何ものぞ、直ちに彌陀を拉し來つて其本音を吐かしめるものにして、彌陀は恰かも被告人にして、聖人は秋官の如く、釋迦や七祖は参考人證人の如く、三部經其他の諸論は参考書證據書類たるに過ぎず、然り而して餘他の人師は全たく傍

聽者たるの趣あり、左れば所依の經典及釋尊七祖は彌陀の蔭武者にして、彌陀そのものも亦結局聖人の蔭武者たるを免かれざるの概あるものなり、猶切言すれば眞宗に於ける彌陀及經典は、悉く之れ聖人の背景に非ずんば、即ち一種の操人形にして、聖人は正しく傀儡師なり、更に換言すれば彌陀は教主たる船なるべきも、之を動かすの實力は船長たる聖人に在りとす。

吾人は曾て釋尊と親鸞聖人及傳教弘法法然道元日蓮の六大僧を比較譬喩して、左の如く云へることあり。

釋尊は馬上に采配を揮て三軍を叱咤する大將軍の如く威風堂々當りを拂ふの概あり、親鸞は印半纏に捻鉢卷にて土方を指揮する親分の如し、形式は異なりと雖も其實質は同じく、而かも土方の親分の方碎けて親み易く、滋味多し。

傳教は床に祀れる神鏡の如く、弘法は違棚紫檀の机上に飾れる白玉の如し、日蓮は抜ける白刃なり、道元は鞘に收め架上に横へたる正宗なり、法然は理髮室の鏡の如く、親鸞は檻樓に裏みて駕籠に納めたる明玉の如し。

又傳教は鏡餅にして、弘法は七五三の料理なり、道元は薬用葡萄酒の如く、日蓮は銘酒

の如し、法然は米飯にして、親鸞は麥飯なり。

又傳教は禮服の如く、弘法は、千金の掛軸の如し、法然は平常着の如く、道元は勞働服にして、親鸞は夜具なり、而して日蓮は自動車の如し。

又傳教は八か間敷お祖父様の如く、弘法は學校の先生の如く、道元は意地の悪き兄の如し、法然は父親にして、親鸞は母親なり、而して日蓮は警官の如し、此等の差異は固より其人の天性に依ると雖も、亦信念の差異と時代の影響も大なるものありとす。

第八段 十派分立

眞宗の教義たる固より親鸞聖人已證の法門にして二途あることなし、然るに唯門末統率の上に就て、漸次派を分ちて遂に十派に及べり、今其概要を示さん、

佛光寺は初め興正寺と稱す、山城國山科郷にあり、建曆二年聖人自ら之を創せり、順徳天皇より興隆正法の號を賜ひ、勅願所とす、聖人住持すること十六年、安貞元年十二月弟子眞佛に譲り、後ち源海、了海次第に相承し、第七世了源の時即ち元應二年六月、寺基を東山今比叡澁谷に移す、了源は學問深く化導の徳大なり、之を中興とす、嘉曆二年本尊放光の瑞あり、後醍醐帝勅して寺號を改め、阿彌陀佛光寺の額を賜ふ、第十三世光教寛正六年

三月、門跡に補せられたり、第十六世經範、天正十四年、五條坊門今の地に移る、之を佛光寺派の本山とす。

專修寺は初め下野國芳賀郡高田にあり、嘉祿元年宗祖自ら之を創し、專修阿彌陀寺と稱し、後堀河天皇より勅額を賜ひ、勅願所とせり、後ち之を弟子眞佛に付し、眞佛寂後更に顯智に付し、顯智、專空に付す、第十世眞慧、寛正六年、寺基を伊勢國奄藝郡一身田に移す、眞宗興隆の功高く、學識徳望亦大なり、之を中興とす、永正年間、後柏原天皇の皇子常磐井宮、入寺して眞慧の法弟となり、得度せり、天正二年十一月、正親町天皇より門跡號を勅許さる、之を高田派の本山となす。

錦織寺は近江國野洲郡木部村にあり、嘉禎元年聖人自ら之を創す、四條天皇の曆仁元年、天神護法錦織之寺の勅額を賜ひ、勅願所となれり、第三世に至るまで傳燈本願寺と同じ、第四世光玄別に其徒を統べて一派をなす、第六世良昭に至り、文化十一年門跡を允さる、之を木邊派の本山と云ふなり。

本願寺は聖人歿後十一年、即ち文永九年、季女覺信、子覺如、孫如信と共に洛東吉水の北邊、大谷墳墓の側に創設せり、龜山天皇より久遠實成阿彌陀本願寺の號を賜ひ、勅願所

とす。後拍原帝の大永元年門跡號を勅許す、其聖人の本廟に屬すると、中宗蓮如上人の徳化とに依て、門徒の歸屬頗る多し、爾後時世の騷亂に依りて、寺基を山科、大阪、鶯の森、堺、天満等の諸所に轉じ、天正十九年第十一世光佐顯如の時、京都堀川に移せり、之れを本願寺派の本山とす。

本願寺第十一世光佐に三子あり、長を光壽と云ひ、季を光昭と云ふ、文祿元年光佐示寂し、光壽席を繼げり、三年故ありて、弟光昭に讓る、慶長七年徳川家康は光壽をして京都烏丸の地に一寺を營建せしめ、亦本願寺と稱せり、之を大谷派の本山とす。

興正寺は始め佛光寺第十四世經豪、本願寺蓮如に歸し、名を蓮教と改め、本寺を弟經譽に讓り、其徒若干を率ゐて本願寺に屬し、山科に一字を創し、其舊號を襲ふて興正寺と稱せり、後本願寺の寺基を各所に移し、遂に京都堀川に定むるや、興正寺も亦追隨移轉す、當時本願寺光佐の二男佐超が住持となり、本寺と同じく門跡號を得たり、明治九權大教正攝信が始めて別派特立して、興正寺と稱するに至れり。

毫攝寺は越前國今立郡味真野村清水頭にあり、天福元年聖人京都出雲路に、一字を創設して、其子善鸞に附す、寺運衰微の後、本願寺覺如の弟子乘專が再興して、覺如の季子善

入をして此に住せしむ、第五世善幸の代、光明天皇より勅願所の宣旨を賜ふ、曆應三年寺基を同國山元に移し、又慶長元年第十二世善照寺宇を此の地に轉す、之を出雲路派の本山と稱す。

證誠寺は越前國今立郡横江村横越にあり、承元元年聖人左遷の途次、同國山元の草舎に留錫せられし舊跡なり、嘉禎元年、嫡子善鸞舊跡を慕ひ來りて之に住せり、後二條天皇より山元山護念院證誠寺の勅額を賜ひ、勅願所となす、文明七年第八世道性寺基を此の地に移す、之を山元派の本山とす。

誠照寺は越前國今立郡鯖江町にあり、承元元年聖人越後左遷の時、當國上野の草舎に留錫布教せり、之を當山開創の元始とす、後ち宗祖の第五子道性其長子如覺と共に化を布き、大に教網を張れり、後二條天皇より寺額を賜ひ、勅願所と爲せり、之を誠照寺派の本山と云ふ。

專照寺は越前國福井市にあり、正應三年八月派祖如導、足羽郡大町村に一字を創し、專修寺と稱す、如覺、道性の二弟子、師化を助け、鼎足の形を成す、世に三門徒と云ふは是なり、第三世淨一、中野村に移り、專照寺と改む、天正十三年八月、正親町天皇より勅願所の宣

下あり、其後現地に轉せり、之を三門徒派の本山とす。

第九段 覺如と存覺

覺如は覺慧の子覺信尼の孫、即ち親鸞聖人の外曾孫なり、聖人の滅後九年文永七年十月廿八日京都に生る、三歳母を喪ふ、當時愛慕の情成人の風あり、時人呼んで宗祖聖人の再誕と稱す、後ち南都北嶺に學ぶ、顯悟人を驚かすものあり、業成て後如信に繼いで本願寺を督し、一意其發展を圖れり、本願寺の基礎は實に覺如によりて定まれりと云ふべく、又眞宗の宗義も其教化に依りて旗色鮮明なるを得たり、即ち外は自餘の淨土宗に對して眞宗の本領を明らかにし、内は宗内の異議を整理して其統一を勉めたり、覺如の著述せる親鸞の御傳集の如きは、布教上頗る肝要のものたり、其他報恩講式、拾遺古德傳及び口傳鈔、改邪鈔、執持鈔、本願鈔、願願鈔、最要鈔、出世元意杯あり、又和歌に巧みにして、其自詠一千首を録したる閑窓集あり。

覺如の教旨は信心正因、稱名報恩、平生業成、不來迎と決し、眞宗の教風を極めて明確ならしめたるにあり。

覺如の嫡男を存覺と云ふ、正應三年六月四日本願寺に生る、初め南都に學び、後ち叡山

に移り、顯密二教を學び、學識拔群、父覺如の如きも其文才に驚けり、然れども眞宗の法義に關して、父子意見を異にし、遂に義絶するに至れり、爲めに存覺は坎軻落魄を極めたるも、其學道に熱心なる、遂に宗義上幾多肝要の著書を出せり、其重なるものは教行信證鈔、諸神本懷集、淨土眞要鈔、破邪顯正鈔、決智鈔、存覺法語、持名鈔、女人往生聞書、步船鈔、報恩記、法華問答、淨土見聞集、歎徳文、選擇集、註解鈔等なり、是等の述作、中日蓮宗に對して、眞宗との優劣を明らかにする事を勉めたるもの多く、又其教義の説明は、往々餘宗の説を轉用し、念佛往生を主とする點に於て、父の意見と合はざりしものなるべし。

第十段 蓮如上人

蓮如は本願寺第七世存如の長子なり、足利の盛時應永二十二年二月廿五日を以て本願寺に生る、幼名を布袋丸と稱す、母は何許の人なるを知らず、布袋丸六歳の時眞宗興隆の事を訓託し、去りて行く所を知らず、斯くて上人は繼母に事へ、十七歳にして青蓮院尊應の門に入り、爾來三十餘歳に至るまで苦學研修せり、蓮如上人御一代記聞書に依れば、二三日も御膳まゐり候はぬ事も候といひ、石物には紙子を召され候といひ、或は御子達は皆々里養に御入り候といひ、さてはいろく御悲しかりける事ども、折々御物語あり

……又油をめされ候はむにも、御用脚なしやうく、京の黒木を少しづつ、御とり候て聖教など御覽さふらう由に候、又少々は月の光にても聖教を遊ばされ候云々、以て其一班を知るべし、上人の學識は既に徹體せりと雖も、山徒其他の嫌議を避くる爲め、深く自から韜晦せり、是時法運式微の恢復最も難し、近江金森の道西常に函丈に侍して、大に興教を助けたり、三十餘歳に至て時機漸く熟し、道化方に行はる、文安四年東國を經涉し、寶徳元年北地に遊化す、兩度の杖鞋遍く宗祖の遺跡を拜し、寛正元年六月道西の請に應じ、正信偈大意一卷を著せり、又法語數章を筆して宗要を和述し、普く門侶に示す、多年累積數百章に至る、又頌解文を作て安心出離の軌則としたり、六年正月山徒の爲めに大谷の殿堂を毀焼せらる、乃ち祖像を奉じて難を大津に避け、爾來諸所に流寓したり、應仁二年本宗寺を參州土呂に、文明元年顯正寺を江州大津に創し、三年四月北地に遊化して坊舎を越前吉崎に立つ、守護朝倉敏景大に道化を助く、六年三月吉崎坊舎火あり、後ち海を航して若狹に抵り、丹波攝津を歴て河内國の出口に寓し、光善寺を創せり、八年紀州に行化し、九年の冬、道西と共に本寺再建の地を城州山科に卜し、十一年三月方めて土木を興し、十二年八月祖堂成れり、是に於てか、祖像を大津に遷へて此に安置せり、十三年佛光寺經

豪其徒若干名を率ゐて來り從ひ、名を蓮教と改め一字を竹中莊に創し、其舊號を襲ふて興正寺と號したり、十四年六月本寺の佛殿亦成る、佛殿祖堂輪奐の美並び備る、延元元年壽七十五、寺務を法嗣光兼實如に付し、退隱して攝化の事に力む、明應五年九月、攝津大阪に別院を創して居る、七年四月病に罹り、八年二月山科に還り臥す、病中諸子に告るに興復の艱苦を以てし、且之を誠むるに、戰兢道に從はんことを以てせり、三月に至り病ひ篤し、猶諸子に對して諄諄遺諭せり、二十五日正午奄然示寂せり、壽八十五なり、其興復に功ありしを以て尊んで中宗とす、明治十五年三月二十二日、朝廷より慧燈大師の號を諡られたり。

蓮如上人の偉業を爲したる化導の表幟は、極めて簡明直截にして、眞諦門に於ては信心爲本、佛助け給への唱道を主とし、俗諦門にては王法爲本を立て、二諦相依の宗則を定め、以て當時に於ける種々の異議邪執を匡正し、宗教の下に國家道德を調攝せり。

第十一段 中興以後の概見

眞宗信徒の勢力は、蓮如上人の滅後漸次に強大を極め、上人の孫證如上人に至りては、山城大和攝津河内の信徒、暴戾を逞ふするに至りしかば、細川晴元等の諸將は、其勢力を

恐れて之を絶滅せんことを謀り、後奈良天皇の天文元年、日蓮の徒並に山徒を率て聯合軍を作り、以て真宗一揆に當れり、かくて兩軍は互に洛中洛外に争闘したるが、終に真宗徒の敗北となり、山科本願寺は敵軍の爲に焼かれ、證如上人は祖像を奉じて石山別院に遁れたり、是に於て近畿の真宗一揆は、大に激昂して一時に蜂起せり、翌年細川晴元、木澤長政等京師の日蓮宗徒と合して來り、石山本願寺を攻むと雖も、終に之を陥落すること能はず、却て和を講ずるに至れり。

其後顯如上人襲ぐや、宗門益々榮へ武備充實し、兵勢益々盛んと爲れり、當時諸將中、織田信長最も威名高く、大志を懷きて德川家康、武田信玄等と結び、正親町天皇永祿十一年、京師に出でて足利義昭を將軍に奉し、大に秩序を恢復したり、然るに淺井長政、朝倉義景、毛利元就等信長に反抗して覇を争はんとし、顯如上人山徒等又彼等と結びしかば、信長は元龜元年淺井朝倉を破り、次で叡山を焼き討ちにしたり。

其後信長は、天正四年には北國の真宗一揆を討掃し、次で又本願寺を滅さんと欲して、顯如上人に石山の地を讓與すべきことを迫れり、然るに顯如上人は、信長の意志を看破して之を拒みければ、信長大に怒りて自ら大軍を率ゐ來り、石山本願寺を包圍したり、斯

くて信長は地方の一揆を征伏せしかば、本願寺は全く孤立となり、僅かに毛利氏の援助に依りて、支持するを得たり。

斯くて攻守四年に及ぶも、勝敗容易に決せざりしかば、天正八年信長は、終に勅を請ひて本願寺と和を講ずるに至れり、之れを石山戦争と稱し、實に本願寺浮沈の戦なりき、顯如上人は勅を奉じて石山を信長に渡し、紀州鷲森に退きたり、其後、後陽成天皇の天正十九年、京都堀川の地に本願寺を移す、今の西本願寺は即ち是なり。

德川幕府時代となるや、家康は主として内治制度を計畫し、佛教の勢力を抑制せんと努めたり、叡山根來寺等は已に信長秀吉の制する所となりたれども、信長已來制し難かりしは、獨り本願寺の一派なりき、是に於て家康は慶長七年、東本願寺を京都烏丸に建て、顯如上人の長子、教如上人に與へて、真宗の宗勢を二分したり。

德川時代に於ける、真宗宗學の概要を略述せんに、

本派の學叢は、寛永十五年、良如上人の時に、本寺の境内に創設せるに初まり、學頭を能化と名づけ、光善寺准玄先づ之に任せられ、西吟之に次ぐ、時に月感といへる者、西吟の學説を以て真宗の宗義に違する者とし、互に正邪を争ひ、紛擾が容易に止まらず、遂に幕府

の裁決を仰ぎ、其結果は月感は出雲に配せられ、學覺は之が爲めに一時廢絶せり、後ち元祿八年新に覺舎を造營し、改めて學林と稱し、爾來如空、若霖、法霖、義教相次いで能化となり、法霖は日溪と號し、學才頗る廣く、自ら三部經を以て一代經を統一するを宗學の主義となし、從つて其研究は大に理談に傾けり、時に華嚴宗に鳳潭あり、書を作りて淨土教を破せしに、日溪は之に對して論戰し、又内部に於いては智暹と本尊の義に就て論戰せり、其門下に僧樸あり、僧樸の門下又幾多の英匠を出し、一派の宗學之より漸く盛んなり。義教に次いで功存あり、時に越前に無歸命安心を主張する者あり、功存之を匡正して願生歸命辨を著す、然るに其說亦一方の極端に走りて、宗義に違する者あるを以て、當時既に之を非議するものありしが、未だ大なる問題とはならず、然るに智洞次いで能化となり、功存の說を大成して三業歸命の說を唱道するに及び、地方の學者之に反對し、遂に天下の擾騷となり、本山の力も之を鎮壓する能はず、爲に幕府の裁決を受くるに至り、其結果は所謂智洞新義の徒は刑に處せられ、道隱、大瀛等の古義の勝利となれり、三業惑亂といふもの即ち是なり、已來本派に在ては、安心の惑亂を恐れ、能化一人の制を廢し、改めて勸學六人を設け、順次に學寮に出で、講義を爲さしむること、爲せり、之より宗義の

研究は愈々精細となり、學派の分流亦從つて多きに至れり。

僧樸の門下多士濟々として、慧雲、玄智、僧鎔、仰誓、崇廓、大同の諸師皆之より出づ、慧雲の門下に大瀛、僧叡あり、大瀛は開信名號の教權に依つて智洞の邪義に當り、自ら一派をなす、其門下に曇龍あり、又龍華派を開けり、僧叡は自由研究に盡し、僧鎔は空華派の祖として、其門下に柔遠、道隱を出し、二師また相分れて越中空華、堺空華の二派となれり、仰誓は門下の履善、自謙と共に敬虔の道心を養ふを本として、石國の一派をなし、崇廓は豊前派を開き、大同は其門下に寶雲、南溪を生じ、筑前の一派をなし、其研究亦一識見を有す、是等僧樸の外、猶ほ播磨、肥後、越後派等ありて、宗學は一時全盛を極めたり、左れど是等の諸學派も漸次後繼者を失ひ、僅かに龍華、空華等の二三派のみ榮ゆるに至り、研究の態度亦固定して、遂に今日に至れり。

大派の學寮は寛文年間に、本寺の別邸、涉成園の一隅に覺舎を設立せるに始まり、當時京師に了海あり、深く宗義を研き、専ら教授の任に當る、其後噫慶、樹心等相次ぎ、慧空に及びて、宗學は大に振へり、慧空に次いで慧然あり、寶曆四年五月學寮を高倉の地に移し、規模を擴張して新たに覺舎を建つ、慧然の後に慧琳あり、慧空以來慧琳の入寂に至るま

で七十五年、此間は學寮の草創時代なり。

琳師の門下に幾多の英匠あり、各々宗義の研鑽に全力を注ぎ、一派の學事は蔚然として起り、特に深勵、宣明、頓慧、實景の四師は、宗學々系の四大家と稱せられ、以後の學者大概其餘流を掬ざる者なし、就中香月院深勵、門下最も多く、徳龍、靈曜、秀存、智現等は、皆之より出づ、宣明の門下に靈唯あり、頓慧の門下に大舎あり、外にまた慧琳と學系を別にせる易行院法海あり、深勵より第十一代の講師靈唯に至るまで六十二年間は、實に宗學の全盛時代と稱せらる、其後は子弟徒らに師説を傳承することをのみ勉め、新生面を開拓するの活氣を減じ、學説は固定して萎靡不振の狀態となれり。

斯く宗學の研究せられたと共に、之に伴うて異解を唱ふるもの輩出し、其の著れたる者は公巖、法幢、定觀、龍山、頓成、是海等にして、多くは講師等の調理に依つて會心改悔せしが、唯だ獨り頓成に至つては、機の深信は自力なりて、ふ説を主張して、講師等の調理に屈せず、遂に決を公府に仰ぐに至れり。

本大二派の外、專修寺、佛光寺等に於ても、宗義の研究をなし、學匠を出せりと雖も、其の盛大固とより本大二派に比すべきに非ず。

又此の時代に於て宗名の爭論あり、由來本宗は淨土眞宗と名くるを當然とするも、世俗は往々一向宗、本願寺宗、或は門徒宗と呼び、公府も亦動もすれば之に倣ひ、之が爲に不便も少からざりしを以て、安永三年八月、西本願寺、專修寺、佛光寺等共に書を幕府に呈して、總べて淨土眞宗と公稱せんことを請へり、然るに増上寺は之に反對して、淨土眞宗の名は本と我宗に屬すとなし、故例を擧げて之を詰り、兩宗の論爭殆んど決する所なく、在昔十五年の歲月を送り、幕府之を如何ともすること能はず、遂に三萬日御預けとなり、後ち明治五年に至り、眞宗々名の公許を得たり。

徳川三百年の間、耶教に對する政略上國教として、國教の厚遇を受けたる佛教は、明治維新尊王攘夷の餘波、神儒二道の徒は相合唱して、佛教を以て夷狄の法となし、殿堂を破壊し、僧侶の還俗を迫り、又神佛混淆を禁じながら、佛教の特長を現はすを許さずして、明治五年には教部省を設け、所謂三條の教則を定めて、佛教諸宗をして是れ已外の教導を許さず、各宗主長と雖も皆衣冠束帶して、神前に拍手せしめたり、然るに會々當時歐洲を巡遊して歸朝せる本派の島地、默雷師等之れを慨し、大に志士を糾合して、佛教獨立を要請し、遂に其目的を達せり。

第二章 典籍

第一段 三部經

一、佛說無量壽經 二卷 曹魏嘉平四年、康僧鎧譯此には十二譯あり、又同本異譯の平等覺經、阿彌陀經(三部經の中の第三の阿彌陀經とは異なり)無量壽如來會、莊嚴經等あり。

二、佛說觀無量壽經 一卷 劉宋元嘉十年、璽良耶舍譯此には三譯あり。

三、佛說阿彌陀經 一卷 姚秦弘始三年、鳩摩羅什譯此にも三譯あり。

無量壽經の十二譯中現存するもの五本あり、他に南條博士の日本語に譯せしものあり、此の經は二卷なる故雙卷經と稱し、普通大經と云ふ、其大要は釋尊が王舍城の耆闍崛山即ち靈鷲山にて大寂定に入り、阿彌陀佛の威相と同じき相を現し、阿難を對告衆として、其出世の本懷たる他力の法門を説きたるものなり。

上卷には如來淨土の因果を説けり、如來淨土の因とは、阿彌陀佛が元法藏菩薩たりし時、世自在王佛の許に於て二百十億の諸佛の國を觀、その國々より美を選び善を取て、自

己も一の淨土を構へむと思ひ立ちて、四十八通の誓願と、重ねて三誓の大願を起し、善惡賢愚の區別なく、たゞ我願力の理を聞信すれば必ず安養界に往生せしめん、若しそが成立せざれば我も亦佛にならずと誓ひ、而して永劫の修行を爲せり、これを如來淨土の因と云ふ。

如來淨土の果とは、法藏菩薩は修行によつて願行成就し、阿彌陀佛となりて西方に淨土を構へ、南無阿彌陀佛なる六字の名號を十方に示し、衆生をして聞信せしむるを云ふなり。

次に下卷には衆生往生の因果を説く、衆生往生の因には、念佛して往生するものと、諸行を修めて往生するものとあり、而して下卷の初には、念佛往生の因を説き、次に諸行往生の因を説けり、次には此の二種の因を諸佛が讃めて勸めらる事を述べたり。

又衆生往生の果とは、衆生が淨土に往生して受くる所の佛果なり、釋尊は先づ第二十二願の意より説き初めて、觀音勢至の二菩薩は往生者の初めなりと述べ、往生人は三十二相を具へ、智慧圓かに、神通自在にして十方の諸佛を供養し、又人を救ふ大活動の出來得ることを、廣く説けり。

加上釋尊は次に信心を勧め、惡を造ることを誠むる一段を説けり、即ち不了佛智とて、佛の大智慧を了らざる者は眞實の淨土に往生するを得ず、左れば人々は明らかに佛智の不思議を信せよ、かくて五惡を避け五善を修むべしと説けり。

觀無量壽經は三譯あるも、現存するものは一のみ、同經は略して觀經と云ふ其の概要は左の如し。

釋尊曾て耆闍崛山に在りし時、王舍城に大悲劇起れり、城の太子阿闍世は父頻婆婁羅王を幽して位を奪ひ、又母の韋提希夫人をも幽閉せり、韋提希夫人は愁ひ苦しんで、遙かに救を釋尊に求めたり、茲に於て釋尊は神通力を以て夫人の室に現はれ、自身の光明の中に十方の淨土を現して夫人に見せしめ、夫人は之を觀て阿彌陀佛の淨土に往生する道を求むるに至れり。

釋尊は先づ夫人の爲に、定善十三觀の修行を説けり、定善とは息慮凝心とて、慮を息め心を凝し、靜かにして餘念を起さず、彼の安養界の國土と佛と菩薩とを漸次に觀想するを云ふなり、釋尊は之れを説く途中、即ち第七番目の華座觀を説かるゝ初めに當り、夫人の爲に苦惱を除く法を説かんと云ひし時、忽然として阿彌陀佛空中に現前せり、夫人は

之れを拜みて信心を起し歡喜大悟せり。

斯くて釋尊は定善十三觀を説き終り、更に散善三觀を説けり、散善とは廢惡修善とて、心の散亂を其儘惡を廢め善を修むることを云ふ、然らばその善とは何ぞやと云ふに、所謂三福とて、世間の善と小乗の善と大乘の善とを指すなり、釋尊はこれを衆生の機類に配當して九品と爲せり、その中、上品上生、上品中生、上品下生の三品は大乘の機類にして、大乘の善即ち第三福を修め、中品上生、中品中生の二品は小乗の機類にして、小乗の善即ち第二福を修め、中品下生の一品は世善の機類にして、世間の善即ち第一福を修め、下品上生、下品中生、下品下生の三品は三福無分とて、少しも善行のなき惡人なれども、たゞ念佛に依つてのみ淨土に往生するを得と説けり、而して最後には、南無阿彌陀佛の六字念佛を讀めて、之れ即ち最も勝れたる成佛の法なりとし、之を信じ之を持つべしと勧め、一經を結びたり。

阿彌陀經は三譯あり、中一品は缺けたり、又南條博士の梵文和譯あり、此の經は無量壽經を大經と云ふに對し、小經と云ふ、其大要は左の如し。

阿彌陀經は舍衛國の祇園精舍に於て、舍利弗を對告衆として説きし經なり、先づ初め

には極樂の位置を示し、次に極樂の名を解釋し、進んで寶樹、寶池、天樂等の莊嚴を讚め、光明無量壽命無量を以て阿彌陀佛の名を解釋し、往生人も亦無量の光明壽命を得と讚せり、次に此の極樂に生るには、自力の小善根、小福德を捨て、たゞ多善根多福德の念佛に依るべしと勧めたり、即ち是れ觀經の餘義を述べたるものなり。

更に釋尊は、東南西北上下六方の恒沙無量の諸佛が、念佛の功德の虚しからざること證明しつゝあるを述べ、諸佛護念の利益を擧げて念佛を信じ稱へよと勧めたり。

以上三經の中、大經は時に諸行往生の方便を説く所ありと雖も、同時に必ず專修念佛の眞實義を説き、兩者の勝者を明らかにするを以て、徹頭徹尾眞實の教なり、然るに觀經、小經は諸行往生を表現し、其說相隱顯に亘りて一異眞假の不同あり、左れば其顯說一往方便を帶る邊は捨て、取らず、別して大無量壽經を以て本經とし、他の二經と雖も、隱彰の實義に於て大無量壽經と一致する所ある邊よりは、取て之を正依となすなり、故に親鸞聖人は正依の大本を定めて、大無量壽經、眞實之教、淨土眞宗と云へり。

第二段 傍依の諸經

漢譯大藏經は大小乘經通計九百四十餘部あり、中に就て彌陀若くは極樂淨土に關す

る説あるもの、二百五十餘部に及び、天台荆溪は諸經所讚多く彌陀にありと云へり、而して其重なる二三を示せば、華嚴經の入法界品には、我れ命終に臨むとき盡く一切諸障礙を除き、面り彼の佛陀彌陀を見てまつり、即ち安樂刹に往生することを得んとあり、法華經には大通智勝佛の王子十六人あり、其第九子は阿彌陀如來、第十一子は釋迦如來なりとあり、又命終りて安樂世界の阿彌陀佛の所に生る云々とも説けり、次に大般若經、涅槃經にも極樂世界の事を説き、小乗の增一阿含經及び法蘊足論などにも、淨土思想の現はれあり、又密部の經にては、大日經、瑜祇經、其他二十餘經に西方淨土及び無量壽佛、阿彌陀佛の説多く出でたり、又最勝王經、金光明經、楞伽經、維摩經等にも淨土門に關する説多し。

是等二百五十餘經の中、彌陀の因位即ち本生譚に關するもの四十部に近く、又彌陀の本願を説けるもの十部に近し、法華經及び其異譯たる大乘悲分陀利經には、彌陀の本生譚と共に四十八願を記し、大寶積經にも亦本生譚と四十八願あり、莊嚴經には本生譚及び三十六願を説き、平等覺經及び大彌陀經には、本生譚と共に二十四願を説けり。

經の外印度選述の論部にては、龍樹の毘婆娑論易行品、及十二禮文、天親の無量壽經優

婆提舍即ち往生論の外、馬鳴の起信論、龍樹の大智度論、無着の攝大乘論及び莊嚴經論、堅慧の寶性論、安慧の阿毘達磨雜集論、其他密部の論藏二十部等、總計四十五部に亘りて、淨土教に關する説あり、而して是等は悉く譯出せられ、現存せるものなり。

第三段 七祖の著書

十住毘婆娑論第九易行品……………龍樹菩薩造

十二禮文

無量壽經優婆提舍願生偈(往生論)……………天親菩薩造

以上印度の部

往生論註二卷……………曇鸞大師撰

讚阿彌陀佛偈……………道綽禪師撰

安樂集三卷……………道綽禪師撰

觀經四帖疏……………

淨土法事讚二卷……………善導大師撰

觀念法門

五部九卷……………善導大師撰

往生禮讚

般舟讚……………

以上支那の部

往生要集三卷……………源信和尚撰

撰擇本願念佛集二卷……………源空聖人撰

以上日本の部

上來三國に亘り述作せられたる三論十釋は、親鸞聖人以前に於ける淨土眞宗正所依の論釋なり、其内容は傳統篇に略述せしを以て今は之を説かず、此の他法然聖人の述作に就ては、長西錄に記する所八部あり、即ち無量壽經釋一卷、觀無量壽經釋一卷、阿彌陀經釋一卷、阿彌陀經懺法一卷、往生要集料簡一卷、淨土初學鈔一卷、選擇念佛集一卷、淨土五祖傳一卷、是れなり、又聖人の滅後六十二年にして、了惠の編輯せし漢語燈錄十卷並に拾遺一卷、其翌年更に編輯せし和語燈錄五卷並に拾遺二卷は、聖人一代の言教全集にして、漢語燈錄に十七章、其拾遺に三章五文あり、和語燈錄には二十四章、其拾遺には八章あり。

第四段 親鸞聖人の著作

教行信證	六卷	五十二歲著
淨土和讃	百十八首	七十六歲作
高僧和讃	百十七首	同
唯信鈔文意	和文一卷	七十八歲著
淨土分類聚鈔	漢文一卷	八十歲著
尊號眞像銘文	和文一卷	八十三歲著
愚禿鈔	漢文二卷	同
入出二門偈	漢文一卷	八十四歲著
三經往生文類	和文一卷	八十五歲著
一念多念證文	和文一卷	同
正像未和讃	百十三首	八十六歲作
此の他聖人の消息文等を集めたるものに、左の二種あり、		
末燈鈔		從覺編
御消息集		同

更に又聖人の物語等を書き集めたるもの及び物語を挿入したる編著は左の如し。

歎異鈔		唯圓房作(又如信作とも云ふ)
口傳鈔		覺如作
改邪鈔		同
執持鈔		同

第五段 餘他の典籍

五會法事讃	一卷	法照作
淨土論	三卷	迦才作
釋淨土群疑論	七卷	懷感作
西方要決	一卷	窺基作
念佛三昧寶王論	三卷	飛錫作
遊心安樂道	一卷	元曉作
龍舒淨土文	十二卷	王日休作
樂那文類	五卷	宗曉作

蒲益選定淨土十要 十卷

萬善同歸集 三卷

萬善先資集 四卷

淨土指歸集 二卷

行窓隨筆 三卷

蓮宗寶鑑 六卷

以上支那選述の部

淨土源流章 一卷

黒谷上人漢語燈錄 十卷

黒谷上人和語燈錄 七卷

徹選擇 二卷

識和淨土論 二卷

淨土宗要集 五卷

念佛授手印 一卷

延壽作

安土作

大祐作

雲棲作

優曇作

凝然作

了慧編

了慧集

聖光作

同

同

同

傳通記 十五卷

傳弘決決疑鈔 五卷

三心私記 一卷

決疑鈔直牒 十卷

頌義 三十卷

密要決 五卷

私聚鈔 十六卷

曼荼羅註記 十卷

楷定記 三十六卷

六要鈔 十卷

眞宗法要 三十一卷

以上日本選述の部

良忠作

同

同

聖問作

同

善慧作

智圓作

善慧作

顯意作

存覺作

此の他融通念佛宗部には大通作の融通圓門章一卷、融通念佛信解章二卷あり、又觀山作の融通圓門章和解五卷、融通私信記五卷あり、更に時宗部に於ては一逼作の播州問答

集二卷尊如編の三大師法語二卷、記阿作の器林論三卷、玄秀作の統要編七卷ありとす。
猶近時妻木氏の編纂中なる眞宗全書は二百八十一部七百九十五卷にして、其多くは
徳川時代に於ける兩本願寺學匠の註疏に係るものなり。

第三章 宗名

第一段 彌陀教及無碍光宗

淨土眞宗略稱眞宗は本名にして、其他は他より呼びなせるもの、學者研究上の便宜又は
義理より命名せるものなり、彌陀教とは學者が研究上分類の便宜に供せし名にして、
佛教を其本尊より分類して、釋迦教、大日教、彌陀教と云ふ、彌陀教は阿彌陀佛を本尊とし
て之を信仰するを以てしか云へるなり、左れば此は獨り眞宗のみにあらず、淨土門全般
に亘る名稱にして、今日の融通念佛も、淨土宗も、時宗も皆彌陀教たるなり。

無礙光榮なる名稱も亦彌陀教と同一意味にして、阿彌陀は別して無量壽又は無礙光
と云ふ意味と爲り、阿彌陀佛即ち盡十方無碍光如來を本尊と爲し、光明攝取を仰ぐより
して無碍光宗とは謂ひしなり、此の宗名は獨り學者の所用のみにあらずして、宗内にて

も俗稱として呼ばれつゝあるなり。

第二段 一向宗

一向宗とは一心一向に阿彌陀如來を信じ、餘佛餘菩薩に心向けずとの理義より來
たりし名稱にして、足利時代には多く此の名を用ゐ、殆んど眞宗の通名と爲り居れり、連
如上人は此に對して左の如く云へり。

あながちに我が流を一向宗と名乗ることは、別して祖師も定められず、大凡そ阿彌
陀佛を一向にたのむによつて、皆人の申しなす故なり、然りと雖も經文に一向專念
無量壽佛と説き給ふ故に、一向に無量壽佛を念せよといへる意なるときは、一向宗
と申したるも仔細なし。

一向宗とは祖師觀鸞聖人其他先進の命名したるものにはあらざるも、理義の上より
すれば差支なし、但し祖師の名づけたる本名は淨土眞宗なりと云へるなり。

第三段 門徒宗

門徒宗とは眞宗の信者を門徒と云ふより起りし名稱にして、戦國時代より徳川時代
に多く用ひられたり、然れども此の名稱は甚だ意義なき物なり、信者や未徒を門徒と云

ふよりしか云ひしとすれば、信者宗、未徒宗と云ふも畢竟同一意味に歸して更に意義を爲さざるなり、曾て本願寺より徳川幕府に提出せし書中に門徒の説明あり。曰く

門徒と申は本山門中の徒らにして、徒弟と申す儀に御座候、右祖師異智識の御弟子は本山門中の徒ら故、一宗に流を汲み候諸國の僧俗却て門徒と稱し、別ては僧俗の差別御座候

第四段 本願宗及本願寺宗

本願宗とは、彌陀の本願を信じ、其本願力に由つて極樂淨土に往生し成佛する故命名せしものにして、彌陀の本願は淨土及び淨土教成立つ根本要素にして、絶對他力教の立脚地なるを以てなり、尤も茲は獨り眞宗にのみ用ふべきにはあらず、彌陀の本願を信じ他力往生を期する宗旨には、悉く應用すべき命題なり。

又本願寺宗とは戰國時代に行はれしものにして、茲は石山軍等の事ありて、諸國に於ける本願寺の門徒が、本願寺の爲めに献身的活動を爲せし光景に對して、稱歎と黨派的意義とを合して、世人が自然的に命名せしものなり。

第五段 淨土宗及淨土眞宗

淨土眞宗は本名なり、下を略して淨土宗と云ふ、淨土宗とは淨土門一切に冠すべき總名なり、然るに今や淨土宗は一宗として他に公稱せるものあれば、此の略稱は本宗にては用ひざる事と爲れり、又上を略して單に眞宗と云ふ、左れば淨土眞宗とは具名にして、總名と特命とを兼ねたるものなり。

親鸞聖人の教行信證開卷には、先づ大無量壽經と書し、其下に眞實之教淨土眞宗と割書し、更に、謹按淨土眞宗有二種回向、一者往相、二者還相、就往相回向有眞實教行信證、又唯信鈔文意に曰く、眞實信心をうれば實報土にむまるとをしへたまへるを淨土眞宗とすとしるべし。

又未燈鈔に曰く、淨土宗の中に眞あり假あり、眞といふは選擇本願なり、假と云ふは定散二善なり、選擇本願は淨土眞宗なり。

又同書に、今此の淨土宗は横超なり云々として、單に淨土宗なる名稱をも屢々用ひあり。又高僧和讃には、智慧光のちからより、本師源空あらはれて、淨土眞宗ひらきつゝ、選擇

本願のへたまふと云へり。

逆如上人は、左の如く云へり。

開山は此の宗をば、淨土眞宗とこそ定め玉へり、されば一向宗といふ名言は更に本宗より申さぬなりと知るべし、されば自餘の淨土宗は諸の難行をゆるす、我聖人は難行をえらび玉ふ、此の故に眞實報土の往生をとぐるなり、このいはれあるが故に、別して眞の字をいれ玉ふなり。

因に徳川時代には、幕府が淨土宗増上寺の檀越たりし故にや、幕府始め諸藩にても、公文書に淨土眞宗の名を用ゆるを忌み、多く一向宗と署せしめたり、之れ甲を淨土眞宗と公稱すれば、乙丙等の他の淨土教は淨土假宗又は淨土僞宗たるの觀あるを以ての故なり、斯くて安永三年西本願寺は幕府に對し、淨土眞宗の宗名公認を求めたりしに、増上寺は頑強に抗議し、結局一萬日の御預けと爲れり。

第六段 眞宗及絶對他力教

前段に述べたる如く、眞宗とは淨土眞宗の略名なり、然れども單に眞宗と稱すべき根據もあり、善導の觀經疏には、眞宗難遇とあり、又法照の五會法事讚には、念佛成佛是眞宗と云へり、教行信證にも第一卷の序文に、敬信眞宗教行證と云ひ、同第二卷には、大無量壽經之宗致、他力眞宗之正意也とあり、又同三卷には、横超者即願成就一實圓滿之眞教眞宗

是也と云へり、正信念佛偈には、本師源空明佛教憐愍善惡凡夫人、眞宗教證與片州、選擇本願弘惡世とあり、又高僧和讃には、善導源信すゝむとも、本師源空ひろめずば、片州濁世のともがら、いかでか眞宗をさとらましと云へり。

之を要するに、淨土眞宗の淨土とは所期の果界にして、此の淨土に往生を期すれば、往生淨土の略にして、此土入聖の聖道門に對據するの名なり、眞宗とは淨土門中、權實眞假種々の法あるが故に、其中權假方便の説に簡んで、専ら眞實の一法を取て、以て所宗を定むるなり、蓋し龍樹釋尊所説の法門を、難行易行の二道に分ち、道綽は聖道淨土の二門と判せり、今は其難行の聖道門を捨て、易行の淨土門に入り、往生淨土を期するを稱して淨土とす、而して眞宗の眞たる、眞實にして權假方便に簡ふと云ふは、均しく是れ往生淨土の法門にして、或は萬行を勧め、或は念佛を教ふるあり、又善導は往生淨土の行を判じて正雜二行とせり、今は難行の權假を捨て、正行の眞實に歸するを名けて眞宗とす、蓋し此界に於て、斷惑證理する聖道門に對して、淨土往生を教ふるが故に、總じて淨土宗と名くるなり、此の淨土宗の中に於て眞實と方便との二類あり、其中難行雜善の方便を捨て、専修正行の眞實に歸するを以て本意とし、之を淨土眞宗と稱す、是れ即ち大無量壽

經に、彌陀の本願を説きて、眞實之利とあるに由るものなり。

此の他自力教に對して、他力教又は他力宗と云ひ、難行道に對して、易行宗とも云へり、其義推して知るべし、更に又眞宗は他の他力教に對して、絶對他力教と云ふ、蓋し他の他力教は他力中にも多少自力を認むるものにして、例ば救済力は即ち他力なるも、佛力を信する信心そのものは自力にして、念佛の爲めに往生するものとすれば、念佛を爲すは自力なりと謂はざるべからず、然るに眞宗にては信心其ものも佛力の廻向にして信者自身のものにはあらず、従つて又念佛の爲めに往生するにはあらず、信心は願力に依て來り、往生は一念發起と同時に決定す、左れば一切は悉く之れ佛力即ち他力にして、須毫も自力の認むべきなく、又幾分にては自力を加味すれば如上の往生は不可能なりと爲す、之れ即ち絶對他力教と稱せらるゝ所以なりとす。

第四章 教理開展

第一段 釋尊の成道

印度は世界最古の國にして、又思想界の祖國なり、其西に影響するものは泰西の哲學

と爲り、其東に傳流せしものは日支の佛教と爲り、今より四千年前以降二千餘年の間は、世界文明の中樞と爲り、其裡に鑄冶鍊化せられたる巨頭釋尊は、實に世界至上の巨人にして、古今を空うせる宗教的偉才なり、斯の如き偉人は如何にして出現せしか、今其機運を察するに、釋尊出世前百餘年間、即ち西曆紀元前五六百年代に於ける、印度思想界の光景を觀するに、其國教たる波羅門教が隆盛の極に達せると俱に、宗教道德は全たく外形儀式に流れ、又他方には犠牲苦行等の迷信流行し、人民は一の自由なく一の活動なく、其化石的表面の安靜なる裏面には、不安煩悶の熱火漸く旺にして、革新の機運將に近づかんとして、未だ其曙光に接せず、思想界必然の順序は、茲に忽ち懷疑に陥り、宗教及び道德を否定する現在の物質主義、感覺的快樂主義の跋扈するあり、彼の順世論派の如きは一切を否定し、全然肉慾的快樂主義の最極端に達し、之れと同時に又一方には、時勢の非なるを見るに忍びざる宗教的又は哲學的人物は、隱遁的生活を以て、波羅門の教權以外に自由清淨の生活を營み、以て思想上の休養を計るあり、而して此風習は漸く其勢を得て、遂には淨行者相團結して、一の教派的團體を形成するに至れり、釋尊の先輩にして闍伊那派の開祖たるワルターマ及び釋尊出家當時に教を乞ひし阿羅藍仙等の如きは、是

等團體の首領として尤も著名なるものなりき。

懷疑は曙光に先づ曉霧なり、新舊思想の過度に屬するものなり、九十六種の外道は統一的偉人出現の露拂たり、印度に於ける當時の光景、何ぞそれ能く我が日本の即今に酷似せるに非ずや、抑、釋尊は印度恒河の中流北邊の地に位せる加比羅なる一城主淨飯王の太子、即ち刹帝利族の人なり、而して其生年月の如きは古來三十二種の異説あるも、大約西曆紀元前五百十年の頃なるが如し、斯くて城主の世子たる釋尊は二十九歳の時、一説には十九歳とも云ふ、其尊榮を捨て、出家せり、釋尊の出家に就ては、其統治する國家に關する事情もあり、又家庭内の原因も存したるや疑なきも、其主因は正しく思想上の懷疑煩悶即ち生老病死更に切言すれば未來問題に存するや、固より疑なき所なりとす。

釋尊は斯の如き事情と動機とに依りて出家し、當時知名の學者宗教家を訪ひ、自己の胸中に横れる人生問題即ち生死に對する解決を求めたるも、一つとして満足の説明を得る能はず、一旦は殆んど絶望の域に沈まんとせしが、更に勇氣を鼓して靜座沈思以て漸く無上正覺、即ち宇宙の真相、人生の歸趣に關する疑問を解決し、生死の理を究め、轄然として大悟せり、一切を覺知せり、經に其光景を叙して曰く、釋尊成道の曉歡喜禁せず、揚

言して曰く、我は不死を得たりと。

釋尊の成道は三十歳と云ひ、或は三十五歳と云ふ、斯くて釋尊は一方に四諦十二因縁八聖道の通佛教根本義を組織的に宣布し、其身は嚴肅なる生活を持し、爾來四十餘年間大々の活動を逞ふし、其一視同仁の大慈悲と自業自得業輪廻の舌鋒は、化石せる四姓の階級と、腐化せる教權主義とを打破して、不安の淵底に沈淪せる印度人民は、茲に始めて赫々なる光明を認め、思想界の生氣次第に復活して、新生面を開き新生活に入ることを得、國家的波羅門教に一轉進を加へて、宇宙的普遍的の人類教は確立するに至れり。

抑、成道後の釋尊は、何等の珍奇なく、單に熱誠摯實敬虔なる導師たり、戒行嚴肅の僧侶たり、法を説き勸化倦むことなきの牧師なり、敢て教義の組織を能事とせず、又敢て他の教學派に對し、強て抗議爭論を企てしに非ず、極めて常識的に、極めて平和的に、其天職を全ふし、其弟子に對しては極めて懇切に、又其生活としては質素簡易にして、平民主義を専らとし、尤も圓滿なる人格の模範を遺し、宗教家の典型として、其八十歳の頃一老丘は安祥入滅せり、釋尊の入滅するや、五天の四民は悉く失神し、禽獸亦來り悲めり、八國の王は腐心して漸く其遺骨を分てり、噫、人類の發生以來上下茫茫幾百萬歳、何ものか敢て能

く之に比儔するあらん。

第二段 佛教の標幟

既に均しく佛教と稱する以上は、八家九宗と分かれ、又現時我が日本に存在する如き十四宗五十四派の流派ありと雖も、何等かの共通點なかるべからず、此の共通點は之を何れに求むべきか、教主釋尊は正しく各宗派に共通なるべきは當然なるも、而かも彌陀教、大日教等、縱令名稱丈にても異様の教主を標榜するあり、茲に於てか教理の上より、何等かの共通點を發見するの必要あり、然るに教理には教派宗義分流の原因として、大小權實聖淨、自他、顯密、教禪等の區別あり、之れ亦輒く其一致點を見出す能はざるが如し、然れども又翻て詳らかに考檢すれば、大小、聖淨、顯密と教理上淺深不同の差別ありと雖も、其骨髓に於て共通一貫せる原理ありて、全佛教を統一せり、其共通の原理とは何ぞ、曰く三法印之れなり、世の佛學者或は三法印を以て、小乗教の標幟の如く論ずるものあるも、茲は大なる誤見にして、三法印は全佛教に共通せる唯一の標幟なり、蓋し三法印とは九十六種の外道に異なる特徴を表明して、佛教と外教とを分つ照尺たらしめたり、故に若し佛教内孰れの宗派にても、此の三法印に矛盾撞着する教義を唱ふるものあれば、そは

最早佛教の範圍より脱退するものにして、縱令教祖として釋尊を崇祀するも、佛説の經典を依用するも、決つして佛教と稱するを得ざるものなり。

三法印とは何ぞや、曰く、諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜是れなり、諸行無常とは、宇宙の萬有は悉く轉變無常にして、一つも常住不變のものなきを云へるものにして、茲は吾人の經驗的事實なり、次に諸法無我は、萬有には主體たるべきものなきを謂なり、吾人を解剖分析して靈魂を求め得べきか、宇宙を穿鑿して主宰者を求め得べきか、決つして求め得べからざるなり、第三に涅槃寂靜は、實在の實際は有無斷常の二偏を離れ、言語文字を超越せる不可思議の境界なり、靜寂とは單に靜かなりと云ふ意には非ずして、轉變無常を指斥するの義を表せるものなりとす。

更に又此の三法印を極論すれば、諸行無常は哲理的には唯物論を破斥し、人生觀上には物質主義を打破せるものなり、第二の諸法無我は、宇宙的に有神論を壞却し、個人的に靈魂實有説を排斥せるものなり、第三の涅槃寂靜は、本來の面目、實在の風光を顯揚せしものなり、佛教の眞髓は茲に盡き、業感緣起や十二因緣は、現象界より説明して此の法印に到らんとし、眞如緣起法界緣起は實在界に立脚して、此の法印を説明せんと企て、又阿

頼耶縁起、六大縁起は、兩者の中間に立ち、前後の關係を説き、八聖道も八不無所得觀も、三諦觀も、十玄觀も、三密觀も、悉く涅槃寂靜の本地眞相に接せんとするに外ならず、斯の如くにして八千餘卷の經論、八萬四千の法門、八家九宗、十四字五十餘派の龐大浩濔にして、而かも一見支離滅裂、正反相容れざる如き複雑なる佛教も、一糸亂れず一幹遂に鬱蒼たる宵天の繁茂を見るに至りしものなりとす。

第三段 淨土思想の由來

阿彌陀佛の主宰せる極樂淨土説の完成せるは、固より佛滅後にして、所謂三部經の結集は、小乗部諸經の結集後、馬鳴の出世前大乘教勃發の時にあるや疑ひなし、然れども淨土思想そのものは、印度の最古より連續的に發展しつゝある所にして、此は獨り印度のみに限らず、時の古今人智の文野に關せず、人類共通の思想にして、太古より無終に連續すべき精神界の命題なりとす、左れば佛教淨土門の極樂往生思想も、其淵源は甚だ古く、波羅門教は固より、所謂九十六種の外道の如きも、其多數の究竟的理想とする所は、此土厭離極樂欣求にあるや論なき所なり、由來印度は氣候の關係、生活の狀態よりして、厭現欣未の厭世的觀念特に強く、従つて冥想に耽り、時間的に過去未來に對し、空間的には十

方に亘つて種々なる構想を逞うし、遂には上に三十三天説、下には八寒八熱地獄説の如き、或は三千大千世界説の如き、過去幾億萬劫未來無限劫の如き、雄大無限寧ろ空想に近き世界觀人生觀を構成するに至れり。

極樂淨土なる根本の原因は、現在の國土より遙かに善美なりとする天上界の觀念より脱化し來りしものにして、淨土往生の希望は畢竟生天思想の變名のみ、又淨土の主宰者たる阿彌陀佛の如きも、天輪聖王又は吠陀中に存する慈悲溫和の神たる毘溼拏の進化せるものと云ふべく、毘溼拏は本來太陽を神格化したるものにして、光明生育の徳を崇拜するに基因し、光明なる思想及言語は、常に善及美及威を代表するものにして、阿彌陀佛を無碍光等十二光明なる名稱を附する點よりするも、又以て其起因を反推するに足るべし、ケルン氏等の如きは、釋尊をも歴史上の人物に非ずして、太陽の擬人なりとの珍説を出すに至れり、勿論此は顛倒にして釋尊の威徳を太陽化したる事、恰かも日本の大日女即ち天照皇大神を直ちに日輪と思考すると同一意義なるや論なし。

之を要するに、阿彌陀佛及び其極樂淨土なる思想は、佛教以前に於いて、印度の思想界を支配し居りし生天の觀念、溫和なる毘溼拏、光明ある太陽の神格化、及び天輪聖王、大善

見王等の説より轉化し來り、更に那羅延天、梵天、摩醯有羅天の一體三分説等をも加味し、其結果所謂法報應の三身説をも發起するに至りしものなり。

尤も淨土教の正系は、小乗佛教大衆部に於ける佛身論の開發せるものにして、阿彌陀佛は釋尊の擴張、淨土は涅槃の動的寫象と見るが至當なるべし、然れども事實としては、印度に於ける固有なる特殊の生天思想に、佛教の因果輪廻の教義を運用して、開發完成せしは何人も異議なき所なるべし。

又佛教内に於ても、兜率往生は淨土往生の思想よりも早く發展し、彌勒菩薩が現に兜率天にありて説法しつゝあり、後來成佛すべしと云ふ懸文の如き、又佛教徒にして彌勒の説法を聞かんが爲に、特に兜率往生を希ふが如きあり、然るに彌勒は阿彌陀に比して劣等なる上、兜率往生は淨土往生の如く終局の往生成佛に非らず、左れば淨土往生説は兜率往生の一進轉若くは改作と見るも不可なく、又兜率往生は堅にして、淨土往生は横なりとも云ふべきなり。

第四段 釋尊の淨土觀

釋尊は五十年の久しきに亘りて、縦説横論せり、然れども當時之を筆録せるに非らず、

聞法の門下遺弟互ひに口誦相傳へ、四五百年の久しきに亘りて、漸次之を結集し、漸く貝葉の文章と爲りしものなり、而して其結集するや、其戒律及法相に關するものは、第一著に成遂せられたり、此は教團維持の上に於て已むを得ざる至當の事柄にして、如何なるものにも日常必要なる儀式法則は、第一に之を鮮明し、高尚なる理論の如きは之を後廻しに爲すは必然の勢なりとす、大乘非佛説の如きは既に馬鳴當時に起れり、今日にては歴史的研究の結果、秘密部の諸經を始め、大乘經の多くは佛滅以後數百年間に於て、漸次に編成せられたるものにして、決して釋尊の直説には非らず、所謂大乘は開發的佛教なりと稱し、今や之を否定するの不可能なる状態に至れり、然れども佛滅後數百年の佛敎史否印度の全歴史は、全たく暗黒にして、何事も容易に其真相を捕捉する能はざるの憾みあり、吾人も亦大乘諸經を以て、全部釋尊の直説なりとは信せざるも、亦一方より考察する時は、比較上原始的なりと稱する小乗經中にも、大乘的思想を見ること難からざると同時に、大乘經中にも小乗的部分頗る多く、經論を大小乘に分別する事は、實に不可能にして、現在の分別の如きは、所謂大乘家の臆斷と、其指して小乗家と爲す眞面目なる戒律主義を取り、理論に通せざる頑固黨の嫌疑より出でたる争に基くもの多し、

左れば小乘經中にも非佛説あり、大乘經中にも佛説あるべく、截然兩者を分別するは固より穩當の態度に非ざるなり。

吾人は戒律を以て釋尊の實踐道德と爲し、所謂小乘經其他法相に關する諸説を以て、釋尊の科學と爲し、禪を以て釋尊の精神修養と爲し、華嚴法華等の如き大乘諸經を以て釋尊の哲學即ち最高思想と爲し、淨土教を以て釋尊が直弟以外一般人民に對する化他の宗教、切言すれば、釋尊の宗教は淨土經なりと爲るものなり、更に又以上を釋尊の年次に配すれば、小乘は最初の思想なると同時に、波羅門教其他の硬化墮落せる思想界に必然なる革新的要求に對し、嚴肅なる道德、迷信打破として高唱せられたるものにして、又大乘經は特殊の思想家に對して、所謂隨自意即ち自己の眞意見を内談せしものなり、更に又淨土教は老後の思想にして、且つ劣惡の機類に對する救濟の熱誠より説きたるものなり、由來人類は如何に過激なる唯物的論者と雖も、亦如何に理義に深刻なる哲學的思想家と雖も、老境に及びては漸次信仰的と變轉するものにして、殊に印度に於ける思想界の風習は、如何にしても此の範疇を脱すること能はず、龍樹天親の如き皆此の徑路を辿れり、釋尊も亦此の大勢に超脱するものに非らずして、淨土教の思想及其説法あり

しは疑ひなき所なり。

他は且らく之を措くも、觀無量壽經に現はれたる韋提希夫人の事蹟即ち幽閉の苦惱より、密に釋尊に精神的救濟安慰法を求め、釋尊は之に對して淨土往生の主旨を説かれたるは、歴史的事實として承認せざるべからず、其他小乘經中に過去及未來の佛を説き、又奇光如來の如き現在佛を説くを見れば、時間的に多佛出現と空間的に各世界に、多佛同在する思想は、當初より之を有せしものと見るべく、從つて阿彌陀佛の現在説の如きは、敢て怪しむに足らざるなり、又諸經中釋尊の本生譚即ち前生に關する説話と、阿彌陀佛の因位即ち本生譚は相類似するもの多く、兩者の關係に離るべからざる點あり、即ち或は兄弟たり、或は師弟たり、或は恩敵たり、或は又兩者同一たるやの感を惹くに足るべきものあり、特に小乘阿含部に攝せられ居る生經には、釋尊及び阿彌陀佛に關して左の如き説あり。

佛、諸の學者に告げて言はく、昔、首達と名くる長老の比丘ありて五千の人を教化しつゝありき、その時惟先と名くる比丘あり、年若けれども智慧深く、諸の國を遊行して六萬の人を教化し、巡り／＼て首達と相會することゝなりぬ、首達の弟子等は惟

先の智慧勇猛なるを見て、皆往きて此の若き師を尊崇せんと欲したり、首達はそれを快からず思ひ、諸の學者に告げて云く、惟先は年幼く智慧薄き者なりと、惟先は竊に此の言を聞き、其夜默然として其國を去れり、こは諸の學者をして専ら首達を供養せしめんが爲なりき、首達はかく惟先を誹謗したる罪により、摩訶泥梨に墮ちて六十劫の間、諸の獄苦を受け出で、人と爲りし後も、六十劫の間、舌無き瘡となれり、是れ實に意を制し口を慎まざりしが故に菩薩の法を失ひしなり、されど罪盡きて後前の功德を逮得し、遂に成佛して釋迦文と號するに至れり、諸の學者よ、かの首達は吾身なり、又かの惟先は今の阿彌陀佛なり。

抑も釋尊の本生譚なるものは、後日末徒の修飾せしものたるや論なきも、其原料は正しく釋尊の直説たり、釋尊が如來眞身の不滅は、常に唱道せる所にして、増一阿含經に、我釋迦文佛壽命極長なり、然る所以は肉身滅度を取ると雖も、法身は存在すと云へり、之に類する説は頗る多し、既に未來の存在不死を認むる上は、必ずや過去の前生を察するに至るべく、而して過去と未來の存在輪廻轉生は、佛教因果説の根本原則なれば、本生譚なるものは決つして荒唐の言とのみ云ふべからず、殊に精神の修養統一の結果、所謂三昧

を發得して一種の定力を以てすれば、今生に於ける出産後の赤子時代の境遇事實より、尙逆進して前生の有様をも感得し得ることは、現時の科學にても承認する所なり、左れば釋尊が其定力に依りて、自己の本生を知れりとするは、決して怪しむべきに非らず、既に自己の前生を知る時は、之に關聯せる一切を知り得べく、従つて阿彌陀佛の因位を語るも亦敢て無稽と云ふべからず、左れば阿彌陀佛は釋尊の末徒が、佛身論の發展に従ひて、釋尊の徳相を擴張せるものなりと云ふより以上に、無限の空間と無限の時間とに於ける可現的必有的の事實なりと云ひ得べきなり。

之を要するに、無限絶大なる釋尊の思想界には、彌陀及び其淨土の存在せしは、更に疑ひなき所なり、然れども淨土往生の意義が、今日眞宗の主張するが如き絶對他力教なるや否やは疑問にして、吾人は釋尊の淨土教なるものは、觀無量壽經の表面に現はれたる如き、主旨を有するに止まりしものなるべきを信ず。

第五段 龍樹天親の淨土思想

起信論には、復次に衆生初めて是の法を學し、正信を欲求するに其心怯弱なり、此の娑婆世界に住するを以て、自ら常に諸佛に値て親承し供養すること能はざるを畏れ懼れ

て成就すべき信心難と謂て、意退せんと欲する者は、當に知るべし、如來勝方便あり、信心を攝護す、謂く意を專にし佛を念ずる因縁を以て、願に隨て他方の佛土に生ずることを得て、常に佛を見て永く惡道を離る、修多羅に説くが如し、若し人專ら西方極樂世界の阿彌陀佛を念じ、所修の善根廻向して彼の世界に生れんと願求すれば、即ち往生することを得、常に佛を見るが故に終に退することあるなし、若し彼の佛の眞如法身を觀じて常に勤めて修習すれば、正定に住するが故に畢竟して生ずることを得とあり、此の起信論の著者馬鳴には時代を異にせる六人の同名異人あり、從つて起信論も或は龍樹以後の作とも稱せらる、然れども其大體よりすれば、大乘佛教勃發の劈頭に在りしものなるが如し、而して其念佛論の如きも、意味は頗る深重なるも、未だ念佛を以て方便とするの境を脱せず、又聖道門に優れる所以をも審かにせず、左れば淨土教としての起信論は、極めて原始的概念的のものと謂ふべし。

次に龍樹の十住毘婆娑論易行品に云く、

菩薩阿惟越致地(即ち不退轉地)に至らむとせば、諸の難行を行じて久うして乃ち得べし、然るに若し中途にして聲聞辟支佛地に墮することあらむか、是れ大なる患なり、是の故に、若し諸佛の所説に易行道ありて、疾く阿惟越致地に至ることを得るあらば、願くば之れを教へよ、

汝が言の如きは、是れ懦弱怯劣にして大心あることなし、是れ丈夫志幹の言に非ざるなり、何となれば、若し人願を發して佛道を求めむとし、未だ不退轉地を得ずんば、應に身命を惜まず、晝夜に精進して頭燃を救ふが如くすべきなり、然るに敢て易行道を求めんとす、是れ即ち怯弱下劣の言のみ、是れ丈夫志幹の説に非ざるなり、されど汝若し必ず此の方便を聞かむと欲せば、當に之を説くべし、佛法に無量の門あり、世間の道に難あり易あり、陸道を歩行するは則ち苦しく、水道の乗船は則ち樂しきが如し、菩薩の道も亦是の如し、或は勤行精進のものあり、或は信方便の易行を以て、疾く不退轉地に至る者あり。

阿彌陀佛の本願是くの如し、若人我を念じ名を稱へて自ら歸すれば、即ち必定に入り阿耨多羅三藐三菩提を得べし、是故に常に應に憶念すべし、偈を以て稱讚せむ。無量光明慧身は眞金山の如し、我今身口意を以て合掌稽首して禮し奉つる、人能く是佛の無量力功德を念すれば、即時に必定に入る、是故に我常に念じたてまつる、若

人佛に作らむと願ひて心に阿彌陀を念すれば、時に應じ爲に身を現はしたまふ、是故に我彼佛の本願力に歸命す、十方の諸菩薩も來て供養し法を聽きたまふ、是故に我れ稽首す、若人善根を種へて疑へば則ち華開けず、信心清淨なる者は華開いて則ち佛を見たてまつる、十方現在の佛種々の因縁を以て、彼佛の功德を歎じたまふ、我今歸命し禮したてまつる、彼の八道の船に乗じて能く難度海を度す、自度し亦他を度す、我自在人を禮したてまつる、諸佛無量劫に其の功德を讃揚せむに、猶尙盡すこと能はず、清淨人を歸命しなてまつる、我今亦是の如し、無量の徳を稱讃す、是の福因縁を以て、願はくば佛常に我を念じたまへ。

若し人疾かに不退轉地に至らんと欲する者は、應に恭敬の心を以て執持して名號を稱ふべし。

龍樹の説は、明らかに淨土教の易行道、即ち成佛の近道たる事を説破し、又本願力に歸命すべきを論じ、名號執持即ち稱名の肝要をも主張せり、而して其本願力歸命の本源を主として大無量壽經に稟けたる點よりして、將又楞伽經安樂國往生の懸記よりして、眞宗の第一祖とせしは寔に其理ありとす、然れども又一方より之を見る時は、淨土往生は

或時機の爲めにする方便たる意味なきに非らざると同時に、其記述の方式は客觀的に他に對するものにして、自信の主張たる傾を具せず、且つ主として華嚴經を解釋せる聖道論の一部に附加して説けるものなれば、法然聖人が傍明とせしも當然なり、左れど亦是故我常念、願佛常念我の句よりすれば、本願力廻向の意味も灰見へて、易行品は龍樹の全信念とも諒せられざるに非らざるなり。

天親の淨土論に曰く、

世尊我一心に盡十方の無碍光如來に歸命して、安樂國に生せむと願ふ、我修多羅眞實功德相に依りて願偈の摠持を説き佛教と相應せり、彼の世界の相を觀するに、三界の道に勝過せり……佛の本願力を觀するに、遇て空しく過ぐる者なし、能く速に功德の大寶海を満足せしむ……我論を作りて偈を説く、願くば彌陀佛を見て、普く諸の衆生と共に安樂國に往生せしめむ……是の如く菩薩智慧心、方便心、無障心、勝眞心は能く清淨佛國を生ず、乃至速に阿耨多羅三藐三菩提を成就し得るが故に……云く大慈悲を以て一切苦惱衆生を觀察して應現身を示す、乃至本願力廻向を以てす。

天親は更に信願願生者の行業として、五念門を規定し、進んで其成果たる五功德門を説けり、五念門の第一は禮拜にして、身に彌陀如來を禮拜して彼國に生ずる意を表すること、第二は讚嘆なり、口に彌陀の名を讚揚歌歎すること、第三は作願なり、心に常に作願して一心專念に畢竟して安樂國土に往生し、如實に奢摩他を修行せむと欲するを云ふ、茲に奢摩他といふは止てふ意味で、心をして寂靜ならしめ、諸の妄念惡心を止むるを云ふなり、第四は觀察なり、正念に彌陀の淨土を觀察することをいふ、衆生既に安樂國に往生せんとするや、いかで彼國の莊嚴と、其實相とを觀察せざるべけんや、されば天親は明らかに、彼土の風光を觀じて二十九種の莊嚴を認め、之を嘆美せり、第五は廻向として、先の止と觀によりて集むるところの一切の功德善根を以て、自身住持の樂を求めず、一切衆生の苦を抜かむと欲し、一切衆生を攝取して、共に同じく彼の安樂佛國に生ぜむと作願する事なり。

然り而して五念門の成果は、即ち五功德門にして五功德門の第一を近門といふ、初めて安樂世界に生まるゝを云ふ、之れ修行の第一として禮拜をなせる成果なり、第二を大會衆門といふ、如實に佛名を讚嘆せるを以て、菩薩の大會衆に入るなり、第三を宅門とい

ふ、奢摩他の行力は、彼土に於て修行安心の宅を得るなり、第四を屋門といふ、毗婆舍那の觀念成就して、種々の法味の樂を受用するを得るなり、第五を園林遊戲地門といふ、廻向の成果として大慈悲を以て、一切苦惱の衆生を觀察して應化身を示し、生死の園、煩惱の林中に廻入して、神通に遊戲し教化地に至るを得るなり、左れば此の五功德門は、正に成佛に至る階級とも見るべく、又證果の妙用とも觀せらるゝものなり。

之を要するに、淨土論は三部經に通用して一心歸命の信心を以て、安樂淨土に往生すべきを鼓吹せるものなれど、三經の中にては特に大經を主とし、大經の論とも見るべきものにして、其記述の方式は主觀的即ち自己信念の告白にして、龍樹の易行品に比すれば、一佛一心願生安樂國て淨土教の面目を鮮明ならしむ、特に旗幟を掲げて淨土教を主張せしは、本論を嚆矢とす、左れば教旨組織の上よりするも、將又布教上よりするも、龍樹に一步を進めたるものと謂ふべし、尤も論主の智解が唯識を本據とせるより、淨土門の解釋も亦觀念的臭味を帯ぶるものあるは、印度思想界の風潮と共に又止むを得ざる所なりとす。

第六段 論註と安樂集と觀經疏との比較

支那に於ける淨土門の發端は、三國時代康僧鎧が無量壽經を譯出せるに始まり、晋の世慧遠が廬山に白蓮社を組織して、念佛修行を企つるに至つて實施せられたり、抑々白蓮社の念佛は純粹の他力念佛に非ずして、多少禪意を加味せる觀念的念佛なることは、其の行儀の上に於て見るも、亦慧遠が佛陀跋陀羅に禪經の講を受け、又其同行信者が大抵隱遁的士人なるを見るも、證明し得る所なりとす、此の流派は唐五代の世、他の佛派に壓せられて萎靡振はざりしが、宋の太祖佛教を奨励するに及び、善導流の念佛に甘んぜず、さりとて禪には入る能はざるもの、皆此に集り一時頗る隆盛を極めしが、宋の治平久しきに及び、支那民俗の本色たる現實主義は來世的宗教に甘せざると、儒學勃興して天下の風靡せるとに由り、全たく衰退せり。

慧遠の後、百年六朝北魏宣武の世、菩提流支來て觀經を曇鸞に授けしより、曇鸞流の他力念佛起り、曇鸞の後三十餘年唐の貞觀年中、道綽、善導二師續いて出で、殊に善導は淨土教の網格を定め、盛に下層民間に播布を計りければ、其勢旺盛を極め、一時は肉肆顧客を失ふに至れりと云ふ、我國に傳來流布せしは、則ち此の流派にして、爾來現時尙盛況を保ちつゝあるに反し、支那に於けるものは、慧遠流の末路と選ぶなきの運命に終れり。

善導の後十數年唐の玄宗の世慈愍なるもの、久しく西域を跋渉して歸來の後、念佛往生を唱道せり、之れを慈愍流の念佛と稱せり、抑も慈愍入竺の前後、印度は印度教確立の時代にして、又支那には不空が密教を興隆せし當時なれば、慈愍流の念佛は多少、印度教及び密教的眞言瑜伽の風臭を帶ぶるものなり、而して此の流派は左したる盛況を見るに及ばずして退滅せり。

曇鸞は天親の淨土論を註釋せんとして、先づ龍樹の易行品を引證して印度二師の説を統一し、更に之を開發せり、論註の開卷に云く、

謹みて龍樹菩薩の十住毘婆娑を案するに、菩薩阿毘跋致を求むるに二種の道あり一には難行道二には易行道なり、難行道とは五濁の世、無佛の時に於て阿毘跋致を求むるを難とす、此の難に乃ち多途あり、粗ば五三を言つて以て義意を示さむ、一には外道の相善菩薩の法を亂る、二には聲聞の自利大慈悲を障ふ、三には無願の惡人の勝徳を破る、四には顛倒の善果能く梵行を壞す、五には唯是自力にして他力を持つことなし、斯の如き等のこと觸目皆是なり、譬へば陸路の歩行は則ち苦しきが如し、易行道とは唯だ信佛の因縁を以て淨土に生せむと願すれば、佛の願力に乘じ

て便ち彼の清淨土に往生することを得しめ、佛力住持して即ち大乘正定の聚に入る。正定は即ち是れ阿毘跋致なり、譬へば水路の乗船は則ち樂しきが如し、此の無量壽優婆提舍淨土論は、蓋し上行の極致、不退の風航なる者なり。

又云く、凡夫の人煩惱成就するあるも、亦彼の淨土に生ずることを得、三界の擊業畢竟牽かざるなり。

又云く、下品の人法性無生を知らずと雖も、但だ佛名を稱するの力を以て、往生の意を作し彼の土に生せんことを願ふ、彼の土は是れ無生界見生の火自然として滅す。又云く、然るに麁かに其本を求むれば、阿彌陀如來を増上縁となすなり、他利と利他与談するに左右あり、若し佛より言へば他利と云ふべし、衆生より言へば他利と云ふべし、今將に佛力を談せむとす、是故に利他といふ、當に知るべし、此の意なり、凡て是れ他の淨土に生ずると、彼の菩薩人天の起す所の諸行とは、皆阿彌陀如來の本願力に縁るが故に、何を以て之れを言ふか、若し佛力に非ずんば四十八願は便ちこれ徒設とならむ、今正しく三願十八、十一、廿二を取りて、義意を證せむ、之を以て推すに、他力を増上縁となす、然らざるを得んや、當に復例を引いて自力他力の相を示すべし、人三塗を畏るゝ故に禁戒を受持し、能く禪定を修し、神通を修習し、能く四天下に遊ぶが如き之を自力となす、又劣夫驢に跨り上らざれども、轉輪王の行に従へば便ち虚空に乘じ、四天下に遊ぶに障礙なきが如し、これを他力とす、愚なる哉、後の學者他力の乘すべきを聞きて當に心を生ずべし、自ら局分すること勿れ。

論註は龍樹の難行易行に代ゆるに自力他力を以てし、徹頭徹尾他力の信念及教格を現はすに勉め、而して其他力とは因位の願力と、果上の佛力とを鎔合せるものにして、佛心は即ち他力の主體、淨土は此の他力の成果なり、而して吾人の信心も往生も、總て此の他力に依つて成就すべきものなる事を示し、龍樹の念佛を劣行視せるを斥けて、却つて勝妙の行と爲し、又天親の自力聖道を混せる五念門を稱名の一門に約し、惡人正機他力廻向の意趣をも加味して、純然たる淨土門他力教の立脚地を確立せり。

龍樹天親曇鸞の三師は大經を主として、佛陀中心主義に傾き、信心爲本系に屬するものなりしが、道綽に至つては觀經系の念佛爲本宗に趨り、衆生中心主義に移り、未法濁世には淨土門に依られば救濟の道なきを主張し、罪惡觀より淨土教の肝要を述べ、從來聖道門に附屬せる方便法たるが如き觀ありし淨土門を獨立せしめ、聖淨二門を對立して

淨土門が時機相應の教法なり、成佛の早道なること闡明せり、其著安樂集は觀經の玄義要論を集めたるものにして、當時佛教は隋唐の盛運に遭ひ、教相の研究頗る盛に、淨土教に對しては幾多の論難ありしより、道綽は此に對して解説を加へ、時機を勘決して聖淨二門の興廢を明らかなせるなり、同集に曰く

問ふて曰く、一切衆生は皆佛性あり、遠劫已來、應に多佛に値へるなるべし、何に因て今に至るまで、仍ほ自ら生死に輪廻して、火宅を出でざるか、答へて曰く、大乘の聖教に依るに、良に二種の勝法を得て、以て生死を排はざるに由る、茲を以て火宅を出でず、何者をか二となす、一には聖道二には往生淨土是なり、其聖道の一種は今時には證しがたし、一には大聖茲を去ること遙遠なるに由り、二には理深く解微なるに由る。

是故に大集月藏經に曰く、我末法の時の中の億々の衆生、行を起し道を修むるに未だ一人として得るものあらじと、當今は末法にして、現に是れ五濁の惡世なり、唯淨土の一門通入すべき路あるのみ、是故に大經に云く、若し衆生ありて縱令一生惡を造るとも、命終の時に臨みて、十念相續して我名字を稱せむに、若し生せずば正覺を

取らじと。

又復一切の衆生、都べて自ら量らず、若し大乘に據らば眞如實相、第一義空、曾て未だ心を措かず、若し小乘を論すれば、見諦修道に修入し乃至那含羅漢、五下を斷じ五上を除くこと、道俗を問ふことなく未だ其分あらじ、縱ひ人天の果報ありとも、皆五戒十善のため能く此の報を招けり、然るに持ち得る者甚だ稀なり、若し起惡造罪を論ずれば、何ぞ暴風駛雨に異ならんや、是を以て諸佛の大慈勸めて淨土に歸せしむ、縱令一形惡を造るとも、但だ能く意を繋け專精に能く念佛すれば、一切の諸鄣自然に消除して、定めて往生を得む、何ぞ思量せず、都べて去く心なきか。

安樂集の初めには、此の安樂集一部の内、總て十二大門あり、皆經論を引て證明し、信を勸め往を求むと云ひ、其終りには若し斯に於て進むと欲せば、勝に越くの果階し難し、唯淨土門あり、情を以て恠て趣入すべしと。

道綽は斯く聖淨二門の廢立をは明快に解決せしも、其淨土往生の行業に就ては、未だ充分に闡明せられざりしかば、之を稟けて淨土教の本義を以て念佛往生と決定せしは善導なり、善導は觀經疏四卷を著し、諸家の異說を駁撃し、古今を諧定して、佛の正意を顯

にすに勉め、正行雜行を分ち、更に又正業助業を分別し、本願非本願を以て之を廢立せり、從來念佛を以て單に易行とせしを、善導は之を勝行なりと定め、更に凡夫入報土の意を明らかにし、其正行と雜行には、法然聖人散善義の意に依り五種の得失を擧げ、又禮讚には專修と雜修に就て十三の得失を示し、讀誦觀察禮拜稱名讚歎の五種の正行中、特に第四の稱名を以て、正業と爲し、他の四行を以て助業と爲し、疏中の散善義には

一心專念彌陀名號、行住坐臥、不問時節、久近、念々不捨者、是名正定之業、順彼佛願、故

とあり、法然聖人は之に由つて淨土宗を開立し、念佛爲本を主張せり、善導は又釋尊を東方發遣の人、彌陀を彼岸招喚救濟者と爲し、或は信念を堅鞏にして邁進すべきを論さん爲め水火二河喩を説き、又觀經の三心を釋して、三心を深信の一心に統一し、自己の罪惡と佛陀の願力を信する力の偉大なるを示せり、其要に曰く

一には至誠心、至は眞なり、誠は實なり、一切衆生の身口意の業を修むる所の解行、必ず眞實心の中に作したまへるを須るんことを明さんと欲ふ、外に賢善精進の相を現することを得ざれば、内に虛假を懷けばなり、貪瞋邪僞奸詐百端にして、惡性侵め難し、事蛇蝎に同じ、三業を起すと雖も名けて雜毒の善となす、亦虛假の行と名く、眞實

の行と名けざるなり、若し此の如きの安心起行を作さば、縱令身心を苦勵して日夜十二時、急に求め急に作して頭燃を炙ふが如くすれども、衆て雜毒の善と名く、此の雜毒の行を廻して彼の佛の淨土に生ずるを求めむと欲するは、此れ必ず不可なり、何を以ての故に、正しく彼の阿彌陀佛の因中に菩薩の行を行せし時、乃至一念一刹那も、三業の修する所皆な是れ眞實心の中に作し給ひしに由りてなり、凡そ施し給ふ所趣求をなす亦みな眞實なり、乃至不善の三業は、必ず眞實心の中に捨てたまへるを須るよ、又若し善の三業を起さば、必ず眞實心の中に作し給ひしを須るよ、内外明闇を簡ばす、皆な眞實を須るが故に、至誠心と名く、二には深心、深心と云ふは即ち是れ深く信するの心なり、亦二種あり、一には決定して深く、自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來、常に没し常に流轉して、出離の緣あることなしと信す、二には決定して深く、彼の阿彌陀佛四十八願を以て衆生を攝受したまふ、疑なく慮りなく彼の願力に乗じて、定めて往生することを得と信す。

仰ぎ願くば一切の行者等、一心に唯佛語を信じて身命を顧みず、決定して行によりて、佛の捨てしめたまふ者は即ち捨て、佛の行せしめたまふ者は即ち行じ、佛の去か

しめたまふ所は即ち去く、是を佛教に隨順し佛意に隨順すと名く、是を佛願に隨順すと名く、是を眞の佛弟子と名く。

一心に専ら彌陀の名號を念じて、行住坐臥に時節の久近を問はず、念々に捨てざるをば是を正定の業と名く、彼の佛願に順するが故に若し禮誦等に依らば、即ち名けて助業となす、此の正助二行を除きて、已外の自餘の諸善を悉く雜行と名く。

又廻向發願して願生する者は、必ず決定眞實心の中に廻向したまへる願を須ゐて、得生の想を作せ、此の心深く作すこと金剛の若くなるに由りて、一切の異見、異學、別解、別行の人等の動亂破壊する所とならず、唯是れ決定して一心に捉り、正直に進みて彼の人の語を聞くことを得ず、即ち進退の心ありて怯弱を生じ廻願すれば道に落ちて、即ち往生の大益を失ふなり。

一切の往生の人に白す、今更に行者のために、一つの譬を説きて信心を守護し、以て外邪異見の難を防がむ、何者か是なる、人あり、西に向ひて行かむと欲するに百千里あらむ、忽然として中路に二河あり、一には是れ火の河にして南にあり、二には是れ水の河にして北にあり、二河各々闊さ百歩にして、深くして底なく南北に邊なし、正

しく水火の中間に一の白道あり、闊さ四五寸許なるべし、此の道東岸より西岸に至るに、亦長さ百歩なり、其水の波交はり過ぎて道を溲ほし、其火の燄亦來りて道を燒き、水火相交はりて常に息むことなし……此の念をなす時、東岸に忽ち人の勸むる聲を聞く、汝たゞ決定して此の道をたづねて行け、必ず死の難なからむ、若し住まらば即ち死せむと、又西岸の上に人あり、喚ふて言はく、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん、須らく水火の難に墮ちむことを畏れざれと、此の人既に此に遣はし彼に喚ぶを聞いて、即ち自ら正しく身心に決定して道を尋ね、直に進みて疑怯退心を生せず。

之を要するに竺支五師の所説は、大經系佛陀中心主義と觀經系衆生中心主義の二傾向を有し、其間に自ら同異を含み、各々特長ありと雖も、要するに雜より純に至り、漸次其旗色を鮮明ならしめ、以て遂に淨土教の獨立を見るに至り、更に又其淨土門内に於て、正助の廢立を行ひ、以て醇の醇なるものと爲しめ、兩國に於ける淨土教の發展は善導に至つて正に窮まれりと云ふべきなり。

第七段 寓宗としての日本淨土教

日本に於ては無量壽經を宮講の始めとし、聖德太子は善光寺如來を尊信し、天智天皇の如きは淨土教の初傳者たる慧隱に依て淨土教を信じ、特に西方極樂世界の眞佛を感じ、丈六の彌陀像を彫刻して誓願寺を建て、之に安置せり、又行基は民間に念佛を弘通せり、其後叡山には常行念佛堂を設け、聖道門の碩徳名僧にして稱名念佛を樂み、西方淨土に生れん事を願ふもの少なざりしが、虎關の元亨釋書に云へる如く、是等の淨土信仰は所謂寓宗にして、聖道門と別立せる淨土教に非らず、即ち聖道門を離れて未だ淨土教なるもの存在せざりしなり、又彼の空也念佛の如き、或は良忍の融通念佛宗の如きは、獨立せる淨土教なるが如き感あるも、空也念佛は固より聖道門の方便として劣機の者を救濟する趣意を出でず、融通念佛宗も等しく聖道門の方便たるの傾きあり、其法華華嚴を正所依の經典とするより見れば、華嚴天台の寓宗と云ふも亦不可なきやの感あり。

良忍に先立ちて源信あり、其著往生要集は正しく法然聖人選擇集の先驅を爲せるものにして、淨土教獨立の豫言たるを失はず、同集は教理を論せず、教相を分別せず、其叙述の方式は全く個人的主觀的にして、自己の自督自信を表し、教理教義の如何を論せず、自己の信念上に資益あるものは悉く之を取り、又自己を以て頑愚なるものと爲して、聖道

門にては到底解脱の力を有せざる故、厭離穢土欣求淨土の念強く、而して極樂往生の爲には念佛を肝要とし、念佛は極めて容易なる上に其功德は非常に重大なることを感知し、極重惡人は他の方便なく唯彌陀を稱して淨土に生るゝことを得と唱へ、以て淨土教の獨立は時代の要求にして、未法濁世の衆生は之に依るの外、成佛の道なきことを闡明せり、更に又其專修雜修の得失を對辨せん爲めに、報土化土を分ち、專修念佛の者は必ず眞實報土に往生することを得て千無一失なり、之に反して雜修の者は懈慢界なる化土に往生すと雖も、眞實報土には萬不一生なりと云へり、之れ一方には聖道自力の修行を戒め、又一方には淨土門中に專雜眞假を分たんとせしものなり。

源信は教義の上に於ても、將又教團としても淨土教を獨立せしめたるには非ず、而して又其位地よりすれば、正しく天台宗の碩學として、其所説も天台の寓宗たるを免れず、然れども裏面より其眞意趣を察する時は、淨土教の獨立と云はんよりも、寧ろ淨土門を以て聖道門に代へんとするの志なりと云ふも亦決つして誣言に非ざるべし、往生要集の要文に曰く、

夫れ往生極樂の教行は、濁世末代の目足なり、道俗貴賤誰か歸せざるものあらん、但

し、顯密の教法その文一に非ず、事理の業因その行惟れ多し、利智精進の人は未だ難しと爲さず、予が如き頑愚のもの豈に敢てせんや。

復獄卒、地獄の人を取りて刀葉林に置きて、彼の樹頭に好く端正しく嚴飾れる婦女あるを見せしむ、是の如く見已りて即ち彼の樹に上る、樹の葉刀の如くにして其身肉を割き、次に其筋を割く、かくの如く一切の處を臂割き已りて、樹に上ることを得て已にかの婦女を見れば、復地にありて、欲に媚びたる眼を以て罪人を看あげて、是の如き言を作さく、汝を念ふ因縁を以て我この處に到る、汝いま何故ぞ我に來り近かざる、何ぞ我を抱かざる、罪人見已れば欲心熾盛にして次第に復下らんとすれば、刀葉上に向ひて利きこと剃刀の如し、前の如く遍く一切の身分を割き、既に地に到り已れば而も彼の婦女はまた樹頭にあり、罪人見已りて而もまた樹に上る、此の如く無量百千億歳、自心に誑されてかの地獄の中に斯くの如く轉行す。

彼の忉利天の如きは、快樂極みなしと雖も、命終らんとするに臨む時は、五衰の相あらはる……當に知るべし、草庵目を瞑すの間は、便ち是れ蓮臺に伽を結ぶの程なるを即ち阿彌陀佛の後に從ひ、菩薩衆の中にあり、一念の頃に西方極樂世界に生ずることを得ん。

一々の光明遍く十方の世界を照して、念佛の衆生を攝取して捨てたまはず、我も亦かの攝取の中に在れども、煩惱眼を障へて見ることを能はずと雖も、大悲憐くことなかくして、常に我身を照したまふ。

今念佛を勸むるは、是れ餘の種々の妙行を遮るに非ず、只これ男女貴賤行住坐臥を簡はず、時處諸縁を論せず、之を修するに難からず、乃至臨終に往生を願求するに、其便宜を得ること念佛に如かず。

雜修の者は、熱心不牢固の人たるが故に、懈慢國に生ずるなり、若し雜依せずして専ら此の業を行すれば、これ即ち熱心牢固にして定めて極樂園に生せん、乃至又報の淨土に生るゝ者は、極めて少なく、化の淨土の中に生ずる者は、少なからず。

第八段 淨土宗の獨立

日本淨土宗の元祖法然聖人の人格主義信念は、一部の選擇本願集に在り、同書の要に曰く

開卷先づ南無阿彌陀佛と標示して、往生之業念佛爲本と割書せり、是れ即ち出離生

死のためには往生淨土の外なく、往生淨土のためには稱名念佛の外なきことを示せるものなり、聖人の此の主張は最初の教相章及び二行章に詳説せられ、即ち教相章に於いては道綽に依つて、聖道門の外に淨土門あることを明らかにし、而も此の二門の教判は道綽よりも更に一層歩を進めて、眞言、天台、佛心、華嚴等の諸宗を一括して聖道門に屬し、是等諸宗の外に淨土宗あるべきことを論決し、道綽にあつては、單に教の分別たりし二門は今や宗の分別となり、淨土宗は茲に全く成立するに至れり、次に二行章に於ては善導に依つて、往生の正定業は特に稱名念佛なるを決定し、而も其説明は善導よりも一層鮮明にせられたり、而して第三章已下は此の主義を保證する爲に、廣く三經の文字を集め、最後の結文に曰く、夫れ速に生死を離れむと欲は、二種の勝法中に且らく聖道門を開きて、選びて淨土門に入れ、淨土門に入らむと欲は、正雜二行の中に且らく諸の雜行を抛ちて、選びて正行に歸すべし、正行を修せむと欲は、正助二業の中に、猶ほ助業を傍らにして選んで正定を専らにすべし、正定の業は即ち是れ佛名を稱するなり、名を稱すれば必ず生を得、佛の本願に依るが故にと、又聖人の中心と云ふべき本願章に於ては、何故に如來は殊に餘行

を以て本願とせずして、念佛を以て本願とせるかてふ問題を提起して、如來平等の大悲は一切衆生を救濟せんが爲めに、多數の凡人を標準として、易くして勝れたる念佛を以て、本願とせるなりと解答せり。

従つて三輩章に曰く、

問うて曰く、三輩の文中には念佛の外に亦捨家棄欲、起立塔像、菩提心等の餘行あり、何が故に唯だ念佛往生といふか、答へて曰く、斯に三の意あり、一には諸行を廢して念佛に歸せしめんがために諸行を説くなり、二には念佛を助成せむがために諸行を説くなり、三には念佛と諸行との二門に約して、各三品を立てんがために諸行を説くなり、即ち廢立の義、助正の義、傍正の義なり、但し此等の三義趣最知り難し、請ふ諸の學者取捨心にあるべし、今若し善導に依らば初を以て正となすのみ。

法然聖人は源信の個人的なりしに反し、其心機の展開と共に、黒谷を出で、吉水に下り、聖道の外に淨土の教義あるを示し、専一なる稱名三昧の行儀を取り、一宗として盛に淨土教を鼓吹せしのみならず、寧ろ他の佛教を廢して、念佛教のみ立てんとせり。

第九段 絕對他力教

親鸞聖人は淨土宗の總依三經別依觀經と其趣を異にして、總依三經別依大經を宗とし、本願爲宗名號爲體と定め、聖道門の釋迦は獨立の獨迦なりと雖も、大無量壽經を説ける釋迦は彌陀の代理者にして、釋迦出世の本懷は結局彌陀の本願を説かんと爲るに在り、左れば聖道諸經は畢竟淨土門の方便たるに過ぎずと爲せり、教行信證の化卷に云く

凡そ一代の教に就ては、此の界中に於て人聖俱果するを聖道門と名け、難行道と云ふ、此の門中に就ては、大小漸頓一乘二乘三乘權實顯密堅出堅超あり、即ち是れ自力利他教化地方便權門之道路なり、安養淨刹に於て入聖證果するを淨土門と名け、易行道と云ふ、此の門中に就ては、横出横超假眞漸頓助正雜行雜修專修あり。

又同書行卷に云く、

大乘には二乘三乘あり、二乘三乘は一乘に入る、一乘とは即ち第一義乘、唯是れ誓願一佛乘なり。

又大無量壽經の至心、信樂、欲生我國の三信と、觀無量壽經の至誠心、深心、回向發願心の三信を三足一心にして、只彌陀に歸命する一念に外ならずと解し、淨土宗の念佛爲本より一轉して信心爲本となせり、左れば等しく、淨土教に在りても、念佛の功德に依りて淨

土に往生せんと希ふ者は、之れ他力中の自力にして、淨土門内の眞實宗に對しては假宗なりと爲し、一念歸命の時既に正定聚に入りたるものにして、稱名念佛は報恩行爲としては必要なるも、往生の因としては無用なり、又由來淨土門の教ゆる所は、淨土に往生して先づ正定の位に住し、漸次修行して後ち成佛の目的を達するに在りて、畢竟すれば此土と彼土と位置を代へたる迄にて、聖道門的の修行及び時間を要するものなり、然るに親鸞聖人は信心と同時に現在に於て正定聚の位に住し、往生即成佛と説けり、教行信證の信の卷に云く、

金剛眞心を獲得する者は、横に五趣八難道を超ゆれば必ず現生十種益を獲ん、何をか十と爲す、一は冥衆護持益、二は至德是足益、之は轉惡成善益、四は諸佛護念益、五は諸佛稱讚益、六は心光常護益、七は心多歡喜益、八は知恩報恩益、九は常行大悲益、十は入正定聚益なり。

眞知彌勒大士等覺金剛心を窮するが故に、龍華三會の曉は當に無上覺位を極むべし、念佛衆生、横超金剛心を窮るが故に、臨終一念の夕、大般涅槃を超證せり。

大願清淨報土は品位階次を云はず、一念須臾の頃、速疾に無上正眞を超證するが故

に横超と曰ふなり。

由來淨土教は十念又は念々相續、或は臨終正念彌陀來迎を主張するも、眞宗にては上述の理よりして臨終正念を要せず、彌陀來迎を必要なものとせり。

然るに稱名念佛を以て自力の臭味あるものとせば、一念歸命の信心其ものも亦自力に非ずやとの疑ひあり、眞宗は此の信心をも彌陀本願力の回向に依つて發得せるものなりと爲し、一切を本願力に歸納すると同時に、總ての雜行雜修を排斥せり、之れ絶對他力教たる所以にして、宗教としては醇にして要を得たるものと謂ふべし。

覺如は尙進んで一念往生を以て宗の淵源と爲すと云ひ、蓮如は更に雜行雜修自力の心を捨て、一心に彌陀を頼むべしと云ひ、又一念發起平常業成と云へり、之れ信する時既に攝取不捨の益に預かり、往生決定の身となり、信即證たるものなり、然り而して此の平常業成は唯一念の信のみに依り、唯願無行には非らざるも、困難なる修行も長久の時間をも要せずして、聖道門の即身成佛と同一意味の境界に到達せるものと云ふべし、茲に於てか、絶對自力と絶對他力と全く相接觸すると同時に、他力易行の効果始めて其絶對的價值を表現せるものと謂ふべきなり。

第五章 判教

第一段 判教の意義

同一佛教内に於て、一宗として獨立するには、必ずや教相判釋なるものなかるべからず、換言すれば教相判釋は一宗成立の必要條件なり、最大の要素なり、教相判釋即ち判教なきときは、自己の立脚地明瞭ならざると同時に、尨大雜博なる佛教、前後矛盾の論議多き佛教を一教として解釋し、調理すること能はざればなり、故に同一佛教内に於て一宗を開きし者は、必ずや判教論を造り居れり、否判教論ある爲めに、一宗として獨立することを得たるなり、左れば何れの宗派にても判教論を造れる者は、その宗の眞の開祖なりと云ふべく、事實亦然なり。

斯く一宗の上より見れば、教相判釋は其宗旨獨立の最大要素なり、必要條件なるも、若し之を單に其作者それ自身の方面より見る時は、錯雜廣大なる佛教の經論に對する整理なり、批評なり、組織なると同時に又自己の意見なり、主張たるなり、併し主張と雖ども單純の意見主張にあらずして、既に佛教を信するものなるゆへ、ものに於ける自己の

最高見地たり、立脚地たるなり、然るに前述の如く、佛教内には矛盾的の議論多く又甚だ危大なり、左れど自己の所見のみを獨り佛教として、他を非佛教として排斥すること、又は自己の所見に佛教なると否とに係らず眞正なりとまでに主張することは、教權的情勢の許さざる所なるを以て、何れも均しく佛說佛教と見做して、然る後その矛盾的の議論を調和して、被教者の機根に由つて之に階級を附し、權實、了未了等の分類を爲し、而して自己の所見所信即ち主張をその最高階、大眞實の地位に置くものなり。

判教論とは後に附したる名稱にして、著者それ自身には單に佛教に對する所見なるべきも、其所見の性質既に斯くの如くなる上は、著者自らも佛教内に於ける新見地を占めたるものにして、従つて從來の他の宗旨に同する能はざるものなり、況んや之を信する未徒に至つては、遂に全く他の宗派と溝渠を穿ち、互に對立抗爭するに至るは、蓋し勢の止むを得ざる所なり。

凡そ判教には二種あり、一は各宗共に之を認知する所、即ち所謂大小聖淨の分別の如し、尤も大小の區別は小乗家の許さざる所なるべく、又顯密の如き教禪の如きは、密家及禪家の勝手に下せし批判なりとするも、此等は概して各宗及佛教以外のものと雖も、大抵認知して分類上に於ける自然の慣例となれるものなれば、此等を一括して通判教論とすべきなり、又一は各宗一家の所執にして、他家の容易に許さざる所、即ち天台の四教眞言の十住の如き、各宗各自の特別判教論之なりとす。

次に判教論は一宗成立の要素たると同時に、對外性と對自性との兩面的權能を有し、而して又其對外性には攻守兩用を具するものとす、即ち判教論は其對外的防禦面に於ては、恰かも城廓の如きものにして、一方には嚴然たる自家の大本營を表明し、他方には敵をして一步も之に近付かしめざる威嚴を公示するものなり、左れば所依の經論は主將にして、判教論は城廓たり、衛兵たる關係を有し、自他領域の分別を明瞭ならしめ、以て敵の侵害に對し、極力之を防止する有力の機關なり、要するに判教論の對外性は、頗る峻烈なるものにして、其良否は一宗の勝敗に關すると同時に、又此の對外性なくんば縱令判教論ありと雖も、一佛教内に幾多の宗派分立する能はざるべきなり。

更に又判教論の對自性は極めて明瞭にして、第一同一佛教内に於ける自宗の位置を定め、學習者及信徒に對し之を公示し明知せしむるもの、第二他宗との關係連絡を説き、以て同一佛教内に宗派分立の意義を明らかにして、兄弟牆に闕ぐの疑を氷解せしむる

もの、第三は學習者が向上の階級を示すもの、禪家の五位四料簡の如き、眞言の十住心の如き、天台の六即の如き、此等は明らかに修業者の位階を分別せしものなれども、他に對する時は直ちに執て以て判教論と爲し、自家を其最高位に配し、他を順次其下位に列することゝ爲すべきものなり。

第二段 七祖の判教

龍樹は其著十住毘婆娑論易行品に於て、佛教を易行道難行道に分ち、淨土往生を以て成佛の易道と爲し、西方彌陀の淨土に往生すべく、稱名念佛を勧めたり。

易行品に云く、佛法有無量門、如世間道有難有易、陸路步行則苦、水道乘船則樂等。

又云く、阿彌陀佛本願如是、若人念我稱名、自歸即入、必定得阿耨多羅三藐菩提、是故常應憶念。

又云く、若人疾欲至不退轉地者、應以恭敬心執持稱名號。

以上を難行易行の判釋とす。

天親は其著淨土論に於て、一心に無碍光如來に歸命して、安樂國に往生することを勧め、淨土往生を以て成佛の至道と爲せり。

淨土論に曰く、世尊我一心歸命、盡十方無碍光如來、願生安樂國。

又曰く、如是菩薩智慧心方便、心無障、心勝真、心能生清淨佛國土、乃至速得成就阿耨多

羅三藐三菩提、故……云以、大慈悲觀察一切苦惱衆生、示應現身、乃至以本願力廻向

又曰く、觀佛本願力、遇無空過者、能令速滿足功德大寶。

以上を一心歸命、遇無空過の判釋とす。

曇鸞は其著論註に於て、自力他力の二法を示し、他力教の優勝なることを示せり。

註の始に龍樹の二道を擧げ、自力他力を以て之を判じ、利行滿足章に至りて三願を引て、速得菩提の義を證し、竟て云く、以斯而推他力爲增上緣、得不然乎、當復引例示自力他力相、乃至遇哉、後學者聞他力可乘、常生信心、勿自局分也。

易行品及び淨土論には、本願力なる語はありしも、他力なる語なし、本願力を他力と鮮明せしは曇鸞の功なり、之れ親鸞聖人をして他力廻向の教義を大成せしむる根據たり、以上を自力他力の判釋とす。

道綽は其著安樂集に於て、聖道淨土の二門を區別し、末法時代には淨土門を以て唯一の成佛道と爲せり。

安樂集に云く、答曰依大乘聖教良由不得二種勝法以排生死乃至其聖道一種今時難證一由去大聖遙遠二由理深解微是故大集自然經云我末法時中憶億衆生起行修道未有_レ一人得者當今未法現是五濁惡世唯有淨土一門可_レ通入路

善導は其著觀經疏に於て正雜二行を分ち淨土往生の正業を五種と定め、其中稱名を特に重要なものと爲し、聖道門の修行は固より、觀經の三福の如きも雜修とし、是等は總て方便の假門なれば、淨土往生には迂回の行と爲し、専ら正業を勤むべきことを論せり。

觀經疏に云く、上來雖說定散兩門之益、望佛願竟在衆生一向專稱彌陀佛名

又云く、言正行者專依往生經行者是名正行乃至除此正助二行已外自餘諸善惡名雜行

又同師著法事讚に云く、故便如來選要法教念彌陀專復專

又同著禮讚に云く、修雜不至心者千中無一

以上を正雜廢立の判釋と云ふ。

源信は其著往生要集に於て、極樂往生の教行を以て濁世末代の目足と爲し、淨土門は入り易く行ひ易く、聖道門の及び難きを論じ、又淨土往生を爲すには、念佛專修の得を示

し、雜修の失を具體的に説述せり。

往生要集に曰く、夫往生極樂之教行濁世末代目足也、道俗貴賤誰不歸者、但顯密教法

其文非一事理業、因其行惟多利智精進之人未爲難如、予頑魯之者豈敢矣、是故依念佛一門聊集經論要文、披之修之、易覺易行

又云く、若能如上念々相續畢命爲期者、十即十生、百即百生、若欲捨專修雜業者、百時希得一二……是知雜修之者爲執心不牢之人、故生懈慢國也、若不雜修專修此業、此即熱心不牢、定生極樂國、乃至又報淨土生者、極少化淨土中生不少、故經別說實不相違也、之を要するに、專修雜修の得失に對して、往生に報土と化土とを分ち、專修念佛の者は必ず眞實報土に往生すること千無一失なきも、雜修の者は懈慢界なる化土に往生し、眞實報土には萬不一生と云ふにあり、之れ淨土教内に眞假の分るゝ有力なる説なりとす。以上を專雜得失の判釋と云ふ。

法然は其著選擇本願集に於て、彌陀の本願たる稱名念佛を以て唯一の往生成佛道となし、捨聖歸淨捨雜歸正を以て一宗の教判と爲し、南無阿彌陀佛の六字を體と爲し、稱名念佛を主張せり、之を選擇稱名の判釋とす。

更に選擇集に於ける判教の大綱を述べんに、

同書に、鸞綽二師に依りて二種の教相を擧示せり、若し曇鸞に依れば一には難行道二には易行道なり、謂く五濁の世無佛の時に於て、不退を求むるを難行道と名く、譬へば陸路の歩行は則ち苦しきが如し、又信佛の因縁を以て淨土に生せんと願するを易行道と名く、譬へば水路の乗船は則ち樂しきが如し、之れを難易二道の教相と云ふなり。

若し道綽に依れば一には聖道門二には淨土門なり、謂く大乘小乘を問はず、此の娑婆世界に在りて斷感證理入聖得果するを聖道門と名く、故に先づ見惑を斷じて三途の因を離れ三途の果を滅し、後に修惑を斷じて人天の因を離れ人天の果を絶ち、或は四諦十六行相の觀を修し、十二因縁無常の觀を修し、三生六十劫四生百劫を経て、方に二乗の涅槃を證し、或は三祇百大劫を滿じ、菩薩の六度萬行を成就して、佛果無上菩提の極位を證得す、然るに往生淨土の法門は未だ無明煩惱を斷盡せずと雖も、彌陀の大願業力に依りて彼の極樂世界に生ずれば、則ち三界を超出して永く生死を離るゝなり、之れを聖淨二門の教相と爲す。

此の中に於て聖淨二門は、證の難易に約して聖道は今時難證なるが故に之を捨て、淨土は今時尚ほ證し易きが故に取りて之を行するなり、之れを約證教相と云ふ、難易二道は行の難易に約して難行道を捨て、易行道に従ふなり、之を約行教相といふ、聖道淨土と難行易行と其の言は異なると雖も、其の意は是れ同じ、故に難行と聖道とは同じく自力にして、易行と淨土とは俱に他力なり。

夫れ自力他力の分別は、偏へに其強弱輕重に約するものにして、實には聖淨二門互に自他二力を存せり、謂く聖道門は行者の戒定慧三學を以て自力とし、佛の加被護念を以て他力とすべし、然れども自の三學力を成就せんが爲めに佛の加被力を請ふが故に、自力は強く他力は弱し、是れに由りて其の強き者に就て偏へに自力と云ひ、淨土門は行者の心行業を以て自力とし、如來の願業力を以て他力とす、故に安樂集に此處に在りて心を起し行を立て淨土に生せんと願す、之れは是れ自力なり、命終の時に臨んで、阿彌陀如來光明を以て迎接して、遂に往生を得るを即ち他力と爲すと云へり、然るに彌陀の願力に相應せんが爲めに心行業を修するが故に、他力は最も重く自力は甚だ輕し、其重き邊に就て偏へに他力と云ふなり。

第三段 二雙四重

眞宗の教判は親鸞聖人著作の教行信證及び愚禿鈔に依りて爲れり、其大要は内外相對、大小相對、聖淨相對、眞假相對の四重の廢立を明らかにするに在り、内外相對は佛教各宗共通の所談にして、又大小相對説は大乗佛教の等しく唱ふる所なり、聖淨相對に就ては前七祖の判釋に現はれたる所なるが、教行信證の卷末に、竊以聖道諸教行證久廢、淨土眞宗證道今盛なりとあり、淨土和讃にも同意味を述べ、時代を以て聖淨の廢立を行はんと爲るにあり、又眞假相對は聖道門中に、權實あるは固よりなるも、眞假判釋の眞意は、淨土教中に於て頓漸を分たんとするものにして、之を眞宗判教の特徴とす。

愚禿鈔に云く、就聖道淨土教有二教、一、大乗教、二、小乗教

就大乗教有二教、一、頓教、二、漸教

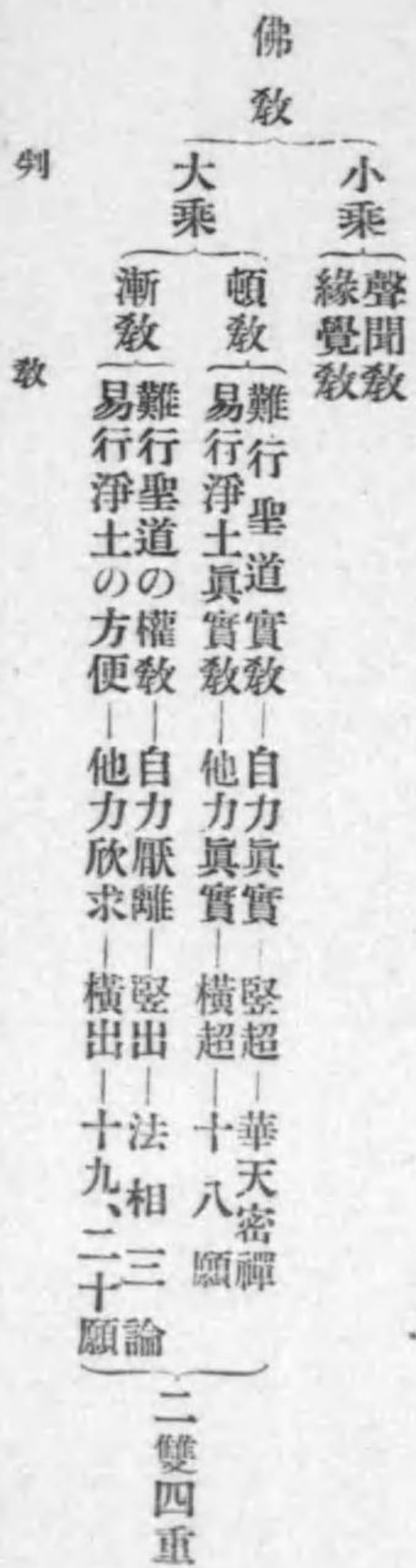
就頓教復有二教、二、超、二、難行道聖道之實教、所謂佛心眞言法華華嚴教之也、二、易行淨土本願眞實之教、大無量壽經等也、二、超者一、豎超、即身是佛、即身成佛等之證果也、二、橫超、選擇本願眞實報土即得往生也。

就漸教復有二教、二、出、二、難行道聖道權教法等歷劫修行之教也、二、易行道淨土要

門、無量壽佛觀經之意定散三福九品之教也、二、出者、一、豎出、聖道歷劫修行之證也、二、橫出、淨土胎宮邊地懈慢之往生也。

就小乗教有二教、一、緣覺教、一、麟喻獨覺、二、部行獨覺、二、聲聞教、初果、預流曰、第二果、一來向、第三果、不還向、第四果、阿羅漢向、八輩也。

以上の所説中に就て、淨土門の中に於ける二教は、前の源信の判釋と其意を同うし、純他力信心を以て眞實報土に往主するものは、頓教にして是れ眞實教なり、又自力疑心の罪により、化土に往生して後ち眞實報土に往くが如きは漸教にして又權教なりと爲すに在り、斯く淨土門内に二教を分ち、之に聖道門の二教を加ふれば、即ち二雙四重と爲る、又豎は自力を意味し、之に難易の義を含み、兩々相對して難易の廢立を表せり、今之を圖表すれば左の如し。



猶真宗にては前意を推敲して、絶對門の判釋と云ふことあり、蓋し淨土真宗の法門は、第十八願を弘宣するにありて此の第十八願の法は、一乘無上頓極頓速圓融圓滿絶對不二之教として、所對の機類に於ては空間的に如何なるものも洩らすことなく、時間的に三世を盡して如何なる時にも應用せずと云ふことなく、然も之を受くるに自力の功勞を費やすことなくして、其の結果は絶對界に到達して無量無邊の智慧を具足す、實に易くして且つ勝れ、又速かに満足することを得るは、此の第十八願念佛の法の外にあらず、故に此の第十八願を除いて、自餘の一切の教法は、皆是れ淨土方便の善にして、曾て頓教を許したる華天密禪の法も、此の絶對門に至りては皆漸教となり、了て淨土門中の方便教と爲るなり、之を親鸞聖人は萬行諸善是れ假門、聖道は是れ權假方便なりと云へり。

第四段 四法建立

真宗にては教行信證と云へる名目を立て、一宗の規模と爲せり、親鸞聖人の教行信證文類の初に曰く、謹按淨土真宗有二種回向、一往相二還相、就往相回向、有真實教行信證と云ふ是なり、其教とは真實の教即ち大無量壽經なり、真宗には三經を以て正依とすと雖も、觀經小經の如きは隱顯の義ありて、顯說に依る時は猶方便を帶するが故に、殊に大

無量壽經を以て真實の經とす、此の經は釋尊出世の本懷として、彌陀成佛の因果と衆生往生の因果とを詳述せり、即ち如來の本願を説くを以て經の宗致とし、佛の名號を以て經の體とすと云へり、行とは即ち上の教に説く所の本願名號を云なり、此の名號は諸の善法を攝し、諸の徳本を具し、十方衆生の往生の行體となるものなるが故に、大行と名く、即ち南無阿彌陀佛は是れなり、信とは上に擧ぐる大行即ち本願名號を聞きて、疑なく信受受樂する信心なり、證とは上に示す所の信心の正因に依て得る所の證果にして、即ち無上涅槃の極果なり。

教行證の三法を立て、修證の因果を示すことは諸宗通途の所談なり、然るに真宗は殊に教行信證として、特に信の一法を開く所以は、行は所行の法にして、信は能信の機なり、即ち設ひ名號を稱すとも、信如實ならざれば證を得ず、故に念佛往生の正意は、偏へに金剛の眞信にありと爲し、涅槃之城以信爲能入の骨髓を相承して、真宗別途の法門と稱せるなり。

淨土門内の他流が念佛乃至讀誦禮拜等の諸行を修するは、固より往生極樂の爲めに、して淨土には既に九品の差別あり、一善たりとも多く之を積み、一行たりとも多く之を

修すれば、上品の往生を得といひ、又平生に之を修して止まず、多念相續すれば、臨終の時必ず佛菩薩の來迎あるべく、其の時方に往生決定するが故に、臨終正念最も肝要なりと云ふにあり、然るに真宗にありては、是の如きを名づけて自力信と稱して之を斥け、念佛は實に彌陀選擇本願の行にして、吾人往生の正業たるに相違なし、されど之を稱ふる力に由て往生定まるにあらず、念佛は吾等が往生の正業なりと信する時、已に佛の方よりして往生を定めたまへる也、故に真宗にありては、強ちに臨終正念にして來迎を期することを要せず、來迎は諸行往生の人にあり、眞實信心の人は攝取不捨の故に來迎をまつことなし、之を一念發起平生業成と名づく。

一念發起平生業成とは、蓮如上人が教行信證の精髓を觀破して名けし所にして、由來一般佛教にては普通に信行證の順序と爲し、發心修行の語、又十信十住十行十回向の階級あり、何れも皆信に由て行を起し、行に由て證を得るの順序を示し、淨土宗にありても、三心の信心を先きとし、十念の行を後と爲し、往生の定まるは信の時にあらずして、信に由て起る所の多念の行にありとせり、然るに真宗は念佛往生と云ふと雖も、吾が念佛を稱ふる力に由て往生を得るの意にあらず、稱ふる者を助けんといふ佛の願力に由て往

生は定まるなり、而して其の往生の定まる時刻を問へば、此の謂れを信する一念にあり、換言すれば臨終の來迎を俟たずして、信する時已に彌陀の光明に攝取せられ、往生決定の身となるなりとして、信より直ちに證に移るなり。

然らば信後の稱名は不必要なりやといふに、自身の往生の爲めとしては不必要に似たれども、報恩の大功としては大に必要なり、啼に稱名念佛のみならず、あらゆる善事皆悉く亦然り、世俗一般の道德も亦彌陀大悲の恩德に報いんとする意にて之を勵むべしと云ふにあり。

第五段 三種の四法

前に述べたる教行信證の四法に、要門、眞門、弘願の三種類あり、従つて之に三願、三經、三機、三往生、三土を配當して、淨土教内に於ける眞假の分別を、層一層明瞭に對釋せり、蓋し彌陀の本願に隨他意と隨自意とありて、第十八願は隨自意の本願、第十九願第二十願は隨他意方便の願なり、是れ衆生の中第十八願の如き眞實の他力信心を得る能はずして、自力の心を有し多念の念佛を勵み、其功德に依りて往生せんと願ふ自力念佛者あり、是等を救濟せん爲めに、第二十の願を起し、又稱名念佛に限らず、幾多の萬善諸行を修し、其

功力を以て淨土に往生せんとする、自力雜行の者あり、是等に對しては第十九の願を起せり。

彌陀の本願既に三種の別あり、從つて三部經も亦各、其本領を異にする點あるは、既に述べたるが如く、由來三經は隱顯の二義ありて、其隠れたる秘義より云へば、三經共に十八願を説くことに歸着すれども、其顯はれたる側より見れば、無量壽經は正しく第十八願の開説にして、觀經は第十九願、小經は第二十願の開説なりとして、親鸞聖人は此の三經を以て彌陀の三願に配當せり。

本願既に三種の別あり、經説亦三種の不同ありとすれば、之を信じ行ふものも、勢ひ三種なかるべからざると同時に、其果報も亦等差あるべきは自然の數なりとす、茲に於てか、眞宗にては第十八願純他力のものを、正定聚の機と爲し、第十九願自力雜行のものを、邪定聚の機と爲し、第二十願自力念佛のものを、不定聚の機と爲し、更に又善導の法事讚に依り、難思議往生、雙樹林下往生、難思議往生の三往生を前の三願三經三機に配し、尙ほ進んで往生の土に就て、眞實報土と懈慢邊地と疑城胎宮との三別を配當せり、今之を左に表せんに、

三種の四法

- 弘願眞實四法……教大・行彌陀・信樂・證報土……淨土眞宗
- 要門方便四法……教歎・行諸善・信願・證懈慢……淨土假宗
- 眞門方便四法……教小・行稱名・信回・證疑城……淨土假宗
- (三門) (三願) (三經) (三機) (三往生) (三七)
- 弘願・第十八願・大經・正定聚機・難思議往生・報土……淨土眞宗
- 要門・第十九願・觀經・邪正聚機・雙樹林下往生・懈慢定……化土・淨土假宗
- 眞門・第二十願・小經・不定聚機・難思議往生・疑城

第六段 時機及宗風

佛教にては密教及禪宗以外の諸宗は、多く正像末の三時を重要視し、特に淨土門及日蓮宗は、此の三時を以て宗旨評價の必要條件と爲せり、三時の出所は大集經、月藏經等にあり、正法五百歳又は千歳、像法千年、末法萬年、或は五々の五百歳と稱し、正法時代には聖道門盛にして、教行證具足するも、像法時代には教行あるも證なく、末法には教のみにして行證共になしと云へり、殊に聖道門の發菩提心の如き、又戒行修行の如きは、到底底下

凡愚の企及する所にあらず、然るに淨土他力教は、如何なる愚者と雖も、之を行ひ得るのみならず、彌陀の本願は特に愚痴罪惡の者を救濟するにあれば、末法時代には淨土門に依るの外、成佛の道あることなし、又淨土門は正像末の三時に通じて、普く行はると雖も、正像の二時には聖道門盛なる爲め、淨土門は其影に隠れ居りしが、末法には聖道門廢頽の爲め、淨土門獨り行はると爲すは、淨土他力教に於ける時機論の概要なりとす。

以上の意味は安樂集に之を悉せるが、親鸞聖人は更に正像末和讃を作りて、益々其主旨を發揮せり。

末法五濁の有情の 行證かなはぬときなれば

釋迦の遺法ことくく 龍宮にいたりたまひにき

(正像末和讃)以下皆同じ

安樂集に云く、我末法時中億億衆生起行修道未有一人得者當今末法現是五濁惡世……末法一萬年衆生滅盡諸經悉滅

正像末の三時には 彌陀の本願ひろまれり 像季末法のこの世には 諸

善龍宮にいたりたまふ

安樂集に云く、月藏經を引て曰佛滅度後第一五百年我諸弟子學惠得堅固第二五百年學定得堅固第三五百年學多聞讀誦得堅固第四五百年造立塔寺修福懺悔得堅固第五五百年白法隱滯多有諍訟微有善法得堅固

末法第五の五百年 この世の一切有情の 如來の悲願を信せずば 出離
その期はなかるべし

安樂集に云く、我末法時中億億衆生起行修道未有一人得者當今末法現是五濁惡世唯有淨土一門可通入路是故大經云若有衆生縱令一生造惡臨命終時十念相續稱我名字若不生者不取正覺

正法の時機とおもへども 底下の凡愚となれる身は 清淨眞實のこゝろなし 發菩提心いかせん

安樂集に云く、然修道之身相續不絕逕一萬劫初證不退位當今凡夫現名信相輕毛亦曰假名亦名不定聚亦名外凡夫未出火宅

像末五濁の世となりて 釋迦の遺教かくれしむ 彌陀の悲願ひろまりて
念佛往生さかりなり

安樂集に云く、又若去聖近即前者修定修惠是其正學後者是兼乃至能假遇苦緣諮開出路豁然大聖加慈勸歸極樂。

像法のときの智人も 自力の諸教をさしおきて 時機相應の法なれば

念佛門にぞいたりたまふ 五濁惡世の有情の 選擇本願信すれば 不可稱

不可説不可思議の 功德は行者の身にみても

大經に云く、佛語彌勤其有得聞彼佛名號歡喜踊躍乃至一念當知此人爲得大利則是具足無上功德。

釋迦の教法ましませと 修すべき有情のなきゆへに さとりうるもの末法

に 一人もあらしときたまふ

安樂集に云く、大集經を引て云我末法中億々衆生起行修道未有一人得者。

上述の如く淨土門特に眞宗は、末法に於ける時機相應の教法なりとす、又惡人正機と稱し、或は往生成佛は自力雜修を嫌ふといふ根本義よりして、聖道門に用ゆる戒律等は、眞宗に於ては自然に其必要を認めざるに至り、肉食妻帶の如きも當然の結果と云ふべく、又信心即往生なれば、信後の所行は悉く報恩行爲にして、王法爲本の如き俗諦門も、其

實は宗教生活の半面なり、左れば眞宗は、小乘戒は素より大乘戒も決して之を持たずして、通佛教より觀るときは無戒なりと雖も、審らかに其意を察すれば、人生社會を悉く宗教生活化せしめんとする絶對戒を主張するものにして、彼の王法爲本等を速諒して、單に世俗の法に媚るものと爲すが如きは、早計にして皮相の見たるを免れず、是れ亦眞宗の他宗に異なる一標準なりとす。

第六章 佛 陀

第一段 南無阿彌陀佛の字義

南條博士は南無阿彌陀佛の語原に就て、左の如く説述せられたり、茲は現時に於ては既に學者の諒知する所なるも、佛陀論前後の關係上其要綱を掲ぐ。

南無阿彌陀佛は南無と阿彌陀と佛との三つの梵語の音を寫したものである、即ち

南無は「ナモ」と云ふ梵音を寫した文字にして、阿彌陀は具には阿彌陀引庚灑引「アミターユシエー」又は彌陀引婆引耶「アミターブハーヤ」にして、其初めの處だけを音譯して其下を略したのである、佛は具には佛陀引耶「ブツドハーヤ」にして、此れも其

下を略したのである、南無阿彌陀佛の語原を示さんとすれば、右の如く三語に分ち、其第二の語は兩様共に六合釋では持業釋に屬して、形容詞と名詞との組み合わせ語を、そのまゝ全分他名の有財釋として南無と敬禮し歸命する時は、八轉聲の第四轉爲聲、即ち與格の語尾を附け加へて用ふるが故に前記の如くになる、第三語の佛は佛陀引耶の略と云ふも同格である、それで次第の如く四項に分ちて、第一に南無引、第二に阿彌陀引、第三に阿彌陀引、第四に佛陀引耶として、其語原と語縁、語基と語尾のことを説明すれば左の如くである。

第一 南無引「ナモ」

此語の語原は「ナム」である、「ナム」は「禮スル」と云ふ意義の語原で、それに「アス」と云ふ語縁を加へて、「ナムアス」を一連に發音すれば、「ナマス」となる、此の「ナマス」は「敬禮」とも「歸命」とも「歸敬」とも「救我」とも「度我」とも義譯して中性名詞である、此「ナマス」を語基として、八轉聲の第三轉具聲以下には語尾を用ゐることなれども、第一轉體聲と第二轉業聲と第八轉呼聲との一言聲、即ち主客と賓格又は目的格と呼格との單數の形は語尾を用ゐるので語基と同一である、それで今は主格なるが故に「歸命ハ」と譯すべ

きである、併し次に來る語の首音が強音なれば、「ナマス」が「ナマブ」となるも、次語の首音が弱音の時は、「ナマス」は「ナモ」となる、それと同時に次語の首音が「ア」の音である時は、其「ア」を發音せずに、「ナモ」から直接に次語の次の綴りに移行行くことは、梵語の連聲法の常則である、連聲法とは音使法のこと、此の法は梵語では最も詳細である、此の事は次の第二第三の二語の下に於て、更に説明するであらう。

第二 阿彌陀引「アミターユシエ」

此の語は阿彌陀「アミダ」と阿引「アス」との形容詞と名詞とを組み合せた語基に「エ」と云ふ語尾を加へたので、「無量壽二」とか、「無量壽二マデ」とか譯すべきである、それで前に言ふ如く、「ナモ」の次では、連聲法に由りて、「ナモミターユシエ」と一連に發音して、「ア」を云はぬのである、併し此れは唯音便法に由るので、意義の上には固より「ア」は「無」と譯することを忘れてはならぬ、そこで先づ阿彌陀の「ア」は前加小詞で、「無」とか「非」とか「不」とか譯して剝奪を示す辭である、次に「ミタ」は「量ル」と譯する語原の「マ」の母音「ア」を取り去りて、音便の爲めに、「イ」を挿入して、「ムイ」を一連に發音して、「ミ」とし、それに語縁「タ」を加へて、「量ラレタル」と譯すべき過去受動分詞で、それ

をそのままに「有量」譯すべき形容詞とするのである、それへ前の「ア」を加へて「無量」ノと譯すべき形容詞が「アマタ」である、次の阿引庚斯「アーユス」は「行ク」と譯すべき語原「イ」を、三重母音の「アーイ」に増變して、再び其最後を半母音に變じて「アーユ」とし、「ウス」と云ふ語縁を加へて「壽命」と義譯する中性名詞である、因りて「アマターユス」を單に「無量壽」と譯して、佛名の外に用ゐる時は、持業得名の中性名詞であるが、それを所有を擧げて能有の名として「無量壽」を有する者即ち「無量壽」と譯して佛名とする時は有財得名の男性名詞である、此れが謂はゆる全分他名の有財釋である、それで阿彌陀引庚斯「アマターユス」を語基として、一言聲二言聲即ち單數兩數多數に、各八轉聲即ち八格の語尾を附加して、三八二十四の變化を生するのであるが、余は前に云ふが如く、一言聲第四轉爲聲即ち單數與格の語尾「エー」を加ふるに當り、亦連聲法に由りて語基の終りの「ス」が「シユ」となりて「エー」と一連に發音するが故に、「アマターユセー」とはならずして「アマターユシエー」となるのである、尙此「ウス」に終る語の一言聲の體聲と呼聲とは語尾を用ゐざるが故に語基と同一である。

第三 阿彌陀引婆引耶「アマターブハーヤ」

此の語は阿彌陀「アマタ」と阿引婆「アーブハ」の形容詞と名詞を組み合せた語基に、阿耶「アヤ」と云ふ語尾を加へたので、無量光「ニマデ」とか譯すべきことと「ナモミターブハーヤ」と發音することゝは、第二語に準じて知れ、又「アマダ」は第二語の前半と同一なれば、此れ亦分解の要なし、それで阿引婆「アーブハ」を分解すれば、「始メテ」とか「至ルマデ」とか「近ク」とか譯する前置詞「アー」を、「照ス」と譯する意義の語原「ブハー」に冠して「アーブハー」と云ふ合成語原は、「ニマデ照ス」と譯するので、其まゝの形を「光」と譯する女性名詞とする、それ故單に「無量光」と譯して佛名でない時は、「アマターブハー」で持業得名の女性名詞なるも、之を「無量光ヲ有スル者」の意義にて「無量光」と譯する佛名の時は、有財得名にして、語基の終りの母音を短くして「アマターブハ」と云ふ男性名詞の語基に、單數與格の語尾「アヤ」を附加して、之を一連に發音するが故に「アマターブハーヤ」となるのである。

第四 佛陀引耶「ブツドハーヤ」

此語の語原は「ブツド」で「覺メル」とも「知ル」とも譯する、それに過去受動分詞の語縁「タ」を加ふるに當りて「ブツド」は「ブツ」となり、「タ」は「ドハ」となるのを、一連に發音するが故

に「ブドドハ即ち「ブツドハ」となる、其音を寫したるが佛陀の二字である、此語の「覺マサレタル」とか「知ラレタル」とか譯すべき過去受動分詞なるを、其まゝ「男性名詞」として「覺者」と譯して、其語基に前の第三語と同一の單數與格の語尾「阿耶」「アヤ」を附加して、亦之を一連に發音するが故に「佛陀阿耶」は「佛陀引耶」となりて、「覺者ニ」とか「覺者ニマデ」とか譯するのである。

結論

右の如き成り立ちの語なれば、南無阿彌陀佛の語原は五個ありと知るべし、即ち「ナム」と「マー」と「イ」と「ブハー」又は「アープハー」と「ブドフ」とである、併し南無阿彌陀佛の語原とは、南無阿彌陀佛の原語のことであつたのならば、煩はしく語原と語縁、又は語基と語尾の區別を云ふことを止めて、單に梵語の文法に由りて具に稱へ出す時は二様ありと云へば足れり、即ち

- 一には
 - 南無引 阿彌陀引 佛陀引耶
 - ナモ アミターユシエー ブツドハーヤ

歸命ハ 無量壽ニ

覺者ニ

二には

- 南無引 阿彌陀引 佛陀引耶
- ナモ アミターブハーヤ ブツドハーヤ
- 歸命ハ 無量光ニ
- 覺者ニ

慧琳音義第十六に云く、阿彌陀とは佛の名なり、唐には無量光と云ふなり、觀經玄義分に云く、無量壽と言ふは乃ち是れ此地の漢音、南無阿彌陀佛と言ふは又是れ西國の正音、又南とは是れ歸なり、無とは是れ命なり、阿とは是れ無なり、彌とは是れ量なり、陀とは是れ壽なり、佛とは是れ覺なり、故に歸命無量壽覺と云ふ、觀經疏に云く、阿彌陀佛此に無量覺者と云ふ、無量壽を以て三佛に通ず、何となれば、法佛は彼此邊量して度るべきに非ず、故に強いて無量と名く、修成の佛尊は量虚空に同じ、故に無量壽と云ふ、應佛の無量とは若し通論門には、衆生無盡なれば垂迹何んぞ盡きん、大經の十三願に云ふが如し、云何んが慈悲を捨て、永く涅槃に入らんと、別して彌陀を論せば廣大の願土壽長遠を造る、二乘凡夫は測量すること能はず、故に無量と云ふ、

能化所化、依正兩果、俱に是れ無極、但佛壽を取るは勝境を表する者なり、亦云ふべし、彼衆生に類するに猶是れ極まりなし、苦を厭ふの徒をして往生を欣樂せしめんと欲す、壽とは命の異名、色心不斷なり、慧苑音義下に云く、阿彌陀と云ふ、此に無量壽と云ふ。

又天台法華にては阿彌陀の三字を空假中の三諦に配して説明し、密部の經論には阿字とは十方三世佛、彌字とは一切諸菩薩、陀字とは八萬の聖教と説けり、或は又阿は法身、彌は應身、陀は報身として、三字を三佛身に配釋することあり、又興教大師の阿彌陀秘訣には左の如く云へり。

次に字相字義を釋せば、阿字は一心平等本初不生の義、彌字は一心平等無我大我の義、陀字は一心諸法如々寂靜の義なり、又阿字は佛部の義、理智不二一心法界の體性を示すが故に、彌字は蓮華部の義、妙觀察智の生法二空の實相は本より來た六塵に染せざること蓮華の如くなるが故に、陀字は金剛部の義なり、如來の妙智自性堅固にして能く一切妄想の怨敵を破するが故に、又阿字は空の義、一心の法體は本より虚妄の相空無なるが故に、彌字は假有の義、一心平等の諸法は如幻假有なるが故に、

陀字は中道の義なり、一心平等の諸法は二邊を離れて定相として得べきこと無きが故に、又阿字は有の義、一心の體相は本有不生にして滅盡なきが故に、彌字は空の義、一心の諸法は自性不可得なるが故に、陀字は不空の義、一心の諸法は本より來た法身の功德にして斷絶なきが故に、又阿字は因の義、佛界と衆生とは一心の覺に因り一心の迷に因るが故に、彌字は行の義、人法二我を斷じて生法二空を證し佛果に至る故に、陀字は果の義なり、不二一心の如々理智を示す、是れ則ち佛果なるが故に、是の如くの差別の法門を即ち字相と名く、又是の如くの字相は互に定相無きこと帝網珠の取捨すべからざるが如し、一心平等にして不可得なるが故に、是を即ち字義と名く、是の故に字義を離れて字相無く、字相を離れて字義なし。

又眞言宗にて葬儀其他追善等の際に、必ず諷誦する眞言陀羅尼の阿彌陀佛讚をば、譯して甘露呪と云へり、之は阿彌陀といふ言葉を意譯せるものにして、阿彌陀即ち甘露、換言すれば眞淨の樂と云ふ意なり、又甘露王とも云へり、之は眞樂を與ゆる救濟者といふ意味なり。

更に又大日如來を中央と爲し、四佛を四方に配當するに當り、之を精神の向上發展に

準じ、比喩的に解説して左の如く云へり。

中央の大日如來は宇宙的に云へば、絶對的實在にして宇宙の大精神萬有の本源なり、又之を個人的に云へば、吾人の心體なり、良覺性なり、而して東方阿閼佛は善的立志にして、北方釋迦佛は實行の艱難を示し、南方開敷佛は花の開きたる、如く、苦行の結果たる成功にして、南方陽氣を示し、自度的の終極なり、又西方彌陀佛は自度より化他に轉じ、人間精神發展向上の終極に比せるものにして、大日向の極も、釋迦化導の利他的活動も等しく阿彌陀に歸着すべきものなりとす。

第二段 阿彌陀佛の因位

小乗部の所攝たる長阿含經及び増一阿含經には、過去七佛の説述あり、即ち釋尊の前に迦葉佛あり、迦葉佛の前に拘那含牟尼佛あり、拘那含佛の前に拘樓孫佛あり、拘樓孫佛の前に毗舍婆佛あり、毗舍婆佛の前に尸棄佛あり、尸棄佛の前に毗婆尸佛ありと云へり、而して此の七佛は釋尊の説くべきものにして、次に成佛すべき彌勒佛は尸棄已後の七佛を説き、其次の師子應佛は毗舍羅婆佛已後の七佛を説き、其次の承柔順佛は拘樓孫佛已後の七佛を説き、其次の光焰佛は拘那含牟尼佛已後の七佛を説き、其次の無垢佛は迦

葉佛已後の七佛を説き、其次の寶光佛は釋迦文佛已後の七佛を説くべしとて、未來六佛の名を出せり。

更に又以上の經説に従へば、過去に恒沙の諸佛ありて既に滅度を取り、將來恒沙の諸佛ありて此の世界に出現すべしと傳へられたり、之れ時間的多佛の存在を明らかにせるものなり、而して其過去七佛に關する傳説は、悉く釋尊の一生を模型として説述せられたり。

又増一阿含經には、東方七恒沙の佛土を過ぎて、奇光如來の出現せるを説けり、之れ同時多佛即ち空間的多佛存在説なりとす。

更に大乘の諸經に至つては、智炬陀羅尼經、觀佛三昧海經、金光明最勝王經等の四方四佛、寶網經の六方六佛、阿彌陀經、佛名經の六方三十八佛、法華經の八方十一佛、觀虛空藏菩薩經、長者經、觀佛三昧經等の十方十佛等を主として、時間的にも空間的にも多佛並存説を示せり、之れ佛陀を以て人間の成覺せるものと爲す時は固より當然にして、釋尊のみ獨り佛に非ざるは言ふ迄もなき所なりとす。

斯の如く多數の佛陀及び其淨土中に於て、最も多く現はれたるは東方阿閼佛(不動明

王の妙樂世界にして、更に夫れよりも一層勝れたるは、西方阿彌陀佛の極樂世界なり、阿彌陀如來に關する説述は、既に述べたる如く、小乗部所攝の生經を始めとし、一切藏經中には二百十餘部の經典と四十餘部の論藏に記載せられ、而して其本生譚即ち因位の傳記は漢譯四十部の經典に記載せられ、其中同本異譯及全然同一の説話を除くも尙十五種の説話あり、然れども其多くは他を説かんが爲めに、説明の材料として引證的に述べられたるものにして、純然たる阿彌陀佛の本生譚は大無量壽經の法藏比丘の傳説に若くものなし、今其大要を示さん。

佛耄闍崛山に住し給ひける時、阿難に告げて言はく、久遠無量不可思議無央數劫の古に、錠光如來世に出興し給ひけり、その後多くの佛出で給ひ、無量の衆生を教化して、皆滅度を取り給ひぬ、かくて後に世自在王如來と名くる佛ありき、其の壽命四十二劫なり、時に一人の國王ありしが、佛の説法を聞きて無上菩提心を發し、其の國城を棄て、其の王位を捐て、沙門となりて法藏と號しけり、法藏比丘、世自在王如來の所に詣り、頌を以て佛徳を讚め、已りて白すらく、世尊よ、我は無上正覺の心を發せり、願くば我が爲に廣く教法を宣へ給へ、我、選擇攝取して清淨の佛土を莊嚴せんと欲す。

希はくば我をして速に正覺を成就し、諸の生死勤苦の本を抜かしめよと、世自在王佛法藏に告げ給はく、比丘よ、汝が攝取して修行せんと欲する莊嚴佛土の事は、當に汝自ら知るべきなりと、比丘白すらく、この義は弘深にして我が境界に非ざるなり、世尊よ、願はくば廣く諸佛如來の淨土の行を説き給へ、我如説に修行して所願を満たさんと欲すと、その時、世自在王如來は、比丘の志願の深廣なるを知らしめし、廣く二百一十億の諸佛刹土の天人の善惡、國土の巖妙を説き、其の心願に應じて悉く之を現じ與へ給へり、こゝに法藏比丘は、無上殊勝の願を發し、心寂靜にして著する所なく、五劫の間莊嚴佛土の清淨を思惟せり、かくて比丘は、二百一十億の諸佛の妙土を選択攝取し已りて、彼の佛の所に詣り、具さに其の建立したる誓願を陳述し給へり、説願終りし時、比丘は又頌を説きて重ねて誓ひぬ、この時地は六種に震動し、天より華ふり、自然の音樂聞こえ、空中に讚むる聲ありて言はく、必ず無上正覺を成就すべしと、これより後法藏比丘は、不可思議兆載永劫に於て菩薩無量の徳行を積植し、十劫の昔、西方こゝを去る十萬億刹の安樂と名くる世界に於て成佛し給へり。

又阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經に曰く、

阿彌陀佛は西方安樂世界に出現し給へり、其世界には月上と名くる轉輪王ありて、其領土を清泰國と云ひ、其居城は縱廣十千由旬にして、其城内には刹帝利族充滿したりき、此の輪轉王の後に殊勝妙顔と云へるあり、阿彌陀佛は此の月上輪轉王を父とし、此の殊勝妙顔を母として世に降誕し給へり、此の子は長じて妻を娶り、明月と名くる子をも儲けたりしが、終に其王城を捨て、菩提樹下に端座し、無勝と名くる魔王を降して成佛せりと、

廬山蓮宗寶鑑には、月上輪王の子なる阿彌陀佛の俗名を憍尸迦と呼びたりと云ふも疑はし。

由來西方淨土には女人なきを本旨とす、故に觀音聲王經の說に就ては古來種々の解釋あり、道綽は同經に説ける父母所生の阿彌陀佛を穢土成佛の化身なりとして、極樂出現の阿彌陀佛に區別せり、然るに元曉は之を駁して、母殊勝妙顔は變化の女人なりと解釋せり、懷感及び瓊興、遵式其他諸師の解説あり、其要領は

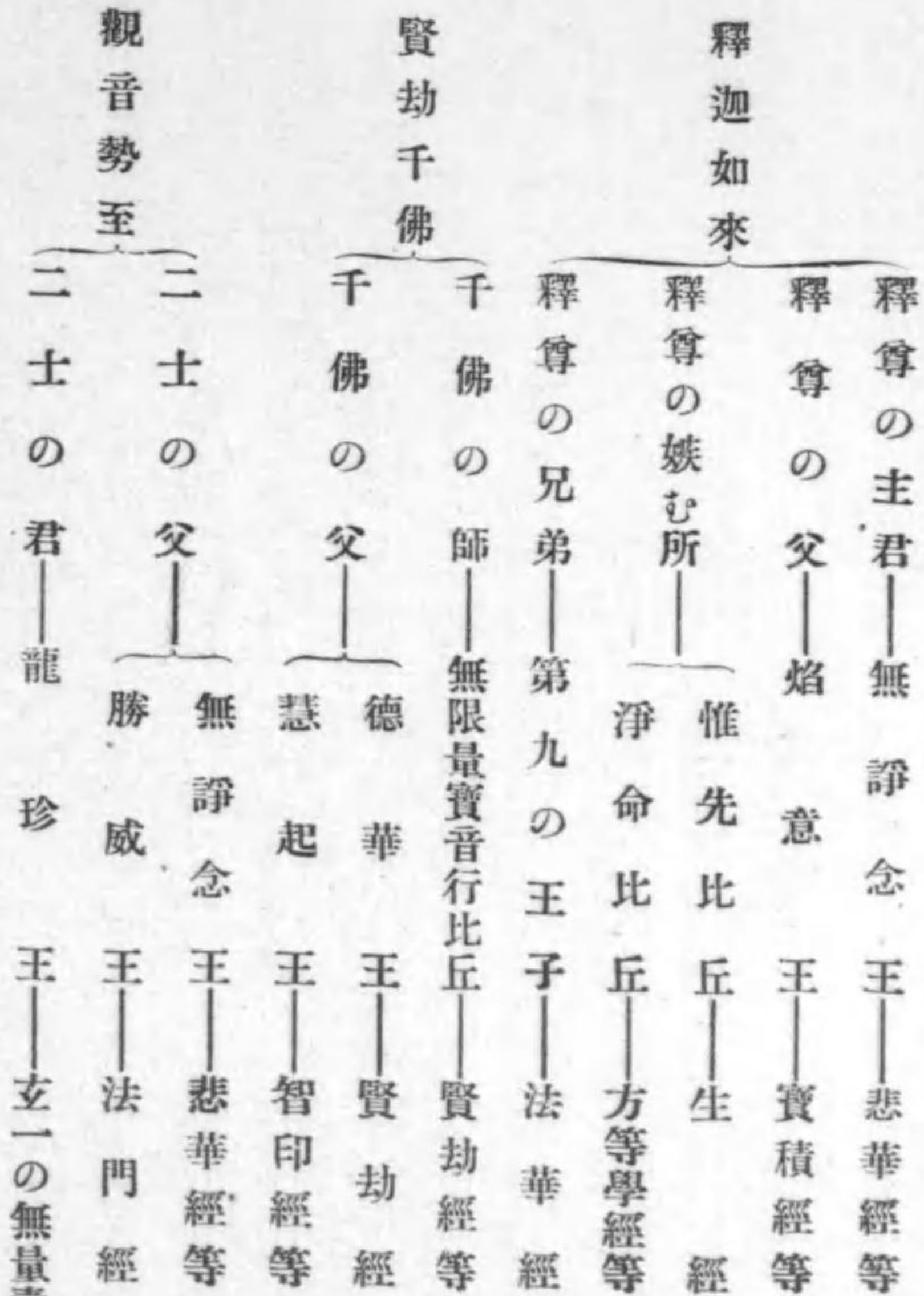
阿彌陀佛の出現せる西方の世界は、同佛の成道以前は現世の如く善美ならずして、政治あり、男女あり、魔王もありしが、阿彌陀の成佛に依りて依正莊嚴忽ちにして轉

變し、衆苦衆惡消滅して眞の安樂世界と爲り、女人も惡魔も變じて聖者の群に入れり。

次に阿彌陀佛の因位たる法藏比丘の菩薩位に就ても、古來種々の異說あり、嘉祥、憬興等は十住の第八位正心住の菩薩と云ひ、曇鸞は十地中の第八地不動地以上無生法忍位とし、淨影、慧遠は發心出家の時を地前とし、諸佛刹觀見後を地上と判し、義寂は信發心、證發心に分ち、其他玄一、懷感、憬興等種々の說あり、存覺は初地發願説を取り、深勵は八地の無生忍位を取れり、然れども是等の菩薩位は釋迦佛教聖道門の階位なれば、峻諦の云へる如く之を以て彼を測度するは穩かならずと知るべし。

次に阿彌陀佛の本生譚と、他の諸佛菩薩との關係を見るに、大約左表の如し。

阿闍の師	無限量寶音行比丘	賢劫經		
阿闍の父	無淨念王	悲華經		
阿闍如來	阿闍の道友	第三の比丘	三昧海經	
	阿闍の兄弟	第九の王子	法華經	
	阿闍を供養す	一月	得王	謗佛經



第三段 法藏比丘の撰擇と本願

過去久遠無量不可思議無央數劫の往古に當り、錠光如來と號する佛陀あり、夫より五十三佛相前後して出現し、其最後に出現せるを世自在王佛と稱す、時に國王あり深く此

の世自在王佛に歸化し、遂に國家を捨て、其門弟と爲り、名を法藏比丘と云へり、法藏の名に就ては嘉祥の無量壽經疏には、在能蘊蓄佛法故曰法藏と釋し、玄一の無量壽經記上には、所聞法教護持不夫故名法藏と註せり。

又此の法藏比丘の性格に就ては、無量壽經の諸本は或は高才勇哲與世超異と説き、或は福智殊勝、人相端嚴と云へり、特に宋譯無量壽莊嚴經には、信解第一、明記第一、修行第一、精進第一、智慧第一、大乘第一の六第一を説けり、然るに大智度論十には、阿彌陀佛世界、不_レ如華積世界、何以故法積比丘、佛雖將至十方、觀清淨世界、功德力薄、不能得見上妙清淨世界、以是故世界不如、是れ前者は、世自在王佛の所の大衆中に於ける法藏の秀絶を説きしものにして、後者は全法界の菩薩摩訶薩中に於ける法藏の力能を比評したるものなり、又前者は絶對的に阿彌陀佛を稱揚する經典なるが故に、法藏の徳性第一を説きたるものにして、後者は相對的に上妙なる華藏世界に比して論評するが故に、法藏の功德薄少を説かざるを得ざりしものなるべし、勿論當時の法藏比丘は菩薩位を究竟せる身に非ざるが故に、其の徳性の猶ほ足らざる所ありしは當然の事なり、故に無量壽經に於ても世自在王佛が汝自當知と言ひし時、法藏比丘は斯義弘深非我境界と答へられしと傳ふ

るなり、之を唐譯には我無威力堪能攝受と云ひ、宋譯には我智慧微淺不能了知、嚴刹之行と云へり、是即ち法藏因位の因位たる所以なり。

斯くて法藏比丘は一時自己の希望を其師たる世自在王佛に訴へて曰く、我が出家は固より尋常一様の佛陀たらんことを欲求するに非ず、須らく我一切諸佛に卓然超絶せる最極無上の佛陀に到達せんことを志願するにあり、その最極無上の佛陀といへるは他なし、廣く一切衆生の救濟者と成り、特に生死の苦海に沈淪して、出づるの期なき極悪不善の徒に一大安樂を與へんとするにあり、生死の苦海に沈淪せる一切衆生に一大安樂を與ふるの方法としては、我れ先づ十方世界に唯一にして無比なる極樂淨土を興し、一切衆生をこの極樂淨土に攝取するに如かざるなり、然れども此の偉業を爲さんには、宜しく先づ十方諸佛の淨土の好悪優劣、及び其淨土に往くべき因行の難易を一々檢し來りて、十方諸佛の淨土の中より劣悪の者を選び捨て、優勝の者を選び取らんとす、願くば我が痛切なる此の志望を容れ、十方諸佛の淨土の因果を我れに説き聞かしめよ、我れその中よりして選擇するところあらんとすと。

是に於て世自在王佛は、法藏比丘の目前に二百一十億の諸佛淨土の真相を現はし、而

もその淨土に往くべき因行を悉く説き聞かしめたり、法藏比丘は之を見、又之を聞き、その中よりして劣悪の者を選び捨て、獨り最善の者のみを選び取り、而も往生の因行としては、最も輕々に爲し易きものを選び取れり、即ち我が名號を唱ふるを以て、一切衆生の極樂淨土に來生すべき因行となせり。

尤も此の如き不可能の大願は、容易に決すべきものにあらず、法藏比丘は之を選択するに際し、多大の時間を要せり、即ち攝取せんと欲する一切衆生の性質を考へ、又その意志を察し、而して其の極樂淨土を莊嚴するにも、彼の事は果して衆生の喜ぶべき所なりや否や、又此の事は果して衆生の愛すべき所なりや否やを精細に攻究せり、尙ほ又極樂淨土の選擇よりも一層注意すべきは往生の因行なり、若し往生の因行にして困難なれば、如何に淨土の結構莊麗至れり盡せるも、來生する者の稀有なるは必然にして、斯くて當初の希望に反すればなり、故に淨土を無上の極樂世界となすと同時に、因行は無上の平易なる者を選択せざるべからず、是に於てか、萬善諸行の一々に就きて一切衆生の可能を探究せり、その探究せる結果として、何人と雖も可能にして、尤も易行なるものは稱名念佛の法に如かざるを發見し、終に之を以て淨土往生の因行と定めたり、念佛往生之

本願即ち是れなり、法藏比丘の選擇攝取せる本願、通じて四十八願ありと雖も、就中その主要なるものは此の一願にあるを以て、之を王本願と稱す、法藏比丘はこの本願を決するに就きて、五劫の時間を消費せり、之に依りて之を五劫思惟の本願といふ、法藏比丘は此の四十八願を選擇し終はれるや、師世自在王佛に對して、之を開陳すると同時に、又三種の誓言を爲せり、その言に曰く、

我建超世願、必至無上道、斯願不滿足、誓不成正覺、

我於無量劫、不爲大施主、普濟諸貧苦、誓不成正覺、

我至成佛道、名聲超十方、究竟靡所聞、誓不成正覺、

離欲深正念、淨慧修梵行、志求無上道、爲諸天人師、

又四十八願の教に就ては、前章に述べたる如く二十四願三十六願の異説其他二十七願、三十二願、三十九願、四十六願、四十七願、五十三願等の分類を爲し得るも、要は廣略の差に過ぎずして、大經は四十八願と決定せり、而して此の四十八願中重なるものを示せば左の如し。

第十七願

設ひ我れ佛を得るも、十方世界の無量の諸佛、悉く咨嗟して我が名を

稱せざれば正覺を取らじ。

第十八願 設ひ我れ佛を得るも、十方の衆生至心に信樂して我が國に生せんと欲し、乃至十念せんに若し生せざれば正覺を取らじ、唯五逆と正法を誹謗するを除く。

第十九願 設ひ我れ佛を得るも、十方の衆生菩提心を發して諸の功徳を修し、至心に發願して我國に生せんと欲せんに、壽終の時に臨んで若し大衆のために圍繞せられて、其の人の前に現せずんば正覺を取らじ。

第二十願 設ひ我れ佛を得るも、十方の衆生我が名號を聞て、念を我が國に係け諸の徳本を植ゑ、至心に廻向して我が國に生せんと欲せんに、果遂せずんば正覺を取らじ。

又四十八願の綱目を列擧すれば左の如し。

- 第一無三惡趣○第二不更惡趣○第三悉皆金色○第四無有好醜○第五宿命智通○
- 第六天眼智通○第七天耳智通○第八他心智通○第九神境智通○第十漏盡智通○
- 第十一住正定聚○第十二光明無量○第十三壽命無量○第十四聲聞無數○第十五

眷屬長壽○第十六無諸不善○第十七諸佛稱揚○第十八念佛往生○第十九來迎引接○第二十植諸德本○第二十一三十二相○第二十二必至補處○第二十三供養諸佛○第二十四供具如意○第二十五說一切○第二十六那羅延力○第二十七所須嚴淨○第二十八見道場樹○第二十九得辯才智○第三十智辯無窮○第三十一國土清淨○第三十二寶香合成○第三十三觸光柔軟○第三十四聞名得忍○第三十五轉女成男○第三十六常修梵行○第三十七人天致敬○第三十八衣服隨念○第三十九受樂無染○第四十見諸佛土○第四十一諸根具足○第四十二住定供佛○第四十三生尊貴家○第四十四具足德本○第四十五住定敬佛○第四十六隨意聞法○第四十七得不退轉○第四十八得三法忍

第四段 法藏比丘の苦行と成道

五劫の長時間を経て西方淨土を選択し、四十八の大願を起せし法藏比丘は、此の超世絶大の願望を成就せん爲め、殆ど算數にては測度し得べからざる長日月に亘り、或は王者と爲り、或は富豪と爲り、或は比丘と爲り、或は微細の蟲類にまで生を變へ、あらゆる難苦行を爲せり、大經に其有様を説いて曰く、

不可思議兆載永劫に於て、菩薩の無量の徳行を積植す、欲覺、瞋覺、害覺を生せず、慾想、瞋想、害想を起さず、色聲香味解法に着せず、忍力成就して衆苦を計らず、小欲知足にして染患痴なし、三昧常寂にして智慧無礙なり、虚偽諂曲の心あることなく、和顏愛語にして意を先にして承問す、勇猛精進にして志願倦むことなく、専ら清白の法を求めて以て群生を惠利す、三寶を恭敬し師長に奉事す、大莊嚴を以て衆行を具足し、諸の衆生をして功德成就せしむ、空無相無願の法に住して、作もなく起もなく法は化の如しと觀ず、僞言の自害と害彼と、彼此俱に害するを遠離し、善語の自利と利人と人我兼利するを修習す、國を棄て王を捐て、財色を絶去して自ら六彼羅密を行じ、人を教へて行せしむ、無央數劫に功を積み、徳を累ね其生處に隨ひて、意の所慾にあり、無量の寶藏自然に發應す、無數の衆生を教化し、安立して、無上正眞の道に住せしむ、或は長者、居士、豪姓、尊貴となり、或は利利、國君、轉輪聖帝となり、或は六欲天主乃至梵王となり、常に四事を以て一切の諸佛を供養し、恭敬したてまつる、是の如きの功德稱説すべからず、口氣香潔にして優鉢羅華の如し、身の諸の毛孔よりは栴檀香を出し、其の香普く無量の世界に薰ず、容色端正にして相好殊妙なり、其手より常に無

盡の寶、衣服、飲食、珍妙の華香、總蓋、幢幡、莊嚴の具を出す、是の如き等の事諸の天人に超へ、一切の法に於て自在を得たり。

法然聖人之を釋して曰く、

四十八願を發して後ち、此の願を成就せんが爲に、不可思議兆載永劫の間、菩薩無量行願を積植し、難行苦行功を積み徳を累ぬ、或る人云く、其の因行は六度を攝す、六度とは一檀、二戒、三忍、四進、五禪、六慧なり、初檀に就ては無量あり、謂はく、國城妻子奴婢僕從聚落田地舍宅園林象馬車乘珍寶輦輿等の諸身外一切の財物を能く之を施與す、之を外施と謂ひ、眼耳鼻舌身頭目髓腦等の一切身上諸根も能く之を捨與す、之を内施と謂ふなり、然れば則ち彌陀如來は本と菩薩道を行ひ、時に檀を修して劫波を送る、經に云く、施す所の目は、一恒河沙の如しと、乞眼婆羅門の縁の如し、又飲血衆生あり、其身分生血を乞ふ、施す所の生血、四大海水の如し、又噉内衆生あり、其身分脂肉を乞ふ、施す所の脂肉、千須彌山の如し、捨る所の舌、大鐵圍山の如し、捨る所の耳、純陀羅山の如し、捨る所の鼻、毗審羅山の如し、捨る所の齒、耆闍崛山の如し、捨る所の身皮、猶ほ三千大千世界所有地の如し云々、或る時肉山を成す、噉衆生に食はる、或る時大

魚を成す、身分は衆生と與にす、菩薩の慈悲此を以て知る可し、然るに飲血噉肉の衆生は無情にして菩薩利生の膚を破り、耽食嗜味の凡夫は端なく薩埵慈悲の肉を食ふ、是の如きは管に一劫二劫に非らず、兆載永劫の間、四大海水の血を流し、千須彌山の肉を竭す、捨き難きを能く捨て忍び難きを能く忍ぶ、檀度に圓滿して尸羅に究竟す、忍辱精進禪定智慧六度圓滿して萬行具足せり。

天親の淨土論に、菩薩斯の如く五念門の行を修し、自利利他、速かに阿耨多羅三藐三菩提を成ずることを得るが故にとあるを、曇鸞は論註に於て之を釋して云く、然れば覈らかに其本を求むれば、阿彌陀如來を増上縁と爲し、他利と之の利他と談に左右あり、若し佛よりして云へば利他と云ふべし、衆生よりして云へば他利と云ふべし、今將に佛力を談せんとす、此故に利他を以て之を云ふ、親鸞聖人は之より演繹して其著入出二門偈に左の如く云へり。

菩薩五種門を入出し、自利利他の行成就せり、不可思議兆載劫、漸次五種門を成就す、何等をか名けて五念門と爲す、禮讚、作願、觀察、廻

要するに他力救濟願力廻向の爲め、種々の正道萬善を修行せし次第を見るべきなり。

法藏菩薩は斯くの如く長劫に亘り、無量の徳行を積み、其結果終に絶世の本願を成就して無上正覺を成せり、斯くの如き本願は諸佛にも亦之れあり、殊に樂師如來の十二誓願の如きは實に堂々たるものなれども、法然聖人の評せし如く、不取正覺の願なきを以て、救済上の保證なく、又觀音は其願に不取正覺の誓ひあり、殊に其の淨土の如きは彌陀の淨土に無量倍せる善美のものなりとせるも、未だ正覺を成せず、左れば不取正覺の誓ひありて既に正覺せるものは阿彌陀如來を最とす、是れ他力救済教の本尊として獨占權を有する所以なりとす、大經に曰く、

阿難佛に白さく、法藏菩薩已に成佛して滅度を取り玉へりとやせん、未だ成佛したまはずとやせん、今現に在とやせん、佛阿難に告たまはく、法藏菩薩今已に成佛して現に西方に在ませり、此を去ること十萬億刹なり、其佛の世界を名けて安樂といふ、阿難又問たてまつる、其佛成道より已來、幾時を遷たまへりとやせん、佛言はく、成佛より已來凡そ十劫を歴たまへり。

第五段 三種の彌陀

阿彌陀佛の性格に就ては、淨土教内に於ても、聖道門に於ても、種々の解釋あり、而して

之を大別すれば、理佛、事佛の二と爲り、又解説の内容よりすれば、酬因感果の彌陀説、唯心所變の彌陀説、心性本具の彌陀説の三種となるべし、第一酬因感果の彌陀とは、因果の法則に従ひ、大願大行の原因に依りて、殊勝圓滿の妙果を感得せられたる佛陀を指すものなり、第二唯心所變の彌陀とは、萬法唯心の哲理より成立する佛陀にして、釋尊の説ける阿彌陀如來も吾人の精神界を流過せざれば、吾人は之を知ること能はず、吾人の知り得る所の彌陀は、自己の心中に映現せる其ものを認むるものなれば、阿彌陀佛は畢竟自己より變現せしものと爲すなり、第三に本性本具の彌陀とは、吾人の精神は、宇宙其ものと一如して、所謂十界三千の諸法悉く具有して缺くることなく、天地萬物皆我精神と不離なれば、阿彌陀佛も亦吾人の心性に本來具足せるものと爲す。

淨土教の根本正體たる大無量壽經に説ける阿彌陀佛は、固より酬因感果の佛陀にして、法藏比丘が發願修行せる原因に依りて、壽命無量、光明無量の佛心を成じ、又十方諸佛の淨土より勝れたる依報の國土を成就し、更に又南無阿彌陀佛の名號を成就して、其名號を衆生に廻向し、衆生往生の因と爲せるものなれば、大經の阿彌陀佛は現象差別の上に立てる客觀的事佛なるは自明の理なりとす。

然らば此の酬因感果の事佛と心變及心具の理佛と如何なる關係を有するものなるやと云ふに、元來客觀界に實在するものにて、之を自己のものとして認識するは固より吾人の精神作用なれば、此の意味よりして一切を唯心所變と斷じ、心理的作用の彌陀佛も爲すは固より咎むべきに非らず、唯議すべきは客觀を全然否定することの可能なや、將又穩健なるやの問題なり、又我心即宇宙なりとして、十界悉く我精神界裡に具せりと爲すは佛教の通談にして、我心即彌陀佛なりと爲るは決して妨げなきも、此の十界本具なる説は唯吾人に佛と爲るべき可能性ありて、吾人の如き愚劣の凡夫も一定の修行に依りて、釋尊の如く彌陀佛の如き佛陀と同一なる成功を見ることを得と爲るに在り、左れば是心即彌陀佛なりと云ふを妨げざると同時に、又所謂彌陀佛なるものが他に別存するを拒すべきに非ざるなり、譬へば吾人は同一の權利と同一の性能を有する故、大臣と爲り得べきは勿論なるも、吾人は未だ大臣と爲りしには非ずして、他に伊藤や大隈や寺内等の如き大臣が、嚴然として實在するが如きものなり、又江上の明月は、一なるも、北するものは月の北に轉する思ひあり、南するものは月の南に轉する思ひあり、停まるものは月も亦停まるが如く、彌陀佛は本來唯一なるも、唯心の教理よりすれば

心變と爲り、實相の教理よりすれば本具と爲り、因果の教理よりすれば酬因感果の彌陀と爲るものにして、決つして彌陀そのものに三體あるものに非らず、然れども酬因感果の彌陀佛なくんば、心變も本具も自から其説の根據を失ふべし、左れば因果の上に立てる彌陀は根本なり、本體なり、又實際的にして、心變及本具の彌陀は其反映なりと云ふも亦不可なるに非らず。

更に又心變及本具の彌陀は、理論上其存在を認容し得べく、從て又學理的の研究も可能なりと同時に、之を信せざるものは、其存在を否認する事も可能なり、然るに酬因感果の彌陀は、因果の法則上有り得べしと迄は論明し得るも、實際の有無は歴史的の事實に依るの外なく、歴史的に實存せるものならんには、信不信の如何に拘はらず、何んと雖も其存在を否定すること得ざるものなり、然らば大經に所謂彌陀佛は、歴史的に實在せる證左ありやと云ふに、吾人は不幸にして現在の地球と知り得る限度に於ける傳説歴史にては、其實存せることを證明する能はず、唯其最も能く類似せるものは釋尊にして、釋尊を擴大せるものは即ち彌陀佛なりと云ふに於て、殆んど異議なきが如し、然れども又進んで考ふるに、世界は無邊にして、宇宙の歴史は、三千年や五千年に限るべきに非

らず、左れば無限の空間と無量の時間内に於て、法藏比丘の發願修行及び成佛より彌陀淨土の建設現存することなきを保せず、故に吾人の智見思考の及ばざるを以て、直ちに之を否定するは早計たり、斷見たるを免れざるなり。

之を要するに淨土教に於ては、大經所説の酬因感果指方立相の阿彌陀佛を否定すべからざるは、固よりにして、由來淨土教の祖師大家中にも、已心の彌陀説を唱ふるものありと雖も、夫は半面の觀察にして、聖道門に寄顯せる説明たるや明らかなりとす、殊に已心の彌陀説を以て淨土教の本旨と爲さば、聖道門の外に淨土教別立の基礎を失ひ、釋尊の外に彌陀を本尊とするの理由自から霧消すべきなり。

第六段 三佛身の關係

應身佛とは歴史的佛陀にして、生身の釋迦牟尼佛の如きものなり。

法身佛には二種の觀察法あり、即ち起信論の意に擬して云へば、本覺法身佛始覺法身佛之れなり、本覺法身とは所謂眞如とか又は宇宙の大精神とか、哲學的實在と云ふ意味のものに當り、吾人衆生の内具的なる佛性とか良心と云ふもの、本源にして、善的意味に於ける個人並に宇宙的の本體と稱すべきものなり、左れば本來絶對的にて無限性な

り、萬有の根源たると同時に、一切に遍滿せる善的意義に於ける活力なり、有神論にては之を別所に捻出して全智全能と云ひ、哲學的には之を抽象して實在と云ひ、無限と云ひ絶對と云ふ、結局同一物に對する觀察の巧拙に過ぎざるものなり。

次に始覺法身佛とは、應神佛即ち釋迦牟尼の大悟の境界を指したるものにして、大悟徹底本來の面目を顯揚し來らば、吾は絶對性なり、宇宙的本體と根本的に同物なることを實證し、吾と本體とを全然融渾せる境界を云へるものなり、然らば本覺法身佛と始覺法身佛とは同か異かの疑問起るべきが、或る意味に於て同なり、即ち本來同一性にして、又既に一味平等の歸融を見たる上は、彼れ此の差別なきを以てなり、又或る意味に於ては不同なり、本覺法身佛は材料即ち地金の如し、始覺法身佛は之を或る器具に鑄治せられたる如し、金時計は、其質は金なるには相違なきも、金の上に時計と云ふ効用を現はし居れり、左れば本覺法身佛のみにては資料たるに過ぎずして、資料如何に立派に如何に豊富なりとするも、之れを精製即ち修養工夫せざれば、充分の効用を現はし得ざるが如きものなり、故に又本覺法身佛の方面より云へば、本覺法身佛の妙用を指して始覺法身佛とするものにして、更に始覺法身佛の側より見れば、本覺法身佛を開發し活用せるも

のなりと云ふべきなり。

釋迦牟尼佛は印度の悉多としては丈六の應身佛なり、然れどもそが修養工夫の結果大悟徹底したる點より見れば始覺法身佛なり、又本覺法身佛に還同一致せる境界なり、故に本覺法身佛の位置よりすれば、久遠實成の釋迦牟尼如來にして、妙用無窮德化不朽なる點よりすれば始覺法身佛なりとす。

法應二身佛は上述の如し、更に報身佛なる課題あり、之を合して法報應三身論と云ひ、佛教にては極めて重要な問題にして、頗る難解なると同時に又異説も少なからず、蓋し法應二身論は哲學的にも充分之を承認し得べき、極めて穩健適確の議論にして何人も異議なき所なり、左れば大智度論の如きにも生身佛法身佛の二身觀を爲すものなりしが、後には三佛身乃至十佛身等の議論生じ、佛身觀は極めて複雑に赴けり、然れども要は報身佛の解釋如何に在りて、報身佛論は一方より之を見る時は、宗教の中心點なるが如し、故に報身の研究は大なる趣味と價值とを有するものなり。

報身佛とは如何、阿彌陀、如來の如きもの之れなり、釋迦佛即ち生身の如來に非らず、又本體絶對なる眞如實在を名義上具體化する法身佛の他に、報身佛なる不可思議の如來、

果して存在し得べきや如何、佛家にては通常法身を覺性と爲し、應神佛を覺相、報身佛を覺用と爲し、本體と形相の作用とに配當せり、法身を哲學的本體の佛、應身を歴史的の人身を有せし佛、報身を其感化力として信仰の對象たる宗教的の佛と爲すは、頗る妙味ありて此は何人も肯定し得べきも、報身佛に指方立相を論ずるは如何、即ち例へば阿彌陀佛は釋迦と異なる形相を有して、西方なる淨土を主宰し、信者臨終の際には優美の姿相を現はして來迎すと云ふ如き議論、其他觀音の功德論、不動明王の活躍説の如き、之れを如何に解すべきか、茲は宗教上實に重大の問題なり。

由來佛教には非常に多數の佛あり、三千佛名經には三千の佛名を列記せる上に、其最後に猶之れ以上に恒河沙の諸佛ありと爲せり、最少數にして法應二身より法報應三身乃至是等多數の佛は、各自に別立獨存するものなるか、將又其關係は如何、佛教にては之を解決するに二様の方式を以てせり、其一は一佛多身觀にして、此れ佛は一人一體なるも、其一體の佛が種々に活動作用を現はし、變化自在の妙趣を現はすに依るものと爲せり、例へば釋迦佛なれば釋迦一佛、彌陀佛なれば彌陀一佛、大日如來なれば大日一佛より他に本體の佛はなきも、其作用は無限にして、或は神通力を以て多數の身を現はし、或は

微妙の佛身と爲り、或は懲惡の爲め閻魔王の如き形相となり、又相手の機根に應じて、種種の身種々の説を爲すものにして、此は畢竟一佛多用にて事實佛身を多數に現はすと、其作用の偉大なるを比喻せしものとの別あり、彼の千手觀音の如きは、實際千本の手を有する片輪には非ずして、救濟力の偉大なるを形容せしものなりとす。

其二は多佛一身説にして、此は前の逆に觀察せしものなり、釋迦も佛なり、彌陀も佛なり、龍樹も達磨も曇鸞も矢張り一種の佛なり、又孔子の如き基督の如きも佛陀の一部と云ひ得べし、要するに自覺して他の模範と爲れる偉人は悉く佛陀なり、尤も其内に佛教内の佛即ち覺者と、佛教外即ち外道の佛との區別あるも、兎に角偉人を以て一種の佛と觀じ、此等多數の佛あるも畢竟すれば悉く是れ、絶對本覺法身佛の顯現に過ぎざれば、結局は法身一佛に歸すべきものなりとする説なり。

要するに應身佛の釋迦よりすれば、釋迦は歴史的の生身佛なると同時に、本覺法身佛より現はれ來たるものなれば、應法一致し、又生身佛の徳化偉大なると、本覺法身佛の無限の威力と相一致して、茲に不可思議の報身佛を現はし得るものなれば、三身即一にて、釋迦に法報二身具足せりと云ふべし、又法身佛は其本具の性能より自然に應身佛と顯

現し來り、修養工夫して本始一如、茲に偉大の妙用を現はすを以て、法身には應報二身本具内存せりと云ひ得べし、又報身は本覺法身を所依とするは固よりにして、又一度應身の徑路を通過せしものなるも、無往所涅槃なれば、更に又幾回にても應身佛と化現し得べく、左れば報身には法應二身の力用を具備せりと云ひ得べし、斯く孰れの方面より觀察するも、三身即一なると同時に、又一即三、一身に三乃至幾千萬の變化妙用を有すと俱に、三身並に幾千の諸佛は一に歸して、華嚴の一多、主伴、隱顯具足、重々無盡、事々無礙の妙境を活現し得べきものとす。

第七段 久遠の彌陀と釋迦

釋尊は八十にして入滅せるも、之れは所謂應身の佛陀にして、釋尊の涅槃に入るを見て、佛陀は長く滅せりと爲すは淺見なり、釋尊八十の生涯は利生の應現にして、其の眞身は永遠の存在なりとする信念即ち佛陀の壽命は、未來に於て無窮なりとの思想は、早くも小乘經にすら現はれたり、増一阿含に云く、

阿難汝が今、如來の弟子少しと爲す、此の觀を作す勿れ、東方の弟子無數億千、南方の弟子無數億千なり、此の故に阿難、當に此の意を建つべし、我釋迦文佛は壽命極長な

り、然る所以は、肉身滅度を取ると雖も法身存在す。

之れ佛陀の壽命永遠不死なるを説けるものなり、又法華經如來壽量品に曰く、

然るに善男子よ、我は實に成佛已來、無量無邊百千萬億那由他劫なり……是より已來我常に此の娑婆世界に在りて諸法教化す、亦餘處百千萬億那由他阿僧祇國に於て、衆生を導利す、諸の善男子よ、是の中間に於て我は然燈佛等と説く……是の如く我成佛已來、甚大久遠なり、壽命無量阿僧祇劫にして、常住滅せざるなり。

之れは過去に於ける釋尊の壽命久遠なるを示せるものにして、所謂久遠實成の釋迦佛を現はし、伽那始成の釋迦は迹門にして、是れよりも古き本門の本佛を開現せり、阿含經は佛陀眞身の壽命を將來に延長して不滅なりとして、法華經は其眞身の歴史を過去に延長して、久遠實成の古佛、本門開現の釋迦を説けり。

此の法華本門の久遠實成の釋迦佛説は、遂に其の影響を阿彌陀佛の上に及ぼし、同經化城喻品に在る三千塵點劫の古へに出世せる大通智勝如來の十六の王子の中、其第九の王子は今日の阿彌陀佛にして、其第十六の王子は今日の釋迦なりと説ける、迹門の古き因縁談より推釋して、弟たる釋迦が久遠の古佛ならんには、其兄たる阿彌陀佛は釋迦

よりも一層久遠の成佛ならざるべからずと爲し、十劫始成は彌陀の迹門にして、其本門は無限底の古佛なるべしと爲せり、嘉祥の觀經義疏、元照の小經義疏、性澄の小經句解、株宏の小經疏鈔等皆久遠の彌陀を説き、十劫始成の彌陀は、一期赴機の説なりと爲せり、覺運の念佛寶號には、日蓮宗の一派が久遠實成の釋迦を無始の圓佛と爲すと等しく、彌陀をも亦始終なきものと爲せり、親鸞聖人の淨土和讃には、彌陀成佛のこのかたは、いまに十劫と説たれど、塵點久遠劫よりも、ひさしき佛とみへたまふと云へり、又了慧の大經鈔には、首楞嚴勢至章に、我往昔恒河沙劫に於て佛あり、世に出で無量光と名く、十二如來相繼ぐ一劫云々とあるより、推して大經所説の彌陀は迹佛なりと云へり。

又密教の意を以て法華經を解する時は、妙法蓮華經とは八葉の蓮華を表彰し、八葉は即ち四方の四佛と四隅の四菩薩にして、此の佛菩薩を法華經の諸品に配當すれば、八葉中の西方阿彌陀佛は壽量品に當るとは、圓珍の説なり、左れば壽量品の久遠實成の古佛は其實阿彌陀を指せしものに非ざれば、釋迦の本地が阿彌陀佛なる事を示せるものと云ふべし、茲に於てか、釋迦の本地は即ち阿彌陀にして、釋迦は阿彌陀の應現なり、従つて阿彌陀佛は一切諸佛の本師本佛なりと云ふ説を生ずるに至れり、親鸞聖人の淨土和讃

には、久遠實成阿彌陀佛、五濁の凡愚をあはれみて、釋迦牟尼佛としめしてぞ、迦耶城には應現すると云へり。

更に又密教家にては、大日如來と阿彌陀佛の不二一體なるを説き、尙進んで釋迦は大日の應現なると同時に彌陀釋迦三即一なるを示し、或は胎藏界の大日は彌勒にして、金剛界の大日は彌陀なりとも云へり、之れは金胎を知と理及び果と因とに配して、成と未成との意を表せしものにして、又金胎不二は彌陀なりとも云へり、是等の理は前段の三佛身の關係より推究して、自から其意のある所を察し得べきなり。

因に謂く、十劫始成以上に久遠の彌陀を立つるは不可なし、然れども此の久遠を無始の意義に解するは大に不可なり、無始は酬因感果と相容れずして、畢竟本覺法身を名義上具體化するに外ならず、斯くの如くんば眞如や儒教の天、哲學上の實在と何等擇ぶ所なくして、大願大行全たく其價を失ふに至るべし、左れば如何に久遠なりとするも始成の意味をば決して忘却すべきに非らざるなり、勿論本覺始覺一致融合し、法身報身不二即一にして、之を絶對界即ち理體門上より見る時は、無始無終たるべきは固よりなるも、報身の當分より考へ、始覺の方面より觀する時は、無終は可なるも無始は自家擲着にし

て、如何にしても有始たらざる可らざるや論なき所なりとす、之を要するに淨土教は法華宗の如く、久遠の古佛をのみ尙ぶべきに非らず、即ち成佛の新古は敢て當面の問題に非らず、寧ろ新成にして活動力救済力の旺盛なるを尊重すべきと同時に、無始の過去よりも、今日と今日以後とに於ける實在活現を希望すべきものなりとす。

第八段 六字の名號

南無阿彌陀佛なる六字の名號は、彌陀が因位の萬行と果地の萬德、内證外用の無量の功德を攝含して、更に洩らす所なし、故に之を全德施名と云ふ、此れ即ち吾人が宗教的意識を集注する唯一の標的にして、又其最も鮮明なるものなりと同時に、更に之を其救済者たる側より見る時は、救済力の信號なり、攝收の印契なりと云ふべし。

之を要するに南無は歸命と譯して願なり信なり、阿彌陀佛は萬德を具足せる行なり、救済力なり、左れば此の六字に願行、行信全たく具足し、機法自ら一體と爲りて無限の勢用を有するものなり。

更に進んで稱名の價値即ち效果の有無を検するに、初め支那に於て攝大乘論の譯せらるゝや、所謂攝論宗一時流行し、其攝論中に四意趣四秘密の分別ありて、其第二の別時

意趣に發願のみにて淨土に往生するは方便説なり、總て往生成佛には願行具足せざるべからず、故に單純なる稱名念佛の如きにて成佛得果すべき理由なしとの議論盛に行はれたり、之に對する淨土教の所説を見るに、善導の觀經疏には、

今此の觀經中十聲稱佛すれば、即ち十願十行ありて具足す、云何にして具足するや、南無と言ふは即ち是れ歸命なり、亦是れ發願廻向の義なり、阿彌陀佛と言ふは即ち是れ其の行なり、斯の義を以ての故に必ず往生を得べし。

淨土宗鎮西派の説たる傳説記に云はく、

今此の觀經等とは、念佛の行實に順次の生にして別時あらざる事を明かす、願行具足するが故に本願に順するが故に、蓋し散善義順彼佛願の疏意なるべし、南無と言ふとは南無は西音歸命は正音發願は義翻なり、九品義に云く或は歸命と翻し、或は歸身と云ひ、或は救濟と云ひ、或は度我と云ふ、異譯ありと雖も亦一途に歸す、身命を佛陀の境に歸す、我を救護して滅罪生善し玉へ。

問ふ心に歸命無くして口に南無と唱る、是れ願行具足の者なりと爲すや、答ふ然らず、業成るは必ず意あるが故なり、今の釋は只是心に歸命する上に南無と唱ふるな

り。問ふ若し爾は執師子國の老翁如何、答ふ決疑鈔の如し、問ふ本願文の中に但だ十念と言ふ、南無の言なし、答ふ至心信樂欲生我國は即ち南無の意なり、乃至十念は則ち是れ阿彌陀佛の四字なり、是を以て觀經の上下下に本願の行を説て稱南無阿彌陀佛と云へり。即ち是れ願行具足の相なり、問ふ六字の稱名俱に行に屬すべし、何ぞ願行に配するや、答ふ實には問端の如し、六字俱に行なり、但し南無に就て願あり行あり、口に南無と唱る是れ行なり、心に南無と念する是れ願なり、今は願の邊を取て六字の中に於て願行を分別す、又至心信樂欲生我國は即ち是れ安心なり、此の安心を具して口に南無と稱するが故に願に屬するなり、摠じて之を言へば、初發心時は心は前行は後なり、正しく起行の時は心行連續して旋火輪の如し、心と行と互に忘る時あり、謂く或は口に行して心に忘る時あり、或は心に念じて口に唱へざる時あり、心行相資て必ず須く生を牽くべし、若し爾は心に念せずと雖も口に名を唱ふべし、行念を助くるが故なり、禮讚に五門相續助三因と云へり、(三心)則ち此の意なり、口に稱せずと雖も意に恒念すべし、念行を助くるが故なり、下の文に三心既に具無行不成と云へり、則ち此の意なり、凡そ大意とは念すれば行を引發し、行すれば

念を引起するが故に心行相資と名く、事是れ至要なりとす。

次に西山派の解釋を見るに、楷定記に曰く、

次に廣釋の中先自微問す、未聞の益の故に、次に答釋の中に南無歸命は梵漢相對なり、亦是等とは其義を轉釋す、歸命の意廻願に在るが故に、阿彌陀佛即ち是れ其行とは解者不同なり。

有云佛の名號を稱る口業の行の故に、又口業を本と爲して三業を通ずる故に舌を動るは身業聲に發る、語業心を経る、心業なり。

此の一義と雖も文の正意に非ず、若し口稱を取りて其行と爲すは六字皆是なり、何の願行を分つ故に群疑等に總じて判じて行と爲す。

又口稱を取りて方に其行と爲せば、下中と中下と應に其行なかるべし、故に知る此の釋は別に深意あり、其意は何ぞや、彌陀世尊深重の誓光明名號をもて十方に攝化するが故に、無碍光の如實名義の清淨功德能く願生衆生と與に増上縁と作す、淨は業障を除く、淨業成就して一形一聲一念一信一聞皆往かざる莫し、故に阿彌陀佛即ち是れ其行と云ふなり、序題の標する所の釋願の別意は正しく斯にあり、釋名に曰

く、云へば必ず教行の縁因に藉く乃至觀念門に外内の因縁和合を云ふ、皆是れ願行具足の義なり。

永く諸師行者の三業に自ら願行を立るに異なり、但し佛名の無上功德を知て其行體と爲るを三業に執持すれば彼此三業相捨離せず、還て行者の三業諸善を成す、是を三福正因九品正行と名く、亦是所爲得受の義なり、散善門に至りて更に之を悉くすべし。問ふ若し爾の逆者の一念亦即ち生否若くは生を言ふ者なり、經に具足十念と説く、知十に満たずんば未だ生を得べからず、若し否を言ふ者は理も亦不可なり、願行を具すと雖も生ぜざる者あり、願行具足して方に生すべきの義還て成らず、故に唯一願の心を判じて別時と爲す、理未だ盡きざるが故なり。

答ふ縦ひ是れ十聲すれども、若し至心ならずんば願行成らず、未だ生を得ず、縦ひ是れ一聲なれども、若し至心ならば願行既に成じて皆往かざるなし、一邊の難の如く其理極成す、但具足十念と言ふは且らく滿數に約して、其の作業相續の相を明らかにす。或可至心南無の願に阿彌陀佛の行を具す、故に言ふ至心に十念を具足す、今即有十願十行具足を言ふは即ち此の義なり、故に一念と雖も亦具を言ふべし、例へ

ば彌勒所問經の十念の如し。

又觀門の意に云く、

歸命は觀門なり、阿彌陀佛は弘願の體なり、我命佛に歸す、上一形を盡して下一念に至る、二心なき所は歸命の義にして、一代諸經の一切功德皆彌陀一佛の功德なり、此の如く知るを安心と爲す、是れを觀門と言ふなり。

親鸞聖人の教行信證に曰く、

然れば南無の言は歸命なり、歸の言は至なり、又歸説なり、又歸説なり、告なり、述なり、人意を宣述するなり、命の言は業なり、招引なり、使なり、教なり、道なり、信なり、計なり、召なり、是を以て歸命とは本願招喚の勅命なり、發願廻向と言ふは如來已に發願して、衆生の行を回施したまふ心なり、即是其行と言ふは、即ち選擇本願是れなり、必得往生とは不退の位に至ることを獲ることを彰はすなり、經に即得と言ひ、釋には必定と云ふ、即の言は願力をきくに由つて、報土の眞因の決定する時尅の極促を光闡せるなり、必の言は金剛心成就の貌なり。

蓮如上人の御文章には、抑も信心の體といふは、經に曰く聞其名號信心歡喜といへり、

善導の云はく、南無といふは歸命、また是れ發願廻向の義なり、阿彌陀佛といふは即ちその行と云へり、南無といふ二字のこゝろは、もろくの雜行をすて、うたがひなく一心一向に、阿彌陀佛をたのみたてまつるこゝろなり、さて阿彌陀佛といふ四の字のこゝろは、一心に彌陀を歸命する衆生を、疑ひもなかつたすけたまへるいはれが、すなはち阿彌陀佛の四の字のこゝろなり、されば南無阿彌陀佛の體を、かくの如く心得わけたるを信心をとるとは云ふなり、是れすなはち他力の信心をよく心得たる念佛の行者とは申すなり。

又尊號眞像銘文釋に曰く、

善導和尚のたはく、言南無者と云ふは、南無はすなはち歸命と申すことなり、歸命はすなはち釋迦彌陀の勅命にしたがひ、めしにかなふと申すことばなり、此の故に即是歸命とのたまへり、亦是發願廻向之義といふは、二尊のめしにしたがふて、安樂淨土に生まれんとねがふ心なりとのたまへるなり。言阿彌陀佛者といふは、即是其行とのたまへり、即是其行は之れすなはち法藏菩薩の選擇の本願なり、安養淨土の正定の業因なりとのたまへる心なり、以斯義故といふは、此の義をもての故にと

云へる心なり、必得往生と云ふは、必ず往生を得しむと云ふなり、必はかならずと云ふ、かならずと云ふは自然のこゝろをあらはす、自然ははじめてはからはすと云ふなり。

執持鈔に曰く、

そも、南無は歸命、歸命のこゝろは往生のためなればまたこれ發願なり、この心あまねく萬行萬善をして淨土の業因となせば、また廻向の義あり、この能歸の心所歸の佛智に相應するとき、かの佛の因位の萬行果地の萬徳ことごとく名號のなかに攝在して、十方衆生の往生の行體となれば、阿彌陀佛即是其行と釋したまへり。

寶章に曰く、

夫れ南無阿彌陀佛と申すは如何なる心ぞとなれば、先づ南無といふ二字は、歸命と發願廻向とのふたつの心なり、また南無と云ふは願なり、阿彌陀佛と云ふは行なり、されば雜行雜善をなげすて、專修專念に彌陀如來をたのみたてまつりて、たすけ玉へとおもふ歸命の一念をこるとき、かたじけなくも遍照の光明を放ちて、行者を攝取したまふなり、此の心すなはち阿彌陀佛の四字の心なり、また發願廻向のこゝろなり、是に依りて南無阿彌陀佛の六字は、ひとへにわれらが往生すべき、他力信心

のいはれをあらはし玉へる御名なりと見えたり。

南無阿彌陀佛の六字を善導釋して曰く、南無と云ふは歸命、またこれ發願廻向の義なりといへり、其意いかんぞなれば、阿彌陀如來の因中に於て、我等凡夫の往生の行をさだめ給ふとき、凡夫のなす所の廻向は自力なるが故に成就しがたきに依りて、阿彌陀如來は凡夫のために御辛勞ありて、此の廻向を我等にあたえんがために廻向成就したまひて、一念南無と歸命するところに、此の廻向を我等凡夫にあたへましますなり、故に凡夫の方よりなさぬ回向なるがゆへに、これをもて如來の廻向をば、行者のかたよりは不廻向とは申すなり、此いはれあるがゆへに、南無の二字は歸命のこゝろなり、又發願廻向のこゝろなり、此いはれなるが故に南無と歸命する衆生を、かならず攝取してすて給はさるが故に南無阿彌陀佛とは申すなり。

當流の信心決定すといふ體は、すなはち南無阿彌陀佛の六字のすがたと心得ふべきなり、すでに善導釋していはく、南無を言ふ者は即ち是れ歸命なり、亦是れ發願廻向の義なり、阿彌陀佛を言ふ者は即ち是れ其行なりと云へり、南無と衆生が彌陀に歸命すれば、阿彌陀佛のその衆生をよくしらしめして、萬善萬行恒沙の功徳をさづ

けたまふなり、此のこゝろすなはち阿彌陀佛即ち是れ其行なりと云ふこゝろなり、この故に南無と歸命する機と、阿彌陀佛のたすけまします法とが一體なるところをさして、機法一體の南無阿彌陀佛とは申すなり。

一流安心の體といふ事、南無阿彌陀佛の六字のすがたなりと知るべし、この六字を善導大師釋して云く、南無を言ふ者は即ち是れ歸命なり、亦是れ發願廻向の義なり、阿彌陀佛を言ふ者は即ち是れ其行なり、斯の義を以ての故に必ず往生を得と云へり、まづ南無と云ふ二字は、すなはち歸命といふ心なり、歸命と云ふは衆生の阿彌陀佛後生たすけたまへと、たのみたてまつるこゝろなり、また發願廻向と云ふは、たのみところの衆生を攝取して、すくひたまふこゝろなり、之れすなはちやがて阿彌陀佛の四字のこゝろなり。

善導のいはく南無といふは歸命、またこれ發願廻向の義なり、阿彌陀佛といふはすなはちその其行といへり、南無といふ二字のこゝろは、もろくの雜行をすてゝうたがひなく、一心一向に阿彌陀佛をたのみたてまつるこゝろなり、さて阿彌陀佛と云ふ四の字のこゝろは、一心に阿彌陀佛を歸命する衆生を、やうもなかつたすけたまへる

いはれが、すなはち阿彌陀佛の四の字のこゝろなり。

六字を善導釋していはく南無といふは歸命なり、乃至往生することを得といへり、然ればこの釋のこゝろをなにと心得べきぞといふに、たとへば我等ごときの惡業煩惱の身なりと云ふとも、一念に阿彌陀佛に歸命せば、かならずその機をしらしめしてたすけたまふべし、是れ歸命といふはすなはちたすけ玉へと申すこゝろなり、左れば一念に阿彌陀佛をたのみ衆生に無上大利の功德をあたまふを、發願廻向とは申すなり。

南無といふは極樂に往生せんとねがひて、彌陀をふかくたのみたてまつるこゝろなり。

歸命の一念をこるとき、かたじけなくも遍照の光明をはなちて、行者を攝取したまふなり、このこゝろすなはち阿彌陀佛の四字のこゝろなり、又發願廻向のこゝろなり。

また發願廻向といふは、たのみところの衆生を攝取して、すくひたまふこゝろなり、これすなはちやがて阿彌陀佛の四字のこゝろなり。

されば一念に彌陀をたのむ衆生に、無上大利の功徳をあたへたまふを、發願廻向とは申すなり。

次に阿彌陀佛といふ四字は、いかなる心ぞと云へば、今の如く彌陀を一心にたのみまいらせて、うたがひのこゝろのなき衆生をば、かならず彌陀の御身より光明をはなちて、てらしましましてその光のうちにおさめをき給ふ、さて一期の命つきぬれば、かの極樂淨土へをくりたまへるこゝろを、阿彌陀佛とは申したてまつるなり。

次に阿彌陀佛といふ四の字は、南無とたのむ衆生を阿彌陀佛のもらさず、すくひたまふこゝろなり、このこゝろをすなはち攝取不捨とは申すなり。

南無と衆生が彌陀に歸命すれば、阿彌陀佛のその衆生をよくしらしめして、萬善萬行恒沙の功徳をさづけたまふなり、このこゝろすなはち阿彌陀佛卽是其行といふこゝろなり。

決定鈔に曰く(本鈔は作者未定)

名號すなはち正覺の全體なり、乃至われら願行ことごとく具足せずと云ふことなし、かるが故に玄義に曰く、今この觀經のなかの十聲の稱佛に、すなはち十願ありて

十行具足せり等、

禮讚に釋したまふに、若し我成佛して十方衆生我が名號下至十聲を稱すべし、若し生ぜざる者は正覺を得すと云へり、この文のこゝろは十方衆生願行成就して往生せば我も佛にならん、衆生往生せずはわれ正覺とらじとなり、乃至十方衆生の願行圓滿して往生成就せしとき、機法一體の南無阿彌陀佛の正覺を成したまひしなり。かるが故に佛の正覺のほか乃至同時なり乃至成したまひける往生を、つたなく今までしらすして空しく流轉しけるなり乃至三世の衆生の歸命の一念も正覺の一念にかへり乃至成せしいはれを領解するを、三心とも三信とも信心ともいふ、乃至領解も機にはとゞまらず、面々機ことに願行成就せしとき、佛は正覺を成し凡夫は往生せしなり、かゝる不思議の名號もしきこへざることあらば、正覺とらじとちかひ玉へり、我すでに阿彌陀といふ名號をきく、知るべし我等が往生すでに成せりと云ふことを。

一衆生のうへにも往生せぬことあらば、ゆめく佛は正覺なり玉ふべからず、こゝを心得るを第十八の願をおもひわくとは云ふなり、まことに往生せんと思はれ、衆

生こそ願をもおこし行をもはげむべきに、願行は菩薩のところにはげみて、成果はわれらがところに成す乃至たゞ三惡の火坑にしづむべき身なるを、願も行も佛體より成して、機法一體の正覺成し玉ひける等。

念佛三昧において(所信)信心決定せんひとは(能信)身も南無阿彌陀佛、こゝろも南無阿彌陀佛なりと思ふべきなり、乃至機法一體にしてこゝろも南無阿彌陀佛なり。念佛三昧はわれらが稱禮念すれども自の行にはあらず、たゞこれ阿彌陀佛の傳を行するなり、乃至凡夫の行を成せしところを行するなりと云ふなり。

われらが色心二法乃至南無阿彌陀佛の體なり、乃至十劫正覺の剎那より成したまひけるを云ふ、信心のおこるを念佛衆生と云ふなり。

彌陀大悲のむねのうちにかの常没の衆生みち／＼たるゆへに、機法一體にして南無阿彌陀佛なり、我等が迷倒のこゝろのそこに法界身の功德みち／＼たまへるゆへに、また機法一體にして南無阿彌陀佛なり、淨土の依正二報も亦しかり、依報は寶樹の葉ひとつも乃至正報は眉間の白毫相より、千輻輪のあなうらに至るまで、常没の衆生の願行圓滿せる御かたちなるゆへに、また機法一體にして南無阿彌陀佛なり。

り。

眞宗論要に曰く、

問ふ今釋の義相云何、答ふ之を解するに願行具足と機法一體との二途あり、初願行具足とは發願と即是其行との相望なり、是に於てか生佛の願行究竟し終る、此の時は歸命の信は云何するやと云ふに是に亦二途あり、一には願行に望みて歸命を能具とす、故に執持鈔に南無は歸命、々々のこゝろは往生のためなれば亦これ發願なり、この心あまねく萬善萬行をして淨土の業因となせば又廻向の義あり等と云ふ、問ふ今のまたこれ發願なりといふは歸命即發願の義ならん、何ぞ義具とするや、答ふ廻向は正しく義具なり、廻向已に義具なる方より發願をとれば、發願廻向共に廣門修相の義具なるべし、中祖は發願廻向を感得すと云ふ、これ能具の信に具する所の廻願の徳なり、又二には發願を歸命に付して歸命の心想に作得生想の義あるより發願と名るなり、此の時は廻向も亦發願に屬して自力を廻し他力に歸する義となる、これは歸命發願一組になりて即是其行に對して願行具足となる、銘文に亦是發願廻向之義といふは、二尊のめしにしたがひて安樂淨土に生まれんとねがふ心

なりと、これ願廻を直に歸命の信相とす、此の二途は暫くの左右のみ廻向發願釋に、決定眞實心中に廻向し玉へる願を須つとあり、此の所須の廻願に約すれば全く具徳にして能須の歸命中に具するなり、又須て得生想を作すとは其の信相に約す、次に機法一體とは歸命と阿彌陀佛と相望んで、發願廻向は如來のおんたすけのころにて、義即ち是れ其行に組して攝取の法となる、寶章に發願廻向といふは阿彌陀如來の衆生をたすけたまふころなり、やがて阿彌陀佛の四字のころなり等と、依りて南無の機と阿彌陀佛の法と機法一體なる趣なり、中に於て疏文は正しく願行門に約し、寶章は正しく機法門の扱ひなり、此の如く二途ありと雖も、尅實すれば願行は法體成就の故に所歸の法となり、終に機法門に歸す、問標には一聲稱佛即有十願十行と云ふ、釋は歸命の信に願行具足すと云ふ、標釋不調に非らずや、答ふ然らず稱名の願行具足は必ず信心に依る、南無歸命に願行具足すと釋顯するが即稱の顯行具足を成するなり、故に釋を以て標に歸すれば信行不離の行、一願建立の念佛爲本の化風此に立つ、又標を以て釋に歸すれば五願建立の信心爲本の宗義此に顯はる、彼此相成して義彌々明なり。

抑も南無阿彌陀佛は、もと彌陀が因位永劫の間に、萬善を修し萬徳を行し、清淨眞實を以て成就せるものにして、彌陀の方より云へば此れ即ち果報なり、然れども又其の願意より見れば、六度十波羅密等の餘行餘善を選捨て、此の果號を稱念せんものは、たとひ一聲十聲なりとも、必ず彌陀の大悲を以て救濟すべしと誓ひしもの故、衆生の方より云へば此の果號は彌陀の誓願に順じて稱念すべき所の法體なり、故に此の六字を行と名く、行とは進趣の義にして、もと彌陀が因位にありて造作進趣せし果號なるを以て、之を稱ふれば往生の果位に進趣するが故に行と名付けたるなり、吾人が往生を得べき正しき業因は、唯是れ一南無阿彌陀佛の稱名にあり、念佛は餘行に勝れ且つ行し易き故、彌陀は之を選び取りて往生の正業と定む、具足煩惱の凡夫容易く安養國に往生を得るは、此の理由あるに依るなり、往生之業念佛爲本と云へるは即ち此の意なり、法然聖人の選擇集に曰く、

初に勝劣とは、念佛はこれ勝れ餘行はこれ劣れり、所以はいかん、名號はこれ萬徳の歸する所なり、乃至然れば則ち佛の名號の功德は、餘の一切の功德に勝れたり、故に劣れるを捨て、勝れるを取りて以て本願となしたまふか、次に難易の義は、念佛は修

し易く諸行は修し難し乃至念佛は易きが故に一切に通じ、諸行は難きが故に諸機に通せず、然れば則ち一切衆生をして平等に往生せしめんが爲に、難を捨て、易を取りて本願となすか。然れば則ち彌陀一佛の所有の四智三身十力四無畏等一切内證の功德相好光明說法利生等の一切外用の功德皆悉く阿彌陀佛の中に攝在す。尤も真宗の法義は、唯徒に口に任せて唱ふるに非ず、亦稱念の功を頼むにもあらず、偏に本願の力に隨順する信心を以て、專要とす、曇鸞は如實修行不如實修行を釋して、徒に稱名すとも、疑心自力の稱念は名號の義理に相應せざる不如實修行なり、他方信心の稱名は名義に相應せるゆゑ、如實修行と名くと云へり。

要するに六字の名號は、彌陀の方より吾人に向うの意と、吾人より彌陀に向ふ意との二様の解釋ありて、前者を約法と云ひ、後者を約機と云ふ、即ち法に約せば一心に二心なく、懷疑なく、信じ稱ふる衆生を、彌陀は無碍絶對の智慧の光明を以て救濟し、再び三惡道に墮落せしめず、必ず安養國へ往生せしめんと云ふ意、又之を機に約せば一心に二心なく、疑なく、餘行餘善に心を係けず、餘佛餘菩薩に思想を移さず、彌陀一佛の願力智力を信じ、名號を稱ふるは決定成佛を得ると云ふ意なり、此の機と法とは一物の兩面にして、

不離一體なり、再言せば實に彌陀は十方世界の衆生をして、障礙なく救濟する佛陀にして、其の佛の覺體たるや、時間上より云へば無量の長壽者たり、空間的に云へば無障礙の大光明なり、又其の德より云へば大智慧大慈悲なり、而して其の體其德は皆清淨眞實の結晶にして、夫を果號の上に顯はし、諸佛に證明せしめ、以て衆生を救濟せんとするものなり、故に衆生は之を聞いて、信仰を發すも稱念するも、亦此れに由て無明を掃ふも、罪惡の消滅するも、皆此の彌陀名號海中の波瀾にして、更に吾人の迷想を假らざるものなり、之を名義に相應する如實修行の安心と云ふ。蓮如上人は之を機法一體の名號と云ひ、南無の二字は歸命の意、歸命と云ふは衆生が彌陀をたのみ意にして、機の方に屬し、阿彌陀佛とはたのみ衆生をたすけ救ふと云ふ意にして、法の方に屬し、此の兩者不離にして、機法もと一體に成就せるもの故、此の六字を衆生に施與し、衆生も亦機法一體となりて、住生成佛を得るなりと説けり、此の願行具足、機法一體は、真宗教義の中樞なり。

第九段 特殊の阿彌陀佛論

單に阿彌陀如來と云ふと云へど、經には幾多の代名あり、先づ其一二を擧ぐれば、無量壽如來これなり、無量壽とは即ち無限の生命にして、生れたる時もなく死する時もなし、

死する時はなくとも生れたる時あれば、始めに限りあり、又生れたる時はなくとも死する時があれば、終りに限りあり、然るに生死のなきは無始無終なり、轉變生滅の上に超越せるものなり、斯くの如き生死のなきものは、萬有界には絶無にして、現象世界には到底見ること能はざるなり、而して此の無量壽と云ふのは、絶對即ち宇宙の大靈を時間的に見たる詞にして、實在を豎より寫象したるものなり。次には無礙光如來これなり、無礙光とは即ち障りなき光にして、至る所に遍滿し居ると云ふ義なり、地上にも地下にも、日本にも露西亞にも、地球にも太陽にも、木星にも水星にも何處にても行き渡らざるはなし、斯く宇宙間至る所に存在し居るものは、元來何物なるや、水にも限りあり、空氣にも限りあり、太陽の光も或る星界には及ばずと云へり、果して然らば、宇宙間至る所に充滿し居るものは、宇宙の本體たる大靈の他に存せず、左れば無礙光如來と云ふは、宇宙の大靈を横より空間的に見たる名稱なり、豎に三世を貫き、横に十方に彌ると云ふものは、有限相對界にはなし、無限絶對の大靈なることは明白なり、左れば無量壽如來及び無礙光如來は、即ち此の宇宙の大靈を指す代名詞なり。尤も眞宗教旨の正意よりすれば、阿彌陀佛は酬因感果の報身佛にして、有始無終なれば、上述の如き法身如來の意を以て解すべき

に非ざれども、久遠の彌陀を論じ、法報不一不異なる佛教哲理の源底よりして彌陀報佛の靈體をしか觀釋するも不可なしとす。

又阿彌陀佛の阿とは三世の諸佛と云ふ意味に當りて、一切の根本を指すものなり、彌とは一切の聖衆にて此は萬有の相に當る、陀とは八萬の聖教にて此は總ての用を示せるものなり、即ち阿彌陀と云ふことは體相用の三大にして、宇宙の大靈そのものと、大靈の發動たる圓滿美妙の相好と、感化の大作用大威力を示したるものなり、而して此の阿彌陀を意譯すれば、絶對の救濟力とも、慈悲の靈光とも云ひ得るなり、要するに阿彌陀佛とは法藏比丘、又は釋尊の願力修行の効果が絶對と致一して、無限の大作用を爲す光景を形容したるものなり。

阿彌陀佛なるものゝ意味は上述の如くなるが、茲に一つの疑問あり。

三世十方に遍滿する如來が、何故に西方十萬億土に在るや、又何故に正像末の三時を論するや、絶對の救濟力にして、何が故に至心信仰のものに非ざれば、救濟する能はざるや。

十萬億土と云ふことは、凡夫と如來善と惡迷と悟との距離の遠隔を示したるものな

り、尤も距離の遠隔とても、眞に其間の離れ居るには非らず、立ち居る場所は同一所なれども、甲は東、乙は西と云ふが如く、全く正反對の方向に向へり、即ち方角を異にせるなり、而して其結果は十萬億土は勿論、如何に往くと雖も、互ひに出遇ふこと能はず、然るに凡夫が一朝翻然として、自己の方角の誤り居ることを覺り、迷より悟の方面に一廻轉を爲せば、佛とは脊中合せにして、直ぐに傍に在るを見る、是れ即ち西方十萬億土のはてに在る彌陀の淨土に、一念歸命即得往生を得る所以なり、十萬億土の距離と即得往生との兩意味を能く思考せば、矛盾の如くなれども、然も其實一大眞理の伏存するを發見するに難からざるなり。

又西方と云ふことは、一は印度の風習より來りしものにして、印度は即ち熱國なり、日の在る間は酷熱堪へ難しと雖も、日西天に没すれば西南東三面より、涼風滿まき來つて快味云ふべからず、東を熱とし、西を涼とするの自然より、遂に西天を渴望するに至りしなり、又一は西は物の終にして、支那五行の説等は克く此の意を表せり、眞言教の五佛五智の順序よりするも、同じ意味にして、中央の大日如來は精神の靈體なり、東方の阿闍如來は不動明王にして、意志の決定目的の基礎堅固なるを指し、所謂立志なり、北方の釋迦

如來は實行の標準にして、北方は實と陰とを以て實行の艱難苦勞を表し、南方の寶生如來は、成功して花の開き寶の生ずるものにして、南は陽氣なる愉快を表はせり、東の初め立志より北の實行の苦、南の成功の快にて、自修自度は終りたり、而かも精神の發動は獨り茲に止まらず、更に西の最終たる化他に向ひて慈悲の作用を爲すものなり、西方と云ふは比喩にして、自度の局化他を起すと云ふこと、精神發動の終局と云ふことを示せるものなり、本來は無東西の無礙光なれども、具體的に指方立相と云ふ事も亦決して無意味には非ず、従つて宗教上にては、理想的に觀することを具體的に表示するは答むべきに非ざるのみか、寧ろ肝要なりと云はざるべからず。

尤も淨土教としては指方立相を是認すべきものなりと同時に、此れには相應の理義を有するものなることは、既に本論に細説せるが如し。

正像末の三時とは、釋迦牟尼如來出世以來、正法五百年像法一千年末法一萬年等云ふ、佛教信仰より見たる機根論は固より可なるも、更に之を心理的に觀するときは、正法は道德的にて正義の時代なり、像法は善惡清濁併せ吞む餘裕の生じたる時代、末法は善惡を超越したる圓滿究竟の境界にて、所謂機根論とは正反對に漸進の次第を示せるもの

にして精神發展の極致、大靈同化の状態が末法なり、即ち終局たり、故に阿彌陀佛の救済が末法時代を主とすることは、化他の大悲が精神作用開發の終點なると同意味に搭るなり。

次に又絶對の救済力も信仰なくんば救済に預かるを得ずと云ふは、信とは絶對と相對、凡夫と如來、迷と悟とを連結せしむる所の媒介なり、迷界と彼岸との橋梁なり、心茲に在らざれば見れども見えず、信なくんば至る所に充滿し居る彌陀の救済力を感受すること能はず、信は良心の作用なり、佛性の發動なり、佛性動いて其本體たる如來を認むるは、恰も電線の一端を刺激して音信を通ずるが如きものなり、否、信心即彌陀にして、救済等云ふは寧ろ干遠至極なり、佛性の發動は如來なり、吾本來如來なり、佛凡不二なり、佛性の發動と否とにて二而となりし宇宙の大靈の一端が佛性なり、佛性一たび動いて大靈に同化否大靈の顯現し來るは論を俟たざるなり、尤も眞宗にては此の佛性の發動即ち信心そのものをも彌陀の廻向せる力なりと爲し、以て純他力教たるを闡明せり、そは立場と見方に依つて如何様にも論じ得べし。

又女人惡人皆成佛す、殊に絶對他力の功德は惡人正客たるに在り、涅槃經に人多くの

子ありて、愛に於ては父母は平等ならざるに非ざれども、獨り病める子に於て特に甚しとあるが如く、如來は罪惡の爲めに救済の大悲大願を發せられたり、宗教道德なるものは畢竟惡人の爲めなり、善人のみなれば宗教道德の要なし、惡人正客と云ふことは、此の意味より云ふも頗る興味あり、如來の心は惡人を捨てざるのみならず、惡人程あわれにいとしく思ふなり、左れば惡人と雖も決して自棄すべからず。

要するに阿彌陀なるものは、宇宙の大靈が救済的に發動したるものなり、悟の彼岸に立ちて迷界に於ける極惡の衆生を愛感して救済せんとする純化他の大活動力なり、更に又之を吾人の精神的に解すれば、吾人の精神が自修の極、化他的に開展せし場合なり、偉人の感化力なり、釋尊が不朽の徳用なり、聖教百代の法力なり、至心信解すれば直ちに彌陀同體、如來の靈光に攝收せらるべきは當然の結論たらずんばあらず。

第七章 極樂淨土

第一段 極樂淨土の起源

ピール氏の支那佛教連鎖に曰く、無量光天を阿彌陀佛の最初の住所と爲し、此の天と